

第2節 遺物

1 土器

縄文時代の包含層および攪乱出土、表面採集の土器、2,632点を一括して報告する。縄文時代早期前半から晩期まで、第9表のように分類した。群は時期を、類は型式を基調にしており、類は文様・形態により、種として細分している。また、類ごとに分布図（第50～54図）を作成した。

出土比率は、I群が7%、II群が26%、III群が50%、IV群が6%、V群が3%、VI群が4%と、早期後半の資料（II群+III群）が圧倒的に多く、分布も南尾根から南西谷部にかけての地域に集中している。分布図からは、同じII群の中でも、型式ごとに、分布の中心が微妙に移動している様子が見てとれる。

なお、VII群の晩期の土器は1点、土製品は3点出土している。

第9表 縄文時代 出土土器分類一覧

群	時期	類	型式	種	文様	
					1	2
I	早期前半	a	押型文	1	山形文を施したもの	
				2	山形文と横円文の複合文を施したもの	
		b	撚糸文	1	沈線文と口唇部に刺突文を施したもの	
		c	判ノ木山西式	2	沈線文と刺突文を施したもの	
				3	沈線文のみを施したもの	
				1	半截竹管状工具による刺突文、沈線文を施したもの	
		a	子母口式に併存する土器	2	その他の工具による刺突文、沈線文を施したもの	
				1	絶条体压痕文のみを施したもの	
				2	絶条体压痕文と細隆起線文を施したもの	
				3	絶条体压痕文と細隆起線文、沈線文を施したもの	
II	早期後半	b	清水柳E類	4	細隆起線文のみを施したもの	
				1	野鳥式	
		d	鶴ヶ島台式	2	茅山下唇式	
		e	茅山上唇式	3	茅山下唇式	
		f	八ッ崎式	4	八ッ崎式	
		g	船底式	5	船底式	
		h	上ノ山式	6	上ノ山式	
		i	入海式	7	入海式	
		j	打越式	8	打越式	
		k	前期後半	1	条痕文を施したもの	
				2	無文のもの	
				3	施文を有するもの	
IV	前期	a	北白川下唇式			
		b	諸織b式			
		c	諸織c式			
		d	十三善接式			
		e	型式不明の土器	1	縄文を施したもの	
				2	無文のもの	
V	中期	a	五領ヶ台式			
		b	勝板式			
		c	曾利式			
		d	型式不明の土器	1	把手	
				2	縄文を施したもの	
				3	無文のもの	
VI	後期	a	称名寺式			
		b	瓶之内式			
		c	型式不明の土器	1	縄文を施したもの	
				2	その他施文を施したもの	
				3	無文のもの	
VII	晩期		型式不明の土器			
		土製品				

(1) 第Ⅰ群土器：早期前半

a類：押型文土器（第55図45～50）

早期前半の資料である押型文土器を分類した。どの資料にも繊維痕は確認できなかった。第Ⅰ群b類（撚糸文土器）と同時期の資料であると推定される。

1種：山形文を施したもの（45～47）

45は胴部片である。原体を縦位に施文している。破片下部に横位の沈線が確認でき、区画を行っていた可能性も考えられる。器厚は薄く、焼成もしっかりしている。

46は口縁部片である。原体を縦位に施文している。向きの異なる山形文を組み合わせて、菱形に近い形を作り出している。器厚は薄く、焼成もしっかりしている。やや軽じような胎土の資料である。焼成や施文から47と同一個体である可能性も考えられる。なお、46と同一個体と考えられる土器に付着していた炭化物のうち2点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、 $9,205 \pm 30$ yrBP (PLD-17444)、 $9,230 \pm 30$ yrBP (PLD-17446) の ^{14}C 年代値が確認された（詳細は「東野遺跡II」附編を参照）。この値は当該期の資料として整合性を有している。

47は底部片である。原体を縦位に施文している。尖底であるため、施文は乱れており判然としないが、底部付近まで確認できる。やや軽じような胎土の資料であり、46と同一個体である可能性も考えられる。

2種：山形文と梢円文の複合文を施したもの（48）

48a～cは同一個体と考えられる胴部片である。48aは、下部に横長の梢円文、無文帯を挟んで、上部に山形文を施している。48bは、上部に横長の梢円文、無文帯を挟んで、下部には円形に近い梢円文を施している。円形に近い梢円文は、横長のものに比べて粒も大きい。48cでは、上部無文帯の下に、円形に近い梢円文のみが施されている。原体の施文方向はすべて横位である。ただ、48aの山形文は、観察できるのは1列のみであり、その直上に梢円文らしき施文も見られることから、原体端部の山形状になっている部分が重なり、偶然できた可能性も考えられる。

b類：撚糸文土器（第55図49）

早期前半の資料である撚糸文を分類した。どの資料にも繊維が確認された。いわゆる駿東撚糸文系土器であり、第Ⅰ群a類（押型文）と同時期の資料であると推定される。

49は口縁～胴部片である。施文は繰り返し行われており、縦位を主体として異方向に交差する。口縁は緩やかな波状を呈しており、口唇部にも撚糸による施文が認められる。口縁部には両面からの穿孔が認められる。

c類：判ノ木山西式土器（第55図50～54）

先割状工具によって沈線文を施したものを、判ノ木山西式土器の一群として分類した。後述するが、一部の土器については、第Ⅱ群a類（子母口式に併行するもの）との完全な分離は不可能であった。報告の都合上、早期前半と後半に分離させてしまったが、ある程度重複している可能性を考えながら報告を行う。

1種：沈線文を施し、口唇部に刺突を施したもの（50～52）

50～52は口縁部片である。50は斜位の沈線が不規則な間隔で施されている。角度をもった波状口縁である。51は緩やかな波状口縁である。52は外面にやや弧を描くように斜位の沈線が施されている。いず

れも、口唇部に先割状工具による刺突が、密接して施されている。2・3種の資料と違い、胎土に白色粒子や岩片をほとんど含まず、纖維を多量に含む。田戸上層式の末期、口縁部外面が簡略化する時期から、判ノ木山西式に移行する過渡期の資料と考えられる。

2種：沈線文と刺突文を施したもの（53）

53a・bは口縁部片である。内外面に条痕による調整を横位に施した後、外面に斜位の細沈線を格子状に施す。口唇部には、ヘラ状工具による刻みが施されている。刻みは2連で1組となっている。53bは胴部片である。棒状工具による刺突が確認できる。胎土に白色粒子や岩片を多量に含む。なお、同一個体と考えられる破片が、2号石器集中範囲内からも出土している。

なお、2号石器集中範囲内からは別個体も出土しており（36）、記載はそちらで行った。

3種：沈線文のみを施したもの（54）

54は胴部片である。内外面に条痕による調整を横位に施した後、外面に縦位の沈線を密接して施している。胎土に白色粒子や岩片を含む。

（2）第II群土器：早期後半

a類：子母口式土器に併行するもの（第55図55～60）

口縁部付近に、主として刺突文を施したものを、早期後半の子母口式土器に併行する一群であると判断して分類した。60を除き、すべて口縁部片である。いずれも纖維を含んでおり、黒雲母を多量に有した資料が大半である。どの資料にも条痕は確認できなかった。

1種：半截竹管状工具による刺突文または沈線文を施したもの（55～58）

55a・bは同一個体と考えられる。55aは、口唇部直下から、半截竹管状工具による幅広の沈線を、やや斜位に、連続して施している。その下には、同じ工具による刺突を斜め右下から行っている。刺突は横位に列状になっている。同じ口縁部でも、55bは、口縁部直下に、口縁に沿った刺突列が加わっている。いずれも口唇部には斜位に刻みを施している。内面にも、同じ半截竹管状工具による刺突を施している。刺突は真上から行われており、外面の刺突とは曲部の方向が異なっている。刺突は、外面同様、横位に列状になっている。

56は、半截竹管状工具による平行沈線を斜位に施した後、その間を3連で1組の刺突で充填している。刺突は斜め右下からやや長めの押し引き状に行われており、平行沈線に沿って、斜位に列状に施されている。

57は、口縁部直下から、半截竹管状工具による刺突を、斜位に列状に行っている。刺突は斜め右下から行われており、2列を1組として連続している。口唇部には、ヘラ状工具による刻みが斜位に施されている。

58は、3つに先割した竹管状工具によって、同様の刺突列が施される。

55～58は、胎土に石英や長石の粒子を含み、特に黒雲母を多く含んでいる。いずれも条痕は確認できなかった。そのため、子母口式土器よりも前段階の資料である可能性も考えられる。また、施文に先割状工具を用いていることから、第I群c類（判ノ木山西式）との関連も指摘される。

2種：その他の工具による刺突文または沈線文を施したもの（59・60）

59a・bは、口縁部直下に、口縁に沿って「く」の字状の刺突が施されている。刺突の原体は判然とし

ないが、内部に縄目が確認されるため、縄の結び目を瘤状にして押し当てていると推測される。地文として、内外面とも先割状工具による沈線が異方向に施され、59aではそれを曲線文が上書きしている。口唇部にも、おそらく外面の刺突文と同様と考えられる原体で、刺突が施されている。

60は、横位の刺突列が施された胴部片である。刺突の原体は判然としないが、59同様、縄の結び目を瘤状にして押し当てていると推測される。胎土に石英や長石の粒子・岩片を多量に含む。

59・60とも纖維を多く含むが、1種と異なり黒雲母は含まない。

b類：清水柳E類土器（第55・56図61～71）

絡条体圧痕文を施した資料を中心に分類を行った。しかし、絡条体圧痕文が確認できない資料の中にも、胎土・焼成などに共通性を有する4種のような資料も確認できたため、本類に一括した。また、資料の全てに多量の纖維が含まれている。

1種：絡条体圧痕文のみを施したもの（61～66）

61・63は口縁部片、62・64は胴部片である。施文は全て横位に行われている。61・62は軸に角棒を用い、その角を使って施文している。61はやや幅広に、62は短く施文している。63・64・66は、原体を強く押しつけて施文されており、原体の窪みが確認できる。63は口唇部にも絡条体圧痕文を施している。また、61～63には、内外面に擦痕による調整が確認できる。

65a・bは、同一個体と考えられる口縁～胴部片である。絡条体の軸は確認できない。口縁部直下と、胴部無文帯との境目に、絡条体圧痕文を横位列状に施し、その間を、絡条体圧痕文列によって作り出された三角形状のモチーフで充填している。列は、場所によってばらつきが見られるが、4列が単位と推測される。65a・bともに、尖るようにな形された波状口縁の口縁部片だが、65aは内面側を、65bは外側を窪ませるように成形されている。描かれた三角形状のモチーフは、組み合わさって鋸歯状を呈しており、一見すると第II群g類（ハッ崎式）の施文に酷似している。しかし、屈曲部を持たず、条痕も確認できない。また、分布も他の第II群b類（清水柳E類）の資料と同様に、H-6グリッド付近であることから、本類と判断した。

66は口縁～胴部片である。絡条体は幅広の軸である。口縁部直下に、縦位および斜位の絡条体圧痕文を、4列を1単位として組み合わせ、施文を行っている。文様帯と無文帯の間は、横位1列の絡条体圧痕文で区分されており、文様帯は非常に狭い。絡条体圧痕文は、中央縦位、左側斜位、横位、右側縦位の順に行われている。最後に行われた右側縦位の施文のみ、原体が異なっている。あるいは、半截竹管状工具による上からの連続刺突文の可能性もあるが、定かではない。纖維を多量に含み、非常に厚みを有した資料である。

2種：絡条体圧痕文と細隆起線文を施したもの（67）

67a・bは口縁部片である。67aは、口縁部直下に2条の細隆起線を施し、その中を非常に細かい絡条体圧痕文で充填している。絡条体圧痕文は、横位、斜位の両方が確認できる。文様帯は、他の資料と比べ非常に狭くなっている。細隆起線には絡条体圧痕文は施されていない。口縁は緩やかな波状を呈し、口唇部には斜位の刻みが施されている。また、両面からの穿孔が確認できる。67bは同一個体と考えられるが、細隆起線による区画の中に、絡条体圧痕文は確認できない。いずれも纖維を含み、内外面に擦痕による調整が確認できる。

3種：絡条体圧痕文と細隆起線文、沈線文を施したもの（68～70）

68a・bは胴部片である。横位の細隆起線を貼付して、上部の文様帶を区画している。文様帶には、絡条体圧痕文を横位に施している。圧痕文は、角棒状の絡条体の角を用い、短く施文されている。また、上部から垂下する形で、縦位の細隆起線も貼付している。細隆起線上には、全て絡条体が押圧されている。68bでは、区画された一部に縦位の沈線も確認できる。いずれも外外面に擦痕による調整が施されている。

69は口縁～胴部片である。口縁部直下に横位の細隆起線を貼付し、そこに絡条体圧痕文を施している。その下には、横位と斜位の絡条体圧痕文を組み合わせて施文している。また、文様帶と無文帶の境には横位の細沈線が施されている。外外面に擦痕による調整が確認できる。23号集石より、同一個体と考えられる1破片が出土している。

70a～jは、同一個体と考えられる口縁～胴部片である。文様帶が細隆起線、沈線によって区画されているが、区画されたスペースによって施文が微妙に異なり、モザイク状を呈している。胎土に白色岩片を多く含み、外外面に擦痕による調整が確認できる。なお、一部は25号集石から出土しており、他の破片も、25号集石の南西側に、やや散漫に分布して出土している。

70a～cは口縁部片である。口唇部には斜位の刻みが施されている。口縁に平行して横位の細隆起線を貼付し、その間を沈線によって充填している。この際、70aは斜位の沈線、70bは逆向きの斜位の沈線、さらに70cでは格子状の沈線を施している。また、70bは、口唇部を覆うように縦位の細隆起線を垂下させている。横位の細隆起線には絡条体圧痕文が施されているが、縦位の細隆起線には施されていない。70aでは、細隆起線の直下に、横位の沈線が2条施され、それを上書きするように格子状の沈線が施されている。さらに、その下部には絡条体圧痕文が横位に施されている。

70d～jは胴部片である。70d～fは上部に絡条体圧痕文、下部には格子状の沈線が施されている。70e・fでは、両者の間に横位の沈線が施されているが、70fでは明確に区分されているのに対して、70eでは沈線を飛び越えて絡条体圧痕文が施されている。絡条体圧痕文は、横位と斜位のものが観察される。また、70d・eでは、縦位の細隆起線が貼付され、文様帶が区画されている。70dの細隆起線は、貼付後に指でつまんで調整しており、指頭の痕が確認できる。70eの縦位の細隆起線には、左方向から先割状工具で刺突が加えられている。70g～iは、文様帶と無文帶の境付近である。両者の境には細隆起線が横位に貼付されており、70gには絡条体圧痕文が見られないのに対して、70h・iには絡条体圧痕文が施されている。細隆起線の直上には、格子状の沈線が施されている。70iでは、文様帶の最下部まで、縦位の細隆起線で区画されているのが確認できる。70jでは、絡条体圧痕文列が斜位に交差している。

4種：細隆起線文のみを施したもの（71）

71は口縁部片である。口縁部直下に細隆起線を貼付して、その下に斜位の細隆起線を組み合わせて、三角形状の区画を描いている。施文のモチーフは第II群c類（野島式）に酷似している。口縁は波状を呈している。内面には擦痕による調整が確認できる。

c類：野島式土器（第57図72～76）

沈線文を施した資料を中心に分類した。沈線文は、断面が凹線状を呈する、幅広なものが主体である。胎土に白色粒子・岩片を多く含み、どの資料にも纖維が確認された。

72は口縁～胴部片である。直径15cm程度の小型の資料である。口縁部直下から沈線を垂下させ、そこを境として斜位の集合沈線を綾杉文状に施している。外外面には横位の条痕による調整が明瞭に施されており、施文は斜位の沈線、縦位の沈線の順に行われている。また、文様帶と胴部無文帶の間には段

が形成されている。口縁部は平縁であり、口唇部には棒状工具による刻みが密接して施されている。

73a～cは、同一個体と考えられる口縁部片、胴部片である。73aは、横位の沈線を施した上から、3条で1連の沈線を垂下させている。その右脇には斜位の沈線、左脇には斜位の細沈線が観察される。73bは、2条の細沈線を斜位に施して区画を行い、その両側を逆向きの沈線で充填している。口唇部には棒状工具による刻みが施されている。73cは、同一個体と考えられる胴部片である。文様帶と胴部無文帶との境に区画や段は確認できない。内面には擦痕による調整が確認できる。

74a・bは、同一個体と考えられる口縁部片、胴部片である。74aは、口縁部直下に、平行する細沈線を2条施し、その間を無文帶としている。その下には集合沈線をやや斜位に施している。口縁部は平縁であり、口唇部には棒状工具による刻みが密接して施されている。74bは、2条の細沈線で三角形状の区画文を描き、区画内を斜位の集合沈線で充填している。施文は細沈線、沈線の順に行われている。また、文様帶と胴部無文帶との境に区画や段は確認できない。外外面に、横位～縦位の擦痕による調整が確認できる。なお、74bの1破片は35号土坑から出土している。

75は胴部片である。施文が薄く判然としないが、74と同様に、2条の細沈線で三角形状の区画文を描き、区画内を斜位の沈線で充填している。施文は沈線、細沈線の順に行われている。内面に横位の擦痕による調整が確認できる。

76は胴部片である。垂下させた2条の細隆起線で区画を行い、横位の沈線と、綾杉文状に施文した斜位の集合沈線によって、菱形状のモチーフを形成している。細隆起線上には、棒状工具による刺突が施されている。施文は細隆起線、横位の沈線、斜位の沈線の順に行われている。72～75と比較して、厚みを有した赤茶色を呈する資料である。

d類：鶴ヶ島台式土器（第57図77）

細隆起線文と沈線文で幾何学形のモチーフを描き、細隆起線文上に刺突文を施したもの分類した。沈線文は、断面が凹線状を呈する幅広なものが主体である。

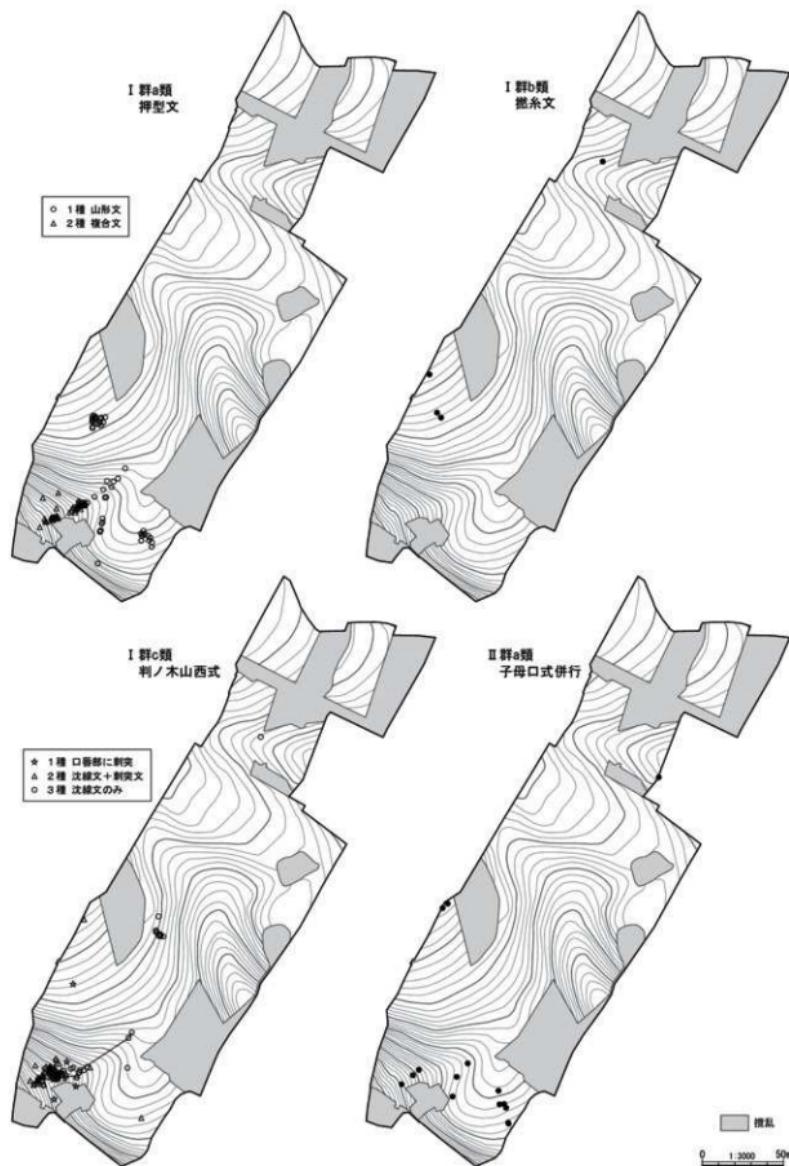
77a～cは同一個体と考えられる口縁～胴部片である。3本1組の細隆起線を垂下させ、それを中心として、細隆起線で幾何学形のモチーフを描き、一部を縦位～斜位の集合沈線で充填している。細隆起線の交点上に棒状工具による刺突が施されるが、交点以外や沈線上にも刺突が確認できる。頭部と胴部に2ヶ所の段を持ち、頭部の段の無文帶を境に、上下2段の文様帶が構成される。ただ、垂下する3本の細隆起線は上下文様帶を貫いており、後述の、三角柱状把手と皿状小突起の下位に配されていたと推測される。真上から見た形状は円形ではなく、ラグビーボール状に近い梢円形である。口縁部は波状をなし、梢円の長軸端に三角柱状把手、短軸端に皿状小突起が、それぞれ2ヶ所配されていた可能性も考えられる。胎土に纖維を含む。内面は横位～斜位の擦痕調整で、条痕は確認されなかった。

77aは、三角柱状の把手である。3本1組の細隆起線が垂下している。口唇部は、棒状工具による刻みが密接して施されている。77bは口縁部である。波状口縁であり、内傾していると推測される。破片右側の口唇部には皿状の小突起が確認でき、棒状工具による刺突が施されている。77cは、口縁～胴部である。2ヶ所の段部が確認できる。わずかに残る胴部無文帶には、横位の擦痕が確認できる。

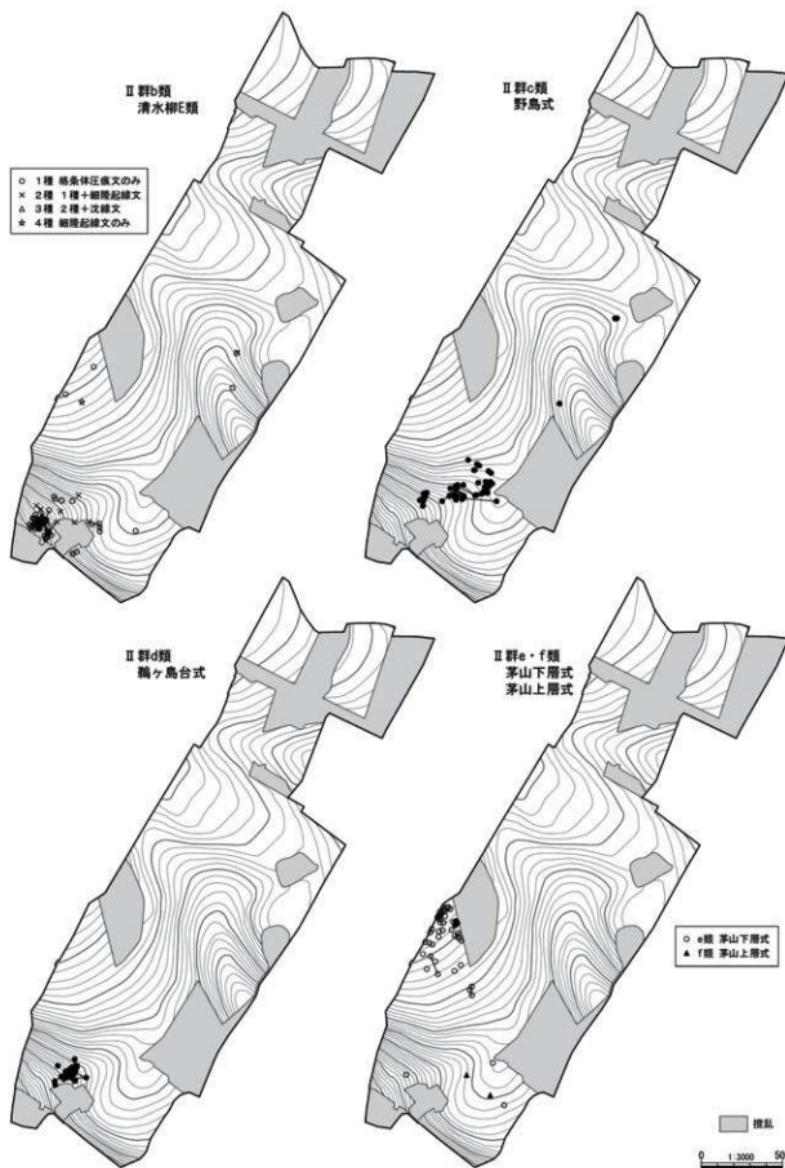
e類：茅山下層式土器（第58図78～87）

沈線文と刺突文を施すもので、明瞭な段部を有する資料を分類した。他の第II群土器と比較して、やや砂質な資料が多く確認できる。

78a・bは、同一個体と考えられる口縁～胴部片である。78aは波状口縁である。口縁部直下に、半截竹管状工具による横位の沈線を2条施し、その下の文様帶を、同じ工具による不規則な曲線で充填して



第50図 縄文時代 土器分布（1）



第51図 繩文時代 土器分布（2）

いる。その後、沈線の隙間を、半截竹管状工具による刺突で埋めている。口唇部はナデによって平坦に調整され、口唇部の外側の角には棒状工具による刻みが施されている。78bは、胴部無文帯が大半を占めるが、破片上端に屈曲部が認められ、わずかに刺突も確認できる。無文帯上部および内面は、条痕で調整されている。78aの文様帯が段部を越えて施文が続いている点や、78a・bの屈曲部の傾斜が異なることから、2段の屈曲部を有していたことが推測される。

79a・bは、同一個体と考えられる口縁～胴部片である。78同様、竹管状工具による沈線文と刺突文で構成されるが、施文の順番は、刺突文を施した後、沈線文で上書きしている。2段の屈曲部を持ち、上下の文様帯に分かれているが、下部文様帯は刺突文中心の施文構成である。口唇部はナデによって調整され、外側の角には棒状工具による刻みが施されている。内面は条痕で調整されている。

80a～cは、同一個体と考えられる口縁～胴部片である。80aは、緩やかな波状の口縁部片である。繩文を地文とし、口縁に沿うようにして、幅広の沈線で押し引きを施し、その下には同じ工具で曲線を描いている。また、口唇部はナデによって内側を削ぐように調整しており、口唇部の外側の角には棒状工具による刻みが施されている。80b・cは屈曲部を有する胴部である。80bの屈曲部には、棒状工具による刺突が施されている。80cの屈曲部には施文がないことから、2段の屈曲部を有していたことが推測される。胎土に纖維を多く含み、内外面とも擦痕で調整されている。

81～83は屈曲部を有する胴部片である。81・82は、屈曲部に刻みを施し、その上下に刺突列を施している。82は刺突列が曲線状を呈している。2点とも屈曲部の上下に文様帯を有していることから、屈曲部が2段存在していると推測される。83は、内外面に条痕を施したのち、屈曲部に半截竹管状工具による刺突列を施している。

84～87は口縁部片である。84は繩文を地文としている。その他の施文は確認できないが、別の部位では刺突文、もしくは沈線文を施していたと推測される。口唇部には棒状工具による刻みが施されている。内面には擦痕が確認できる。85は、幅広な沈線の押し引きによって、三角形状のモチーフを施文している。確認されている部位が極小であるため、全体像が判然としないが、鋸歯状に近いモチーフであることが推測される。口唇部の外側の角には刻みが施されている。86は、口縁に沿う形で、幅広の棒状工具による押し引きを行っている。口唇部はナデによって平坦に調整されており、口唇部の角には内外面に刻みが施されている。87は、内外面に条痕を施したのち、縦位の沈線を3条施し、沈線間の一つを斜位の短沈線で埋めている。口唇部には刻みが施されている。胎土に纖維を多く含み、黄灰色を呈する東海系の資料である。

f類：茅山上層式土器（第58図88～90）

沈線文と刺突文を施して、緩やかな段部を有する資料を分類した。第II群e類（茅山下層式）と比較して、施文が簡易な資料が多くなっている。図示した資料は全て口縁の波頂部であり、纖維を多量に含んでいる。

88は、口縁直下に斜位の沈線を連続して施している。この沈線は、爪形文が非常に長く変化したものと推測される。皿状突起の平坦部にも刻みが施されている。内面にも斜位の細沈線文が施されている。

89は、条痕文を縦位・斜位・横位に施している。波頂部は湾曲しながら細長い皿状を呈しており、ナデによって平坦に調整されている。

90は、波頂部から垂下するように隆帯を厚く貼付け、その両脇に繩文を横位に施している。繩文の一部は隆帯にかかっている。外面に刺突文や沈線文は確認できなかった。波頂部上面は三角形状をなし、ナデによって平坦に調整されている。一部には刻みが施されている。

遺構からは、7号集石から28が出土しており、記載はそちらで行った。

g類：八ヶ崎式土器（第58図91～94）

刺突文を鋸歯状に施し、文様帯と無文帯を区別する段部を有したものを分類した。胎土に白色粒子・岩片を多く含んだ、焼成のしっかりした資料が多く確認された。纖維を多量に含んでいる。

91～93は口縁部片である。91は、半截竹管状工具による爪形文を鋸歯状に施文している。文様帯が比較的狭く、屈曲も弱い。口縁部は緩やかな波状縁である。口唇部に施された刻みは深く、鋸歯状を呈する。92は棒状工具による米粒状の刺突、93は丸みのあるヘラ状工具によると推測される大粒の刺突を、それぞれ鋸歯状に施文している。いずれも波状口縁で、波頂部は口唇部がやや広くなっている、刻みが施されている。92は外面の地文に、93は内面に条痕が確認できる。

94は、緩やかな屈曲部を有する胴部片である。文様帯には爪形文が矢羽根状に施文されている。

遺構からは、20号土坑から17が出土しており、記載はそちらで行った。

h類：柏畠式土器（第58・59図95～106）

ヘラ状工具による刺突列を2～3条施し、文様帯と無文帯を区別する段部を有しないものを分類した。なお、刺突は大半が爪形文である。胎土に白色粒子・岩片を含んだ、焼成のしっかりした資料が多く確認された。纖維を多量に含み、99・101を除き、内外面に条痕調整を施している。

95～100は口縁部片である。全て口唇部には刻みが施されている。95～98は波状口縁である。口縁直下に、口縁に沿って刺突列を施している。2条目の刺突列は、離れているもの（95・99）と密接しているもの（96・98）、部位によって異なるもの（100）が見られる。

96は、口唇部の内面側と外側で、異なる刻みが施されている。

98は口縁～胴部である。口縁に沿って2条の刺突列を施し、間隔をあけて、胴部にも1条の刺突列を施している。内面にも、口縁に沿って1条の刺突列を施している。刺突は、大型の米粒状を呈している。口縁は波状であり、口唇部にも棒状工具による刺突が施されている。波頂部には突起が設けられていると推測されるが、欠損しているため不明である。

100はラッパ状突起である。片側および内面側が欠損しており、全形は判然としないが、長さ10cm前後に達する大型の梢円形であると推測される。

101～105は胴部片である。全て刺突列が確認できる。1条目の刺突列が口縁部付近にあることから考えると、大半の資料が胴部の刺突列であることが推測される。

106は、外面に条痕による調整を施した後、縄文を施して地文とし、最後に刺突を行っている。緩やかな波状口縁で、波頂部はわずかに皿状を呈しており、上面はナデによって平坦に調整され、刻みが施されている。内面の一部にも条痕が確認できる。

遺構からは、20号土坑から18が、21号土坑から21が出土しており、記載はそちらで行った。

i類：上ノ山式土器（第59・60図107～116）

口縁部付近に隆帯を貼付して、そこに指頭による押圧を施したものを見分類した。

107～110は薄手で灰褐色を呈した東海系の土器、111～116は厚手で赤茶色を呈した在地系の土器である。107・108・115を除き、条痕は確認できない。

107・108は口縁～胴部片である。口縁部直下に隆帯を貼付して、そこに指頭による単方向押圧を施している。この指頭押圧は、口唇部にも施される。地文として、内外面に横位の条痕が確認できる。

109は口縁～胴部片である。口縁部直下に隆帯を2条貼付して、そこに指頭による交互押圧を施している。

110a・bは同一個体と考えられる口縁～胴部片である。口縁部付近に隆帯を貼付して、そこに指頭に

よる交互押圧を施している。隆帯は、一部に途切れている個所があり、螺旋状に貼付していた可能性も考えられる。口唇部にも指頭押圧が施されている。

111は口縁～胴部片である。砲弾形深鉢であり、底部を除き、ほとんどの部位が残存している。口縁部直下に2条の隆帯を貼付して、そこに指頭による單方向押圧を施している。1条目の隆帯は環状と考えられるが、2条目は部分隆帯となっている。口唇部には、棒状工具による刻みが施されている。口径が30cm近くあり、大型の在地系の資料である。

112～115は口縁部片である。口縁部直下に1条の幅広隆帯を貼付して、そこに連続刺突を不規則に施している。112～114は指頭またはヘラ状工具を、115は細い棒状工具を施文具としていると推測される。いずれも、口唇部に棒状工具による刻みを施している。115は外面に条痕が確認できる。

116は口縁部片である。口唇部に隆帯を貼付して、そこに指頭による交互押圧を施し、口唇部が波打つように成形している。口縁部直下には、隆帯は確認できなかった。

j類：入海式土器（第61図117～120）

口縁部付近に隆帯を貼付して、そこにヘラ状工具による刻みを施したものを見分類した。

117は薄手で灰褐色を呈した東海系の土器で、内外面に条痕が施されている。口縁部は平縁である。118～120は厚手で赤茶色を呈した在地系の土器で、条痕は確認できなかった。すべて波状口縁の口縁部片である。

117は、口縁部直下に3条の隆帯を貼付し、そこにヘラ状工具による刻みを施している。刻みは大きく抉るような形で施されており、指頭による单方向押圧と似通っている。下部の2条は隆帯が途中で切れている。口唇部には刻みが施される。

118は、口縁部直下に斜位の部分隆帯を貼付して、そこにヘラ状工具による刻みを施している。その下部には横位の隆帯を貼付し、そこに指頭状の单方向押圧を施す。この横位の隆帯は、斜位の隆帯に比べて幅広である。口唇部にはヘラ状工具による刻みが施される。

119は、口縁端部に幅広隆帯、その下にも隆帯を貼付して、そこにヘラ状工具による刻みを施していると考えられるが、摩耗が激しく判然としない。

120は、口縁部直下に2条の比較的細い隆帯を貼付して、そこに棒状工具による刻みを施している。

117は指頭押圧に似た大きく抉れた刻み、118は指頭による押圧、119は幅広隆帯と、それぞれ第II群i類（上ノ山式）の要素を残している。おそらくは、上ノ山式から入海式に移行する中での、過渡期的な資料と考えられる。

k類：打越式土器（第61図121）

貝殻腹縁による施文を行っているものを分類した。

121は口縁部片である。口縁部直下に斜位の条痕を施し、その上から貝殻腹縁による押し引きを行っている。小片であるため判然としないが、この貝殻腹縁による施文は山形状であったことが推測される。また、口唇部には棒状工具による刻みが施されている。

遺構からは、22号土坑から23が出土しており、記載はそちらで行った。

（3）第III群土器：早期後半～前期初頭の型式不明の土器

1種：条痕文を施したもの（第61・62図122～134）

条痕を施している資料で、型式不明なものを分類した。すべて纖維痕を有している。外面の条痕が明瞭で、調整というよりも、文様として施文されたと推測されるものを分類した。

i) 口縁部片 (122~127)

122・123は、内外面に横位の条痕を施している。口唇部はナデにより平坦に調整したのち、棒状工具による緩やかな沈線が引かれている。123は東海系の土器である。

124は、外面に横位の条痕を施している。口縁部は外反している。

125は口縁部～胴部片である。まず初めに横位の条痕を施し、それを部分的に磨り消して、その上から斜位の条痕を施している。なお、口縁部付近は横位の条痕が残されている。また、胴部の一部には、数条の縦位の沈線が見られるが、沈線は乱れており、意図的な施文かどうかは不明である。器形は口縁部が外反し、胴部はやや膨らむ形となっている。第II群b類(清水柳E類)と重複して出土している。

126a～cは、同一個体と考えられる口縁部～底部である。外面に条痕が施されているが、内面の一部には判然としない箇所が存在する。外面は基本的に縦位の条痕であるが、異方向に施文されている。内面は横位～斜位の条痕が施されているが、底部付近には確認できなかった。丸底の資料である。

127は口縁～胴部片である。口縁部は緩やかな波状を呈する。外面に縦位の、内面には横位の条痕を施している。風化が激しいため外面の施文は判然としないが、内面の口縁部付近は明確に残存している。

遺構からは、2号石器集中から37が出土しており、記載はそちらで行った。

ii) 胴部片・底部 (128~134)

128は、外面に縦位の条痕を施している。内面には縦位の条痕を施した後、横位の条痕を施している。

129は、外面に横位の、内面には縦位の条痕を施している。

130は、内外面ともに斜位の条痕を施している。第II群i類(上ノ山式)の112と、胎土や焼成に共通点を有している。

131は、外面に縦位の条痕を施しているが、内面には確認できない。外面からの穿孔が確認できる。

132は、外面に斜位の条痕を施しており、内面も弱く条痕で調整している。第II群i類(上ノ山式)の107と重複して出土しており、焼成は若干異なるが、胎土や器厚から同一個体である可能性も考えられる。

133は平底の資料である。外面に横位の条痕が施されているが、風化が激しく判然としない。在地系の土器であり、器厚は厚く、胎土は砂質である。

134は尖底の資料である。内面に縦位の条痕がわずかに確認できる。在地系の土器である。

2種：無文のもの (第62・63図135~140)

胎土に纖維痕を含んでいる資料で、型式不明な無文の土器を分類した。

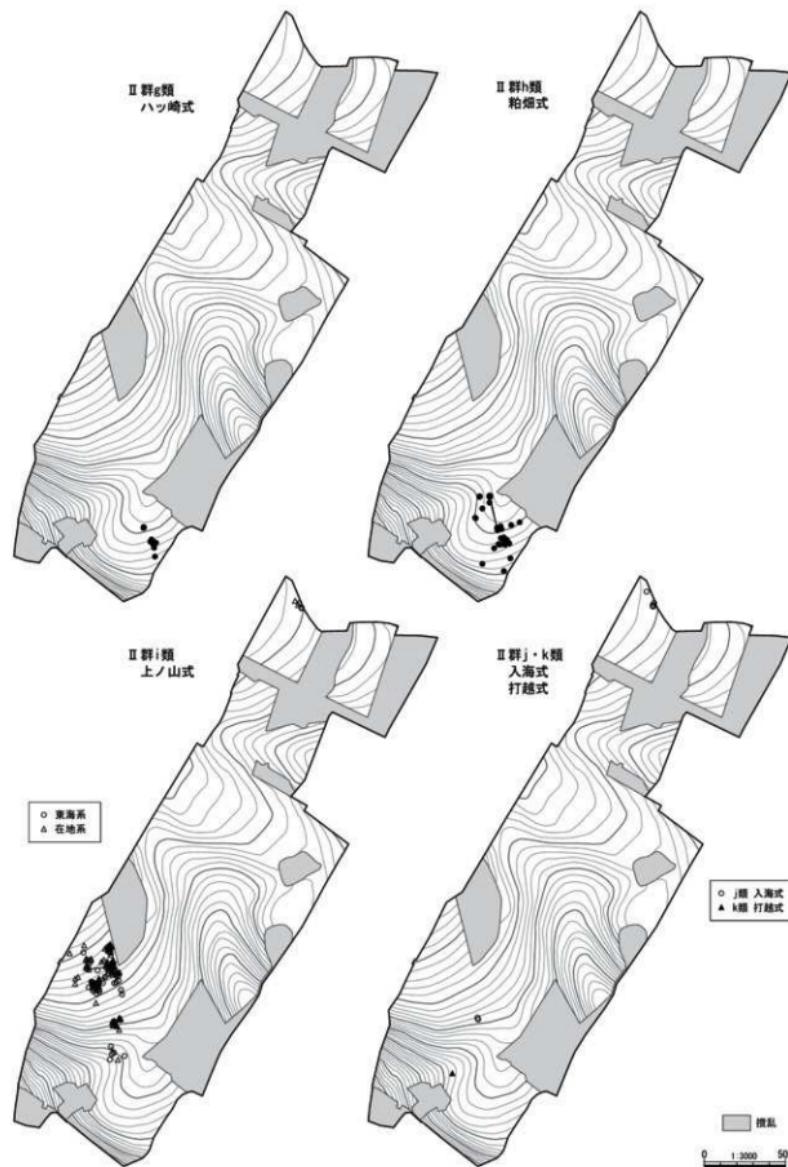
i) 口縁部片 (135・136)

135・136は波状口縁で、在地系の資料である。135は外面を擦痕によって調整している。口唇部に刺突は見られないが、第I群c類(判ノ木山西式)の1種と、胎土や焼成に共通点を有しており、同時期の資料であると推測される。136は口唇部をナデによって平坦に調整している。胎土に白色粒子・岩片を多く含む。

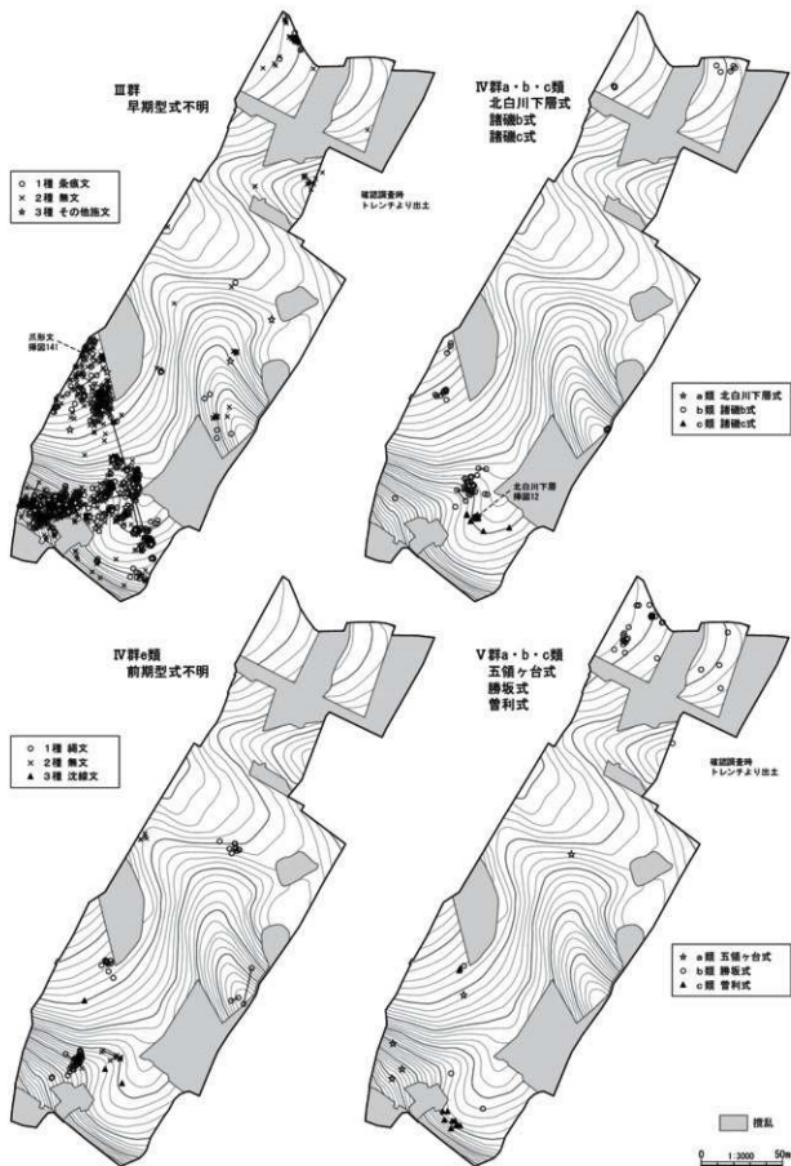
ii) 底部 (137~140)

137は胴部～底部である。尖底であり、底部は乳頭状にやや膨らみをもっている。内面に条痕のような沈線が僅かに確認できるが、風化が激しく判然としない。在地系の土器である。

138は緩やかな尖底である。在地系の土器であり、非常に厚みを有している。第II群b類(清水柳E類)と重複して出土している。



第52図 縄文時代 土器分布（3）



第53図 縄文時代 土器分布（4）

139はやや上げ底状の底部であり、東海系の土器である。

140は上げ底状の平底であり、在地系の土器である。外面は擦痕によって調整されている。底部に比べ、胴部は極端に薄くなっている。

3種：施文を有するもの（第63図141）

胎土に纖維痕を含んでいる資料で、型式不明な爪形文の土器を分類した。

141は胴部片である。爪形文による刺突を、横位列状に施している。刺突は密接しており、一本の線のようである。刺突列はほぼ等間隔で3条施されており、その間を指でナデていると推測される。器体はやや外反している。纖維を含んでいることから、前期初頭の資料であることが推測されるが、類例に乏しく判然としない。あるいは、草創期後半の資料である可能性も考えられる。

（4）第IV群土器：前期

a類：北白川下層式土器（第23図12）

当該資料は包含層からは出土しなかった。17号土坑の覆土から12が出土しており、記載はそちらで行った。

b類：諸磯b式土器（第63図142～148）

142は深鉢の口縁～胴部である。縄文を地文としている。口縁部文様帶には、平行沈線による鋸歯状文を組み合わせ、菱形文を施文していると考えられる。また、鋸歯状文によって区画された中には、弧状の沈線を施している。胴部には、2条1組の平行沈線を、繰り返し横位に施している。器形はキャリパー状であり、口縁部は屈曲に近い急角度で内湾し、胴部はやや膨らむ形となる。波状口縁であり、波頂部には瘤状の貼付文を有している。

143a・bは、同一個体と考えられる深鉢の、口縁部片および底部片である。縄文を地文として、横位の平行沈線を密接して施しており、施文は口縁部から底部まで行われている。また、口唇部にはヘラ状工具による刻みが確認できる。口縁部は外反して広がっており、底部は急激に立ち上がっている。底径が5.5cmの小型の資料である。

144は深鉢の口縁部片である。口縁部直下に3条の浮線を横位に貼付して、そこに斜位の刻みを施している。波状口縁であり、波頂部には短い縱位の浮線を貼付して、梯子状のモチーフを施文している。また、口縁部はやや内湾し、口唇部には刻みが施されている。破片下部には縄文が確認できる。

145は深鉢の胴部片である。破片上部に厚みのある浮線を貼付して、その上下に連続爪形文を施している。また、胴部は縄文を地文としており、浮線上にも同様の原体で縄文が施されている。

146は底部に近い胴部片である。縄文を地文とし、上部には平行沈線も確認できる。器形は外反して立ち上がっている。

147は口縁部付近と考えられる破片である。器形は、口縁部が内湾した浅鉢であると推測される。鈎部分に浮線を有している以外は施文が確認できない。胎土に白色粒子、黒雲母を多く含んでいることから、本類に分類したが、異なる時期の資料である可能性も考えられる。

148は深鉢の底部である。平行沈線による施文が確認できる。胴部は急激に立ち上がっている。器厚は薄く、底径7.8cmの小型の資料である。

c類：諸磯c式土器（第23・24図11・13～15）

当該資料は大半が16～18号土坑の覆土から出土している。16号土坑からは11、17号土坑からは13・

14、18号土坑からは15が出土しており、記載はそちらで行った。

d類：十三菩提式土器（第63図149）

149は胴部片である。結節沈線文を、曲線状に密接して施している。渦巻文の一部と考えられる。部分的な資料であるため、全体像は判然としない。そのため、第IV群c類（諸磯c式）に属する可能性も考えられる。

e類：型式不明の土器

前期に属すると考えられる型式不明の土器を分類した。いずれも胎土に石英、長石を多く含む。

1種：縄文を施したもの（第64図150～153）

150は口縁部片である。原体R Lの縄文を横位に施している。前期初頭～前葉（花積～黒浜期併行）の資料であると推測される。

151～153は、原体無節Lの縄文を、横位に施している。153a・bは、輪積み痕が顕著に確認され、輪積み・縄文施文・輪積みの順を、繰り返して製作されていたと推測される。胎土に石英、長石に加え、黒雲母を含む。口縁部がやや外反し、胴部はやや膨らんで、くびれを有している。以上から、前期中葉（諸磯期併行）の資料であることが推測される。

なお、151の外面に付着していた炭化物について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、 $5,370 \pm 25$ yrBP (PLD-17440) の¹⁴C年代値が確認された（詳細は『東野遺跡II』附編を参照）。この値は当該期の土器として整合性を持っている。

2種：無文のもの（第64図154・155）

154は口縁～胴部である。内面はナデによって丁寧に調整されている。口縁部は外反し、胴部には緩やかな屈曲が確認できる。胎土に石英、長石に加え、黒雲母を多く含む。以上から前期前葉の資料（花積～黒浜期並行）であることが推測される。

155は胴部～底部である。外面はナデによって調整されている。胎土に石英・長石を多く含み、前期から中期にかけての資料であると推測される。

（5）第V群土器：中期の土器

a類：五領ヶ台式土器（第64図156～158）

156は口縁部片である。波状口縁であり、口縁に沿って2本の沈線を施している。また外面から内面にかけて、口唇部を覆うように瘤状の貼付文を貼付している。胎土に多量の黒雲母、砂粒を含んでいる。

157・158は胴部片である。157は、2条の波状沈線を縱位に施している。158は、平行する2本の沈線で帯状の区画を行い、その中の原体L Rの縄文で充填している。いずれも断片的な資料のため、全体像は判然としない。

b類：勝坂式土器（第64図159～162）

勝坂式土器は、洛沢式・新道式・藤内式・井戸尻式土器等に分類できるが、本報告書では勝坂式土器として集成した。

159・160は胴部片である。159は三角押文と沈線、160は三角押文とキャタピラ文、隆帶によって、何らかのモチーフを描いている。断片的な資料であるが、b類の中でも新道式期にあたると考えられる。

161は口縁部片である。隆帶で懸垂文を描いており、隆帶上には綾杉文状の刻みと、横位の刻みが施

されている。後者の刻みは深いことから、b類の中でも井戸尻式期にあたると考えられる。

162は脣部片である。隆帯によって区画を行い、その中の沈線で施文している。横位の隆帯上には綾杉文状の刻み、斜位の隆帯上には横位の刻みが施されており、後者の刻みは深い。そのため、b類の中でも井戸尻式期にあたると考えられる。器形は内湾しており、キャリバー形深鉢の脣部と考えられる。

遺構からは、1号住居跡から1～7が出土しており、記載はそちらで行った。b類の中でも藤内式期にあたると考えられる土器が中心である。

c類：曾利式土器（第64図163・164）

163a・bは同一個体と考えられる脣部片である。163aは、原体R Lの縄文を斜位に施した後、幅広の隆帯を縦位に貼付け、その両脇を沈線で押さえている。さらに、中央にも幅広な沈線を1条施している。163bは屈曲部を有しており、そこより下部は無文となっている。

164は脣部片である。縦位の沈線を連続して施している。焼成はやや脆い印象を受ける。

d類：型式不明の土器（第64図165～168）

中期に属すると考えられる型式不明の土器を分類した。

1種：把手（165～167）

165～167は把手である。勝坂式、もしくは曾利式の資料と考えられる。刻みなどの施文が行われていないこと、渦巻文が確認できないことから、b類（勝坂式）の中でも藤内式期に当たる可能性が推測される。特に166は、当該期の資料が確認されている1号住居跡の近辺から出土している。しかし、166・167は、やや複雑な把手であり、c類（曾利式）である可能性も考えられる。

2種：縄文を施したもの（168）

168は脣部片である。原体R Lの縄文を斜位に施しているが、施文はまだらである。b類（勝坂式）、c類（曾利式）の一部である可能性も考えられる。

（6）第VI群土器：後期の土器（第65図169～178）

a類：称名寺式土器（第65図169）

169a・bは、同一個体と考えられる口縁部片・底部である。169aは、口縁部に沿って平行沈線を施し、その下部にも、同様の沈線によって曲線状のモチーフを描いている。沈線に挟まれた区画内は無文であるが、それ以外には原体L Rの縄文を充填している。上部の縄文は横位、下部は縦位に施されている。無文部分はよく研磨されている。169bは底部である。胎土から同一個体であると考えられる。

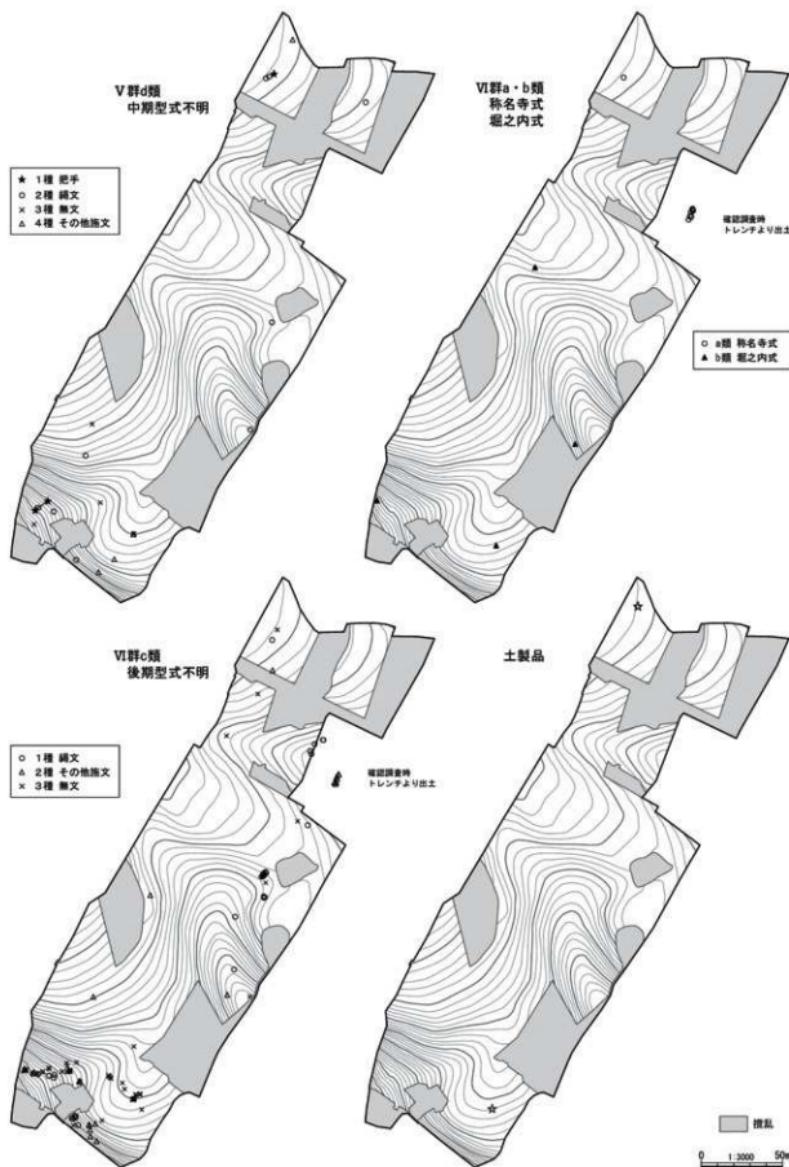
b類：堀之内式土器（第65図170～173）

170は突起部である。破片中央に、内面に向けて穿孔が確認される。また、穿孔の上下および左には孔が施され、上面と左側面の孔は沈線によって結ばれている。やや砂質な資料である。

171は口縁部片である。口縁に平行して1条の沈線を巡らせ、器体はその直下で屈曲している。内外面とも、ナデによって丁寧に調整されている。浅鉢の一部と推測される。

172a・bは薄手の土器である。内外面とも、ミガキによって光沢が出るほど調整されている。頸部が強くくびれる器形と推測される。172aは無文の口縁部で、口唇部も丁寧に調整されている。172bは頸部直下の脣部片と推測され、沈線で何らかのモチーフが描かれている。

遺構からは、21号土坑から22が出土している。



第54図 縄文時代 土器分布（5）

c類：型式不明の土器（第65図173～178）

後期のa類、もしくはb類に属すると考えられる型式不明の土器を分類した。

1種：縄文を施したもの（173～175）

173は口縁部片である。口縁に平行して1条の沈線を施し、その下に縄文を施している。全体的に磨滅しており、縄文は判然としない。口縁部はやや内湾している。胎土や器形から、a類（称名寺式）に併行する資料と考えられる。

174a・bは、同一個体と考えられる口縁～胴部である。器形は緩やかに落ちており、深鉢であると推測される。原体L Rの縄文を横位に施している。胴部下部の無文帯は、ミガキが施されている。内面もナデによる調整が行われている。b類（堀之内式）に併行する資料と考えられる。

175は、底部に近い胴部片である。原体R Lの縄文を斜位に施している。破片左側には擦痕が認められる。内面はナデによる調整が行われている。

遺構からは、9号土坑から9が出土している。

2種：その他施文を施したもの（176～178）

176は、口縁に平行して1条の沈線を施し、その間を原体無節しの縄文で充填している。その下部には、玉抱文が施されている。口縁部はやや外反している。風化が激しく、やや脆い印象を受ける。以上から、後晩期の資料であることが推測される。

177は、口縁に平行して1条の沈線を施し、その下部に斜位の細沈線を施している。内外面ともナデによって丁寧に調整されている。

178は底部である。胴部は無文であり、砂粒を多量に含んだ、やや厚めの土器である。網代痕が確認できることから、後期以降の粗製土器であると推測される。

3種：無文のもの

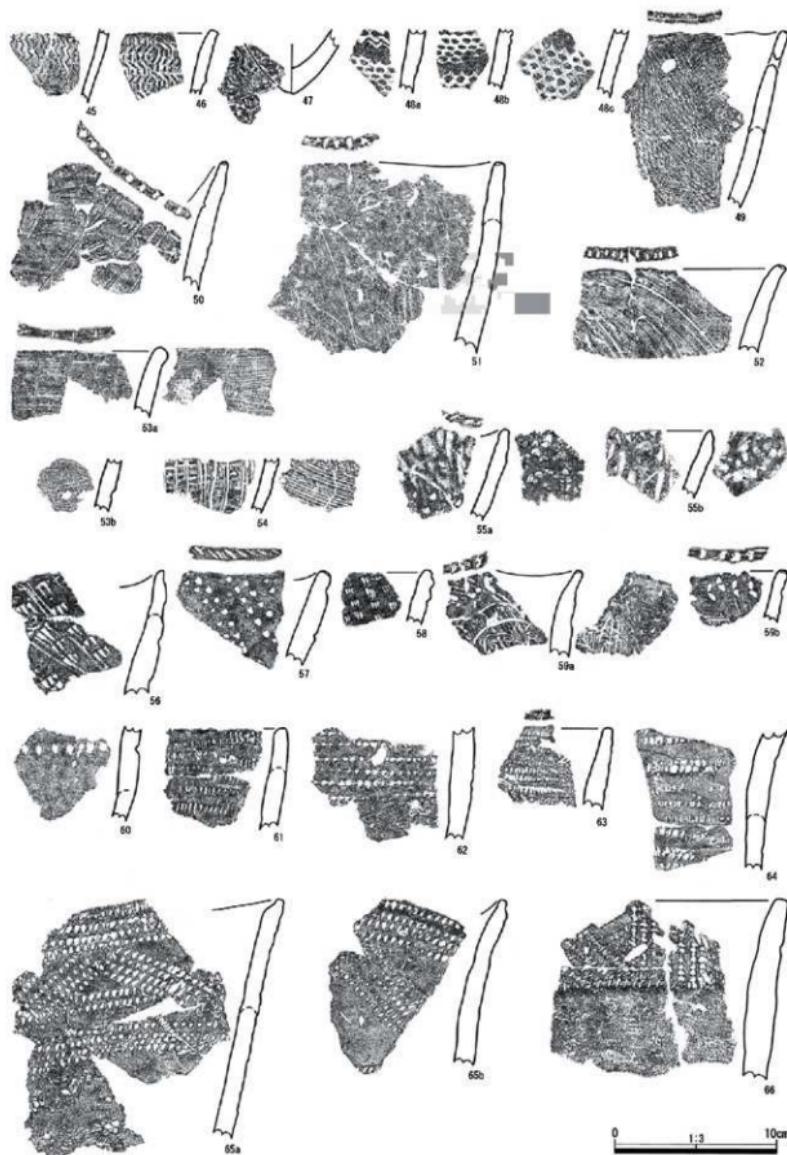
団化はしなかったが、6号土坑検出面付近から、炭化物が付着した無文土器が確認された。薄手の、後期以降と考えられる資料である。放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、 $2,805 \pm 20$ yrBP (PLD-17447) の¹⁴C年代値が確認された（詳細は「東野遺跡II」附編を参照）。

(7) 第VII群土器：晩期の土器（第65図179）

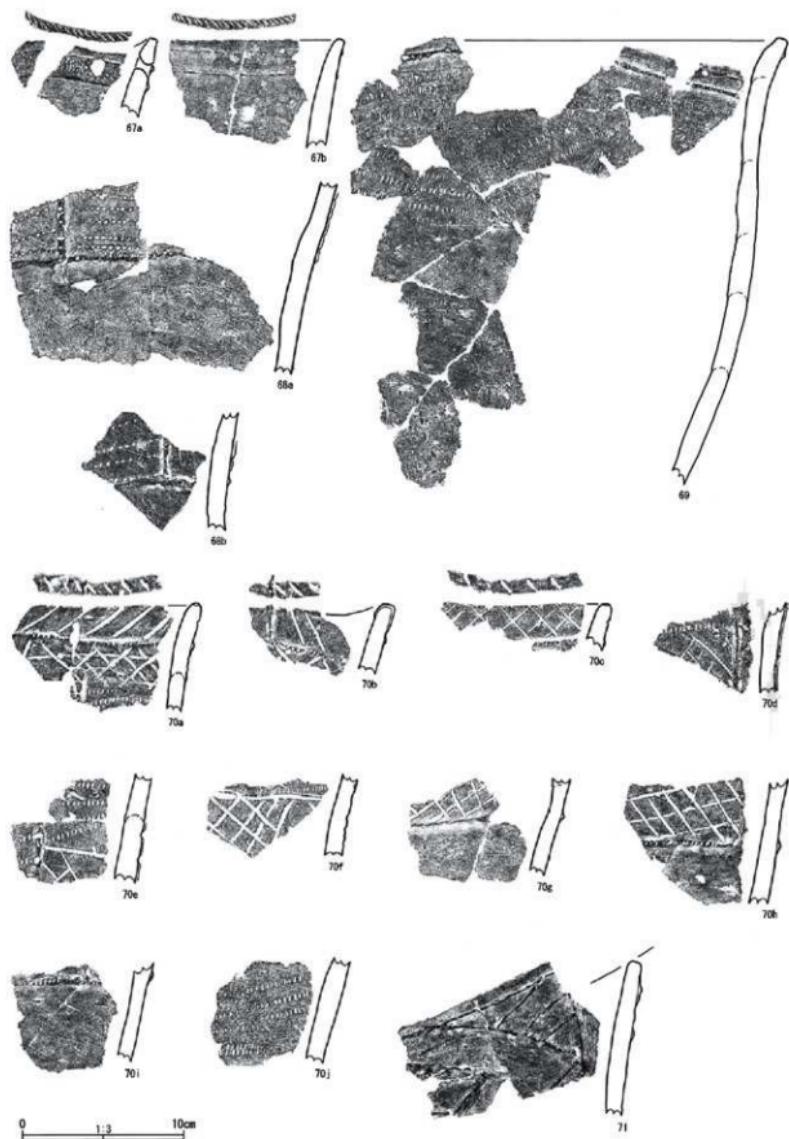
179は口縁部片である。口縁に平行して1条の沈線を施しており、その下部には、ヘラ状工具による連続した刺突を細かく施している。器形は内湾しており、浅鉢である可能性が考えられる。内外面とも丁寧に調整されており、焼成も良いため、非常に堅い印象を受ける。また、口縁端部～沈線の間は、ススのようなもので黒く彩色され、磨かれている。

(8) 土製品（第65図180）

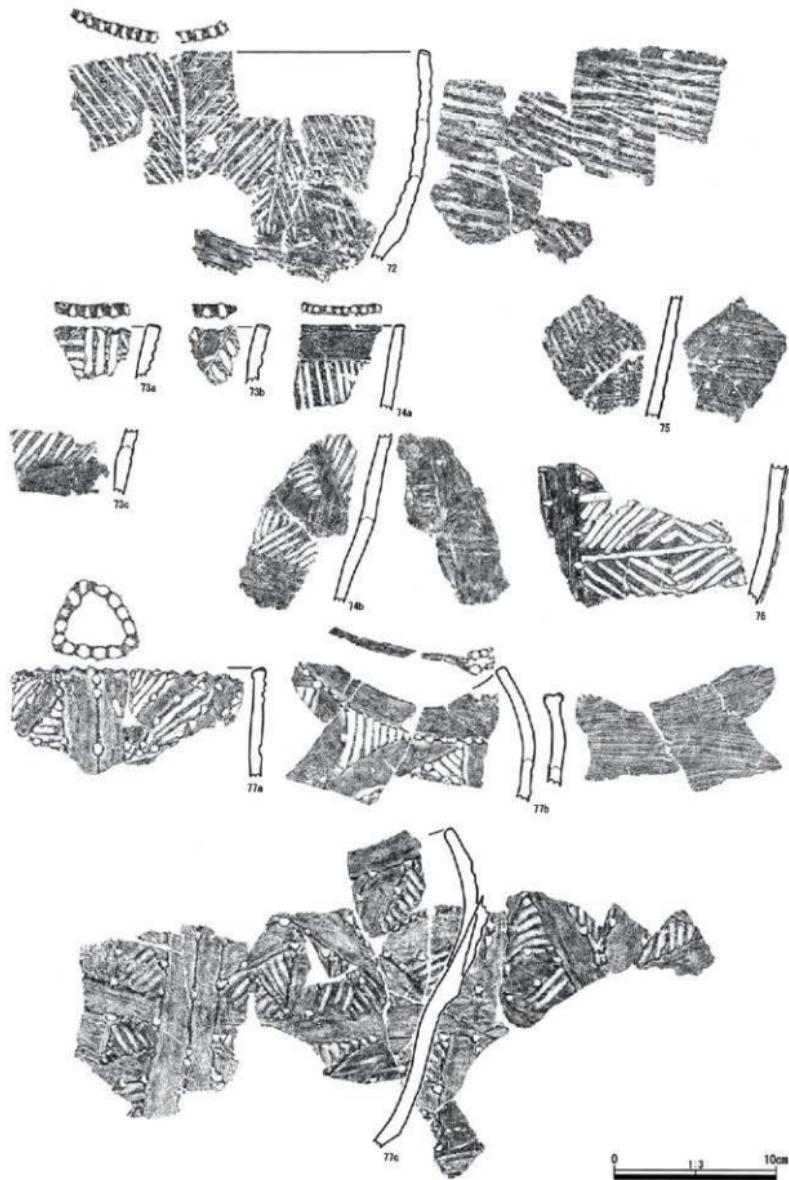
180は土製円盤である。破片上部は、縄文を地文として、1条の波状沈線を横位に施し、中央部にはキャタピラ文、下部には同じ工具によると推測される刺突が、間隔をあけて施されている。第V群b類（勝板式（藤之内式期））の土器を転用していると考えられる。



第55図 縄文時代 出土土器（1）



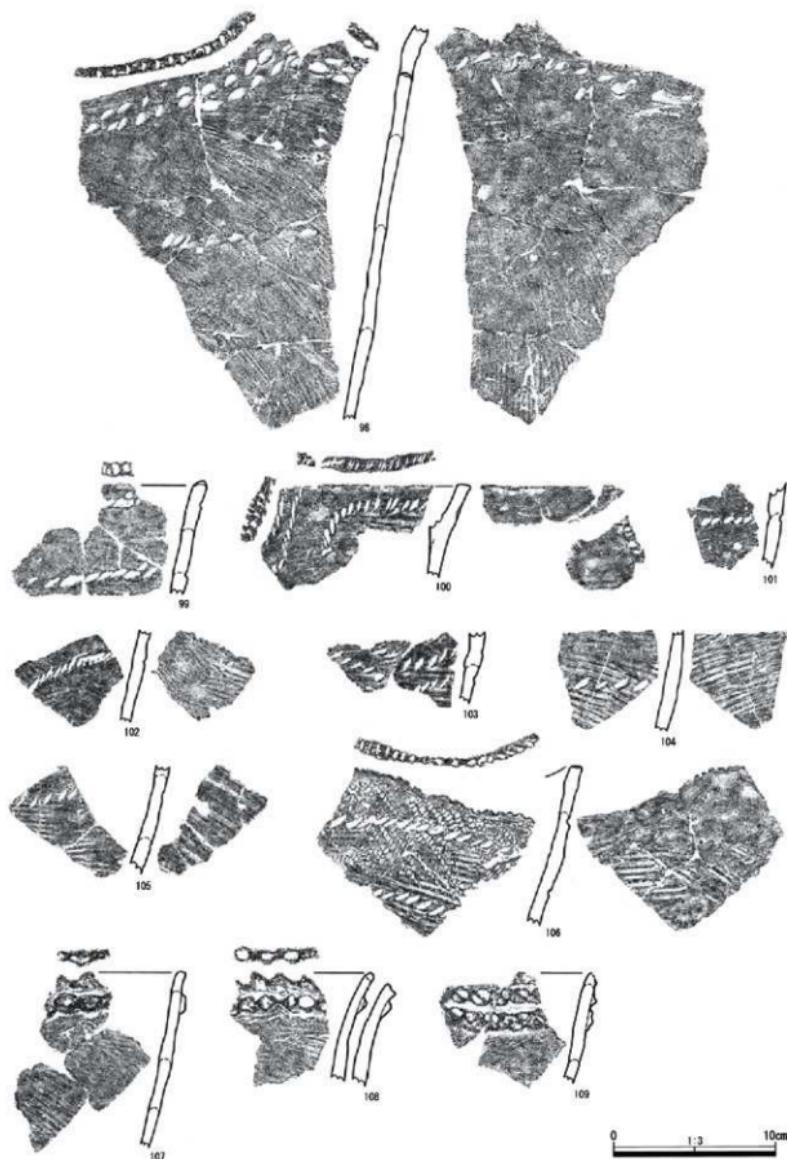
第56図 縄文時代 出土土器（2）



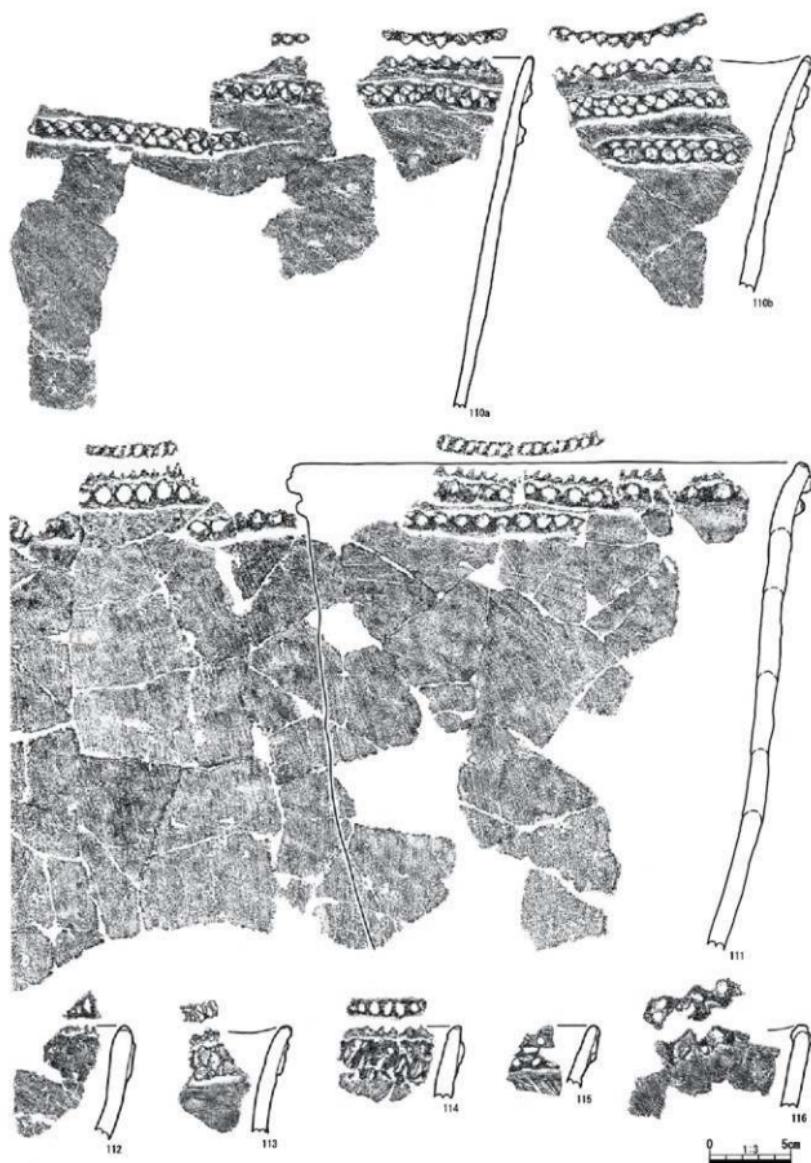
第57図 縄文時代 出土土器（3）



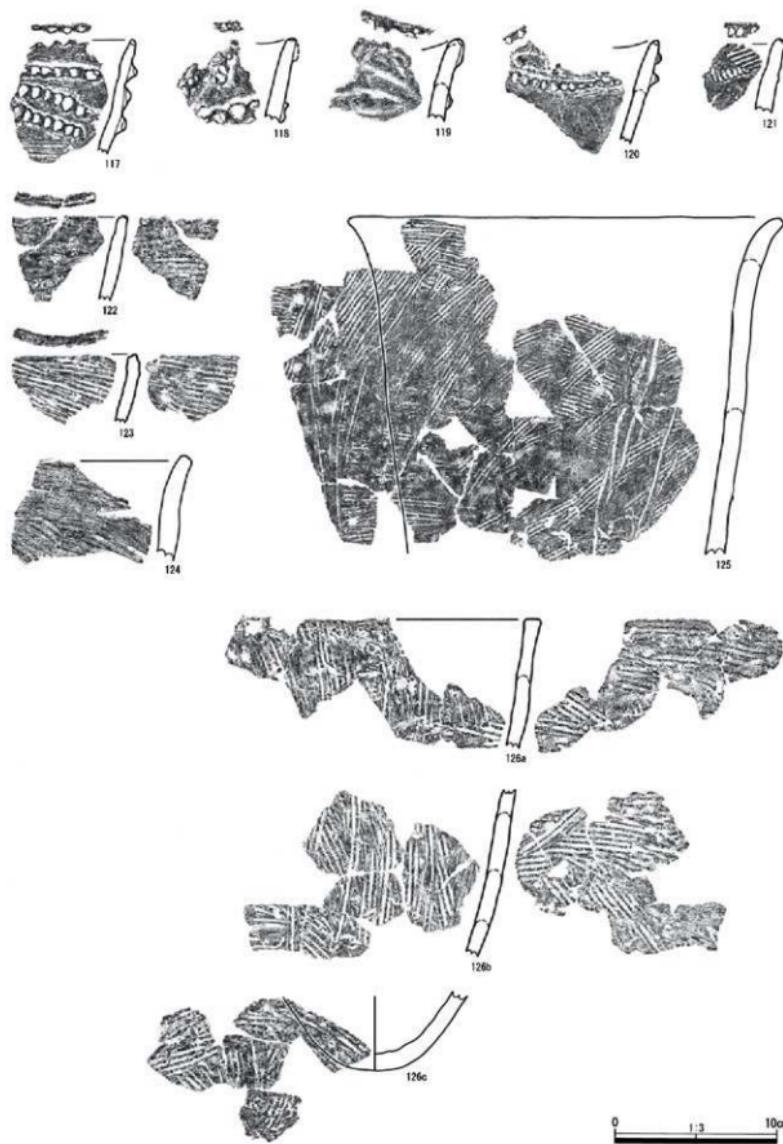
第58図 縄文時代 出土土器 (4)



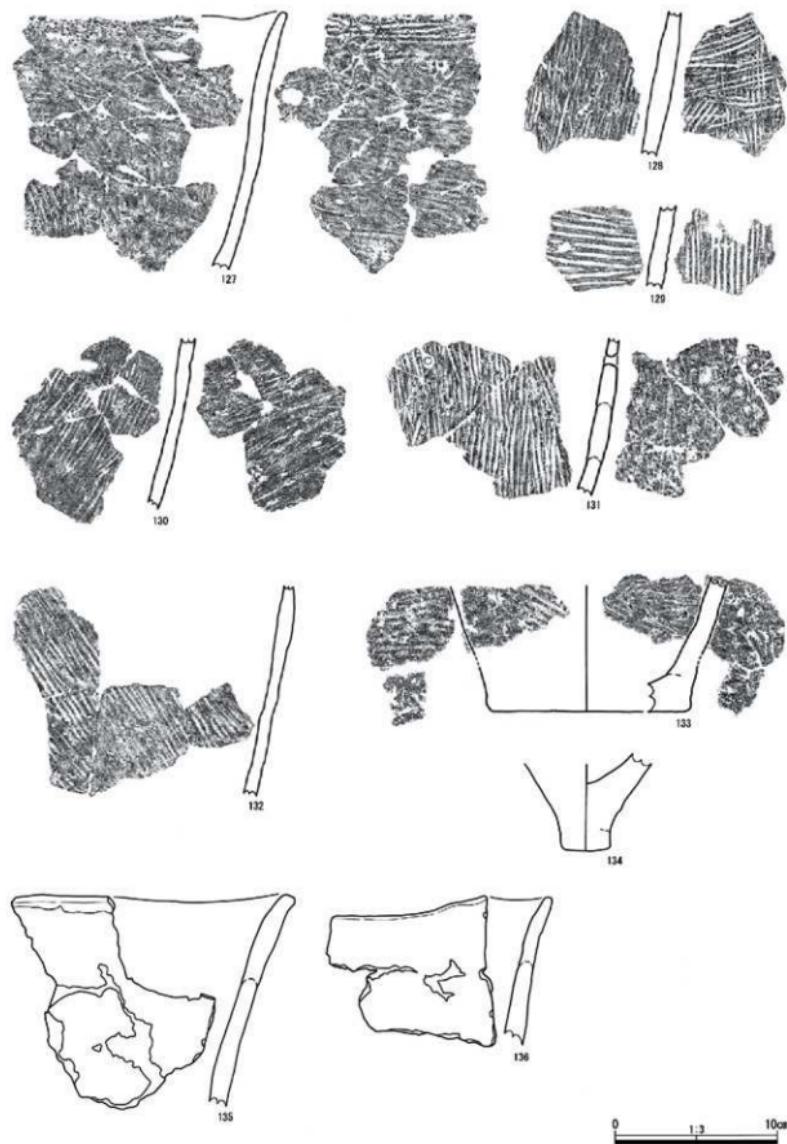
第59図 縄文時代 出土土器（5）



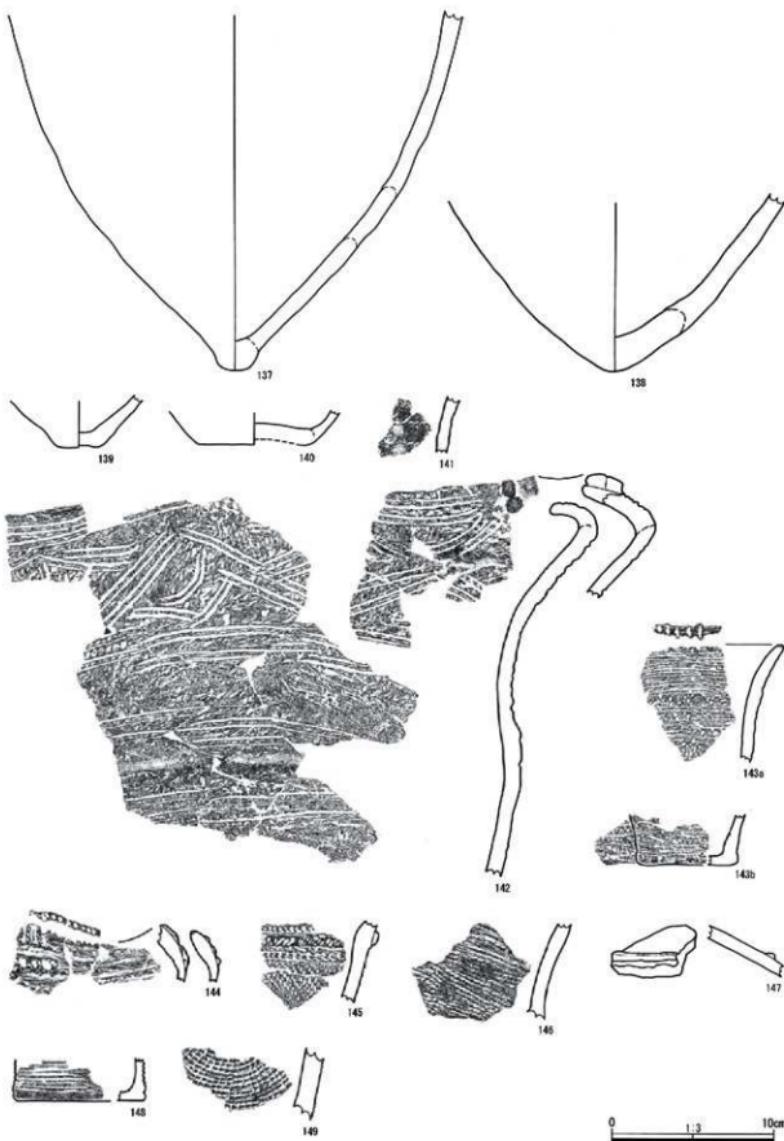
第60図 繩文時代 出土土器（6）



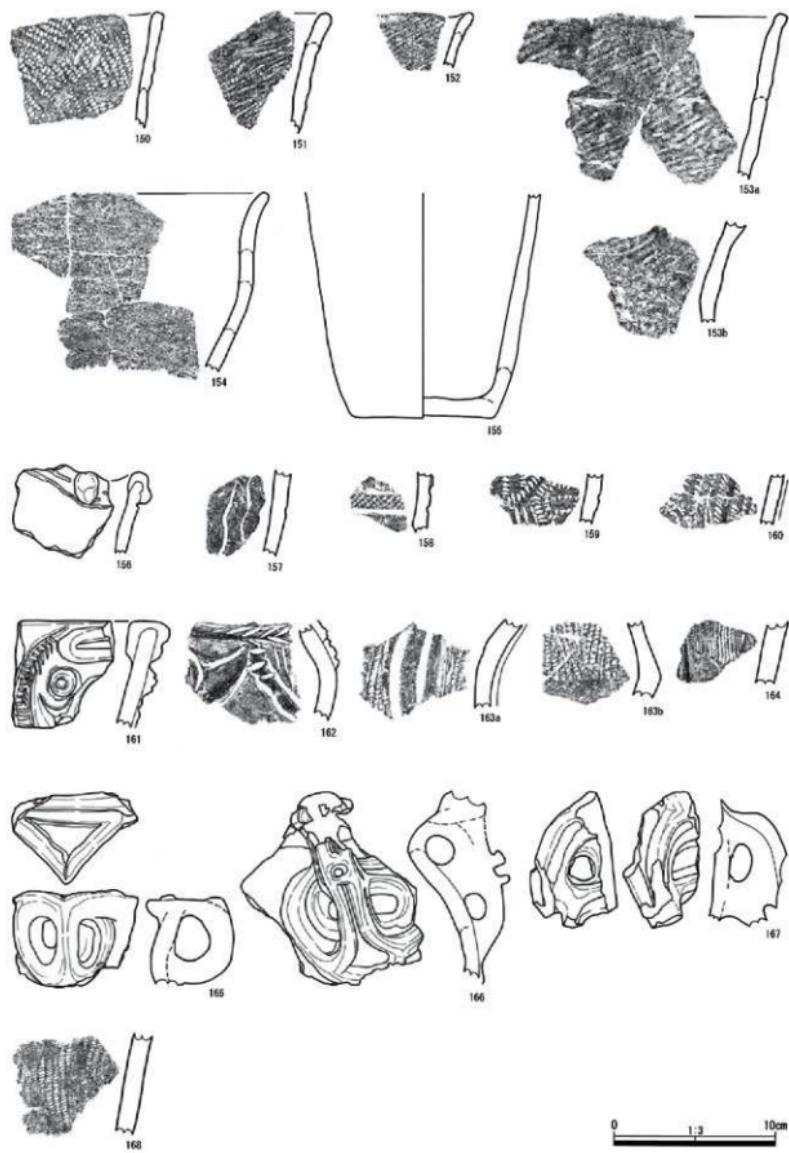
第61図 縄文時代 出土土器（7）



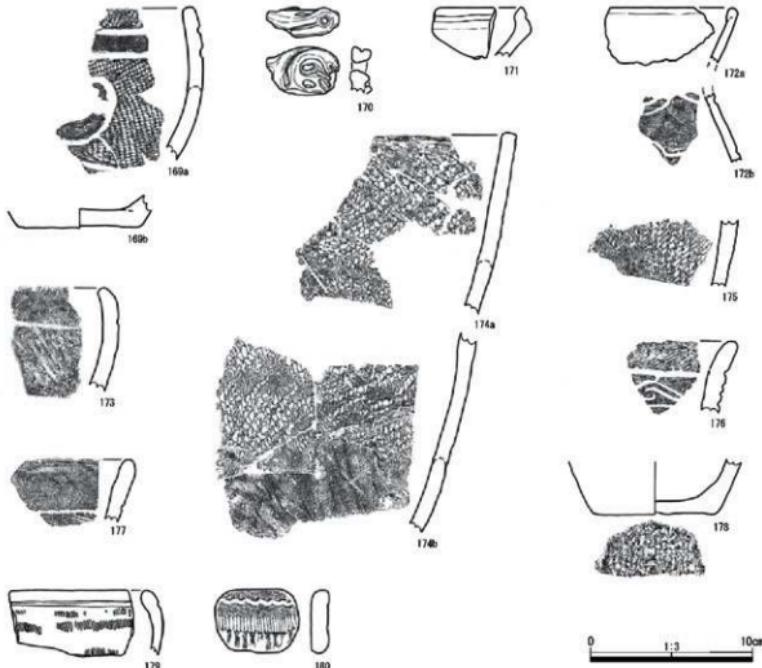
第62図 繩文時代 出土土器（8）



第63図 縄文時代 出土土器（9）



第64図 繩文時代 出土土器 (10)



第65図 繩文時代 出土土器 (11)

第10表 繩文時代 包含層出土土器観察表

博団 番号	備 考	因版 番号	群	種	型式	文様調査等	幅 幅	色調 (hue)	胎土	グリッド	
45	13	I	a	1	神型文(山形文)	無	SYRS/4	白色粒子、黒色粒子、長石、黒雲母	N-9		
46	13	I	a	1	神型文(山形文)	口縁部。縦位山形文。	10YR7/2	白色粒子、黒色粒子	G-12		
47	13	I	a	1	神型文(山形文)	底部。縦位山形文。	無	7.SYR7/3	白色粒子、黒色粒子	J-10	
48 a	13	I	a	2	神型文(複合文)	上部に横位山形文、無文帯を挟み横位横格円文。	有	SYRS/4	白色粒子、黒色粒子、長石	H-7	
48 b	13	I	a	2	神型文(複合文)	上部に横位横長横円文、無文帯を挟み横位円形格円文。	有	SYRS/6	石英、白色粒子、黒色粒子	H-7	
48 c	13	I	a	2	神型文(複合文)	無	SYRS/6	白色粒子、黒色粒子、長石	H-6		
49	13	I	b		無文	縫やかな波状の縁。口唇部に撓曲文。無文部を異方向に施文。口縁部に直面から穿孔。	無	SYRS/6	石英少、輝石少、白色粒子	N-9	
50	13	I	c	1	羽ノ木山西式	波状口縁。口唇部に先削工具による刻突。斜位の沈挫。	有	SYRS/4	石英、白色粒子、黒色粒子	H-7	
51	13	I	c	1	羽ノ木山西式	波状口縁。口唇部に先削工具による刻突。外面部に擦痕。	有	SYRS/6	石英、輝石、白色岩片	I-6	
52	13	I	c	1	羽ノ木山西式	口縁部。口唇部に先削工具による刻突。斜位の沈挫。内外面に直條文。	有	SYRS/4	石英、白色粒子、黒色粒子	N-6	
53 a	13	I	c	3	羽ノ木山西式	口縁部。口唇部にへう状工具による刻文。格子状の網目擦痕。内面部に横位の直條調整。	有	7.SYR4/3	石英、黒色粒子、長石、白色粒子多、岩片多	H-6	
53 b	13				羽ノ木山西式	棒状工具による刻突。内面部に直條調整。	有	7.SYR4/3	石英、赤色岩片、白色粒子多、岩片少	-	
54	13	I	c	2	羽ノ木山西式	縦位の直條。内面部に横位の直條調整。	無	7.SYR6/4	石英、白色粒子、岩片少	I-6	
55 a	13	II	a		子母口式	口縁部。口唇部に刻文。口唇部直下から斜位に半彎竹状工具による幅広辺縁。内面部に横位の刻突尖。	有	7.SYR5/4	石英、白色粒子、黒色粒子、長石、黒雲母	G-10	
55 b	13				子母口式	口縁部。口唇部に刻文。口縁に沿って半彎竹状工具による横位の刻突。内面部にも同じ工具による横位の刻突尖。	有	7.SYR5/4	石英、輝石、白色粒子、黒色粒子、黒雲母	-	

標因 番号	標 種	因版 番号	群	類	種	型式	文様調査等	構 造	色調 (Raw)	胎土	グリッド
56		13	II	a		舟母口式	波状口縫。半載竹管状工具による斜位の波状。斜位の波状に沿って半載竹管状工具を3連1紙で押し引き状に斜位を施す。	有	7.SYRS/4	石英、輝石、白色粒子、黒色粒子	F-13
57		13	II	a		舟母口式	口縫部口縫。口唇部にへら状工具による斜み、半載竹管状工具による斜めの波状。斜位の波状に沿って半載竹管状工具を斜位に2列1紙で連続して施す。内面に擦痕。	有	7.SYRS/5	石英、黒色粒子、黒雲母	I-10
58		13	II	a		舟母口式	口縫部。3つに先割した棒状工具による斜尖刺。内面に擦痕。	有	7.SYRA/3	石英多、輝石多、黒雲母	F-13
59	a	13	II	a		舟母口式	口縫部。口唇部に斜尖刺。先割状工具による異方向の沈みを地文字にし曲線を施す。口縫に沿って「く」の字状の斜尖刺。内面は先割状工具による異方向の波状。	有	SYRS/6	石英少、輝石、白色粒子、黒色粒子、赤色岩片	H-7
59	b	13	II	a		舟母口式	口縫部。口唇部に斜尖刺。先割状工具による異方向の沈みを地文字にし曲線を施す。口縫に沿って「く」の字状の斜尖刺。内面は先割状工具による異方向の波状。	有	SYRA/3	石英少、輝石、白色粒子、黒色粒子	I-7
60		13	II	a		舟母口式	複数位に1条の斜尖刺。内面に擦痕。	有	7.SYRS/4	石英多、長石多、赤色岩片、岩片多	AA-22
61		13	II	b	1a	清水細E形	口縫部。軸に角棒状を複数位に用いた棒状工具を複数位に施す。内面に擦痕調査。	有	SYRS/6	石英、黒色粒子	0-6
62		13	II	b	1a	清水細E形	軸に角棒状を複数位に用いた棒状工具を複数位に施す。内面に擦痕調査。	有	SYRS/4	石英、白色粒子、黒色粒子	0-7
63		13	II	b	1a	清水細E形	口縫部。口唇部に筋条体压痕。軸に角棒状を用いた筋条体压痕文を横断に施す。外面上に擦痕調査。	有	SYRA/3	石英、白色粒子	G-9
64		13	II	b	1a	清水細E形	軸に角棒状を用いた筋条体压痕文を複数位に施す。	有	7.SYRA/2	石英、白色粒子、赤色岩片	H-6
65	a	14	II	b	1b	清水細E形	波状口縫。軸の波状を複数位に用いた波状工具を複数位に施す。軸に角棒状を複数位に用いた角棒状工具を複数位に施す。内面に擦痕調査。	有	7.SYRS/6	石英少、赤色粒子、白色粒子、黒色粒子、長石少、白雲母	G-6
65	b	14	II	b	1b	清水細E形	波状口縫。軸の波状を複数位に用いた波状工具を複数位に施す。内面に擦痕調査。	有	7.SYRA/3	石英、白色粒子、白色粒子、黒色粒子、白雲母、角閃石少	-
66		14	II	b	1a	清水細E形	口縫部。口縫部に斜み、口縫部起縫下に各の細縫起縫を貼付。細縫起縫の間をかいし筋条体压痕文で埋め。穿孔。内面に擦痕調査。	有	7.SYRS/6	石英、白色粒子、黒色粒子、白雲母	G-10
67	a	14	II	b	2	清水細E形	波状口縫。口縫部に斜み、口縫部起縫下に各の細縫起縫を貼付。細縫起縫の間をかいし筋条体压痕文で埋め。穿孔。内面に擦痕調査。	有	SYR	石英、白色粒子、黒色粒子、赤色岩片、角閃石	H-9
67	b	14	II	b	2	清水細E形	口縫部。口縫部に斜み、口縫部起縫下に複数位に2条の細縫起縫を貼付。細縫起縫の間をかいし筋条体压痕文で埋め。穿孔。内面に擦痕調査。	有	SYRS/6	石英、輝石多、白色粒子	H-6
68	a	14	II	b	2	清水細E形	複数位の細縫起縫を貼付し画面。軸に角棒状を用いた筋条体压痕文を細縫起縫と区画内に施す。内面に擦痕調査。	有	SYRS/4	石英、輝石、赤色粒子少、白色粒子、白雲母少	H-7
68	b	14	II	b	2	清水細E形	複数位の細縫起縫を貼付し画面。軸に角棒状を用いた筋条体压痕文を細縫起縫と区画内に施す。内面に擦痕調査。	有	7.SYRA/3	石英、輝石、白色粒子、黒色粒子、白雲母少	-
69		14	II	b	2	清水細E形	口縫部。外面上に口縫部起縫を複数位に施す。軸に角棒状を複数位に施す。複数位の筋条体压痕文を複数位に施す。内面に擦痕調査。	有	SYRS/8	石英、輝石、白色粒子、黒色粒子、赤色岩片	G-6
70	a	15	II	b	3	清水細E形	口縫部。口縫部に斜位の斜み、斜位の波状と筋条体压痕文を施す。細縫起縫を複数位に施す。細縫起縫の下部に筋条体压痕文を施す。斜位の波状と複数位の筋条体压痕文。内面に擦痕調査。	有	SYRS/8	石英、白色粒子、黒色粒子	H-6
70	b	15	II	b	3	清水細E形	口縫部。口縫部に斜位の斜み、斜位の波状と筋条体压痕文を施す。細縫起縫を複数位に施す。細縫起縫の下部に筋条体压痕文を施す。斜位の波状と複数位の筋条体压痕文。内面に擦痕調査。	有	7.SYRA/3	石英少、白色粒子、黒色粒子	H-6
70	c	15	II	b	3	清水細E形	筋条体压痕文に施した細縫起縫を複数位に貼付。細縫起縫の下部に筋条体压痕文を施す。斜位の波状と筋条体压痕文。内面に擦痕調査。	有	7.SYRA/6	石英、白色岩片	H-6
70	d	15	II	b	3	清水細E形	筋条体压痕文に施した細縫起縫を複数位に貼付。細縫起縫の下部に筋条体压痕文を施す。斜位の波状と筋条体压痕文。内面に擦痕調査。	有	SYRS/6	石英少、白色粒子、黒色粒子	H-6
70	e	15	II	b	3	清水細E形	複数位の斜位の筋条体压痕文と沈み。複数位の細縫起縫上に斜位の波状と筋条体压痕文。内面に擦痕調査。	有	SYRS/6	石英少、白色粒子、黒色粒子	H-6
70	f	15	II	b	3	清水細E形	複数位の筋条体压痕文。格子状の波状。	有	SYRS/4	石英、白色粒子	H-6
70	g	15	II	b	3	清水細E形	格子状の波状。下部に複数位の細縫起縫。内面に擦痕調査。	有	7.SYRS/6	石英、白色岩片	H-6
70	h	15	II	b	3	清水細E形	格子状の波状。細縫起縫上に筋条体压痕文。内面に擦痕調査。	有	7.SYRS/6	石英、白色粒子、黒色粒子	H-6
70	i	15	II	b	3	清水細E形	複数位の細縫起縫上に筋条体压痕文。内外面上に擦痕調査。	有	7.SYRA/3	石英、白色岩片	H-6
70	j	15	II	b	3	清水細E形	筋条体压痕文。内外面上に擦痕調査。	有	7.SYRS/6	石英、輝石、白色粒子、黒色粒子、赤色岩片	H-6
71		15	II	b	4	清水細E形	波状口縫。細縫起縫により三角形状のモチーフ。内面に擦痕調査。	有	SYRS/8	白色粒子、黒色粒子、角閃石少	-
72		15	II	c		野島式	口縫部。口唇部に神狀工具による斜み。絞紋文状の波状。内面に擦痕。	有	7.SYRS/4	石英、赤色粒子少、白色粒子、長石	I-12
73	a	15	II	c		野島式	口縫部。口唇部に神狀工具による斜み。3条の複数位の斜位の波状と複数位の斜位の波状と斜位の波状と斜位の波状。	有	10YRS/3	石英、輝石、赤色粒子、白色岩片	I-6
73	b	15	II	c		野島式	口縫部。2条の斜位の波状と斜位の波状。	有	7.SYRS/3	石英、輝石、白色岩片	I-8
73	c	15	II	c		野島式	斜位の波状。内面に擦痕調査。	有	10YRS/3	石英、輝石、白色岩片	J-10
74	a	15	II	c		野島式	口縫部。口唇部に神狀工具による斜み。口縫部直下に2条の斜位の波状。	有	10YRS/3	石英、白色粒子	I-10

埠頭番号	桟橋	回版番号	群	類	種	型式	文様調整等	埋	色調 (Raw)	胎土	グリッド
74	b	15	II	c		野鳥式	2条の柳枝縫で三角形形状の区画。区画内に斜位の 竹絞り突起。内外面に擦痕調整。	有	7.SYR5/4	石英、長石、黒雲母、白色岩片	I-12
75		15	II	c		野鳥式	2条の柳枝縫で三角形形状の区画。区画内に斜位の 竹絞り突起。	有	7.SYR4/6	石英、白色岩片、黑色滑片	J-12
76		15	II	c		野鳥式	2条の柳枝縫上に斜位工具による刺突文。波形 文状の斜位記録。	有	SYR5/6	石英、白色粒子、黑色粒子	I-20
77	a	16	II	d		鰐ヶ島台式	三角形状の小手型。口唇部に棒状工具による跡み。 3本1組の細密記録。	有	7.SYR6/4	石英、赤色粒子、白色粒子	I-7
77	b	16	II	d		鰐ヶ島台式	波状口縫。口唇頂点に棒状工具による刺突が施文 された三重状の突起。内面に擦痕調整。	有	7.SYR6/4	石英、白色粒子	I-8
77	c	16	II	d		鰐ヶ島台式	波状口縫。幅3本1組の細密記録を有下させ た。細密記録の箇所他の区画面を複位。斜位の 柳枝縫を充填する。棒状工具により刺突を施す。2 ヶ所の斜位を有する。器表はラグドーボール状に近 い。内面に擦痕調整。	有	7.SYR6/6	石英、輝石、赤色粒子、白色粒子	I-8
78	a	16	II	e		茅山下層式	波状口縫。口唇部をナデしにより調整。口唇部外 側に斜位。口唇部直下に半截竹管状工具による2 条の柳枝縫で斜位の内部を擦痕削る波状の沈鉢。刺突 を施す。内面に擦痕調整。	有	7.SYR6/4	石英、白色粒子、長石、砂粒	R-9
78	b	16	II	e		茅山下層式	食卓脚された範囲。上部に屈曲部を有する。内 面に擦痕調整。	有	7.SYR6/4	石英、白色粒子、黑色粒子、長石、砂粒	D-9
79	a	16	II	e		茅山下層式	口絞形。口唇部をナデしにより調整。口唇部の外 面に斜位。半截竹管状工具による波状と刺突で文様 を模す。内面に擦痕調整。	有	10YR6/4	石英、白色粒子、長石、白雲母、砂 粒	R-9
79	b	16	II	e		茅山下層式	段部の細密刺突。刺突を施す。内面に擦痕調整。	有	10YR5/2	石英、赤色粒子、白色粒子	D-8
80	a	16	II	e		茅山下層式	波状口縫。口唇部外側に斜位。綴文を地文とする。 刺突に沿うように押し引き文。穿孔を有する。	有	7.SYR5/4	石英、白色粒子、黑色粒子、長石、 白雲母	R-10
80	b	16	II	e		茅山下層式	段部に刺突。	有	7.SYR5/4	石英、赤色粒子、長石	R-10
80	c	16	II	e		茅山下層式	内外面に擦痕調整。	有	SYR6/6	石英、赤色粒子、白色粒子、黑色粒子、 長石、白雲母	R-10
81		16	II	e		茅山下層式	屈曲部に斜位。斜突尖。内面に擦痕。	有	7.SYR6/6	石英、赤色粒子、白色粒子、黑色粒子	D-9
82		16	II	e		茅山下層式	屈曲部に斜位。曲線状の斜突尖。内面に擦痕。	有	7.SYR6/6	石英、赤色粒子、白色粒子、黑色粒子	D-10
83		16	II	e		茅山下層式	屈曲部に半截竹管状工具による刺突。内外面に多 く。	有	SYR5/6	石英、輝石、白色粒子	-
84		16	II	e		茅山下層式	口絞形。口唇部外側に斜位。綴文を地文とする。刺突 を施す。内面に擦痕。	有	7.SYR6/4	石英、白色粒子、長石、白雲母	F-13
85		16	II	e		茅山下層式	口絞形。口唇部の外側面に斜位。幅広沈鉢による 押しづき文。内面に擦痕。	有	SYR4/6	石英、輝石、赤色粒子、黑色粒子、 白色岩片	S-9
86		16	II	e		茅山下層式	波状口縫。口唇部はナデにより調整。口唇部角の 内外面に斜位。外面上に押し引き文。	有	7.SYR5/4	石英、白色粒子、黑色粒子、長石、 白雲母	-
87		16	II	e		茅山下層式	口絞形。口唇部に斜位。条痕を地文後、綴位沈鉢 と斜位の短流を施す。内面に擦痕。	有	10YR7/3	白色粒子、長石	I-12
88		16	II	f		茅山上層式	口絞形。口唇部に斜位。斜位の連續した沈鉢。内 面に複位の細密沈鉢。	有	SYR5/6	白色粒子	H-10
89		16	II	f		茅山上層式	波状口縫。複位・斜位・横位の条痕。	有	7.SYR6/4	石英、白色粒子、長石、白雲母、赤 色岩片	-
90		16	II	f		茅山上層式	口絞形。口唇部直下に斜位を垂下し粘付。横位 の綴位。口唇部直下に斜位。	有	7.SYR5/6	石英、赤色粒子、白色粒子、長石、 白雲母	-
91		17	II	g		ハッ崎式	波状口縫。口唇部に綴位の斜位。半截竹管状工 具による爪跡を地文に施す。	有	7.SYR4/4	石英、白色粒子、長石、白雲母少	F-13
92		17	II	g		ハッ崎式	波状口縫。口唇部に斜位。条痕を地文し棒状工 具による米粒状突起を地文に施す。	有	7.SYR6/6	石英、白色粒子、白雲母	F-13
93		17	II	g		ハッ崎式	波状口縫。口唇部に斜位。へら状工具による大粒 の刺突を綴位化(地文)。内面に擦痕。	有	SYR6/6	石英、白色粒子、長石、白雲母	F-13
94		17	II	g		ハッ崎式	失羽状の底の条痕。	有	10YR5/4	石英、長石、黒雲母、白色岩片	F-13
95		17	II	h		船体型	波状口縫。口唇部に斜位の斜位。波状口縫に沿った 刺突尖と斜位の刺突尖。	有	7.SYR4/2	石英、白色粒子、長石、白雲母	D-12
96		17	II	h		船体型	波状口縫。口唇部内側と外側間に異なった斜位。 複位2条の刺突尖と斜位の刺突尖。	有	7.SYR5/3	石英、長石、白雲母、白色岩片	F-13
97		17	II	h		船体型	波状口縫。口唇部に斜位。口縫に沿って1条の刺 突尖。内外面に条痕。	有	10YR5/2	石英、長石、白雲母	-
98		17	II	h		船体型	波状口縫。口唇部に棒状工具による刺突。口縫に 沿って2条の刺突尖。内外面に口縫に沿って1条の刺 突尖。	有	10YR6/4	石英、白色粒子、長石、白雲母	S-12
99		17	II	h		船体型	波状口縫。口唇部に斜位。2条の刺突尖。	有	10YR6/4	石英、白色粒子、長石、白雲母	-
100		17	II	h		船体型	波状口縫。口唇部に斜位。2条の刺突尖。異なる 刺突尖。内外面に条痕。	有	10YR6/3	石英、白色粒子、金雲母	F-12
101		17	II	h		船体型	複位に1条の刺突尖。	有	10YR6/3	石英、長石、白雲母	E-12
102		17	II	h		船体型	複位に1条の刺突尖。内外面に条痕。	有	10YR5/3	石英、白色粒子、黑色粒子、長石、 白雲母	G-13
103		17	II	h		船体型	複位に2条の刺突尖。内外面に条痕。	有	10YR6/3	石英、長石、黒雲母	-
104		17	II	h		船体型	1条の刺突尖。内外面に条痕。	有	SYR4/1	石英、白色粒子、長石、白雲母	F-13
105		17	II	h		船体型	1条の刺突尖。内外面に条痕。	有	10YR6/4	石英、白色粒子、黑色粒子、長石	F-12
106		17	II	h		船体型	波状口縫。口唇部に斜位。条痕を貼付して綴文を施す。 複位に2条の刺突尖。内外面に条痕。	有	SYR6/6	石英、白色粒子、金雲母	F-13
107		18	II	i	s	上ノ山式	口絞形。口唇部直下に斜位押圧。口部直下に條痕を 貼付し、指紋による單向押圧を施す。内外面に 条痕。	有	10YR5/6	石英、白色粒子、長石、白雲母	J-10
108		18	II	i	s	上ノ山式	口絞形。口唇部直下に斜位押圧。口部直下に條痕を 貼付し、指紋による單向押圧を施す。内外面に 条痕。	有	10YR5/3	石英、赤色粒子、白色粒子、長石、 白雲母	M-11
109		18	II	i	s	上ノ山式	口絞形。口唇部直下に2条の條痕を貼付し、指紋 による交互押圧。	有	10YR7/3	石英、赤色粒子、白色粒子、長石、 白雲母	AK-22

博団 番号	構 造	回転 番号	群	類	種	型式	文様調査等	埋 植	色調 (Rox)	胎土	グリッド
110 a	18	II	i	a		上ノ山式	口縁部に指頭状。口縁部裏面下に隆帯を貼付し、指頭による交叉押圧。外面に施す。	有	10YR5/2	石英、白色粒子、長石、白雲母	N-9
110 b	18	II	i	a		上ノ山式	波状口縁。口縁部裏面下に隆帯を貼付し、指頭による交叉押圧。外面に施す。	有	10YR6/3	石英、白色粒子、長石、白雲母	N-9
111	18	II	i	b		上ノ山式	口縁部。口縁部に指頭状工具による跡み。口縁部直下に各の隆帯を貼付し、指頭による单方向向拵。砲弾形が深く、内外面に施す調査。	有	SYR6/6	石英、輝石、白色粒子	L-II
112	18	II	i	b		上ノ山式	口縁部。口縁部に棒状工具による跡み。口縁部直下に各の隆帯を貼付し、指頭による单方向向拵。砲弾形が深く、内外面に施す調査。	有	7.5YR5/6	石英、白色粒子、黑色粒子	O-II
113	18	II	i	b		上ノ山式	口縁部。口縁部に棒状工具による跡み。口縁部直下に各の隆帯を貼付し、指頭による单方向向拵。砲弾形が深く、内外面に施す調査。	有	SYR5/6	石英、輝石、白色岩片	P-9
114	18	II	i	b		上ノ山式	口縁部。口縁部に棒状工具による跡み。口縁部直下に各の隆帯を貼付し、指頭による单方向向拵。砲弾形が深く、内外面に施す調査。	有	7.5YR5/4	石英、白色粒子、白雲母	P-10
115	18	II	i	b		上ノ山式	口縁部。口縁部に棒状工具による跡み。口縁部直下に各の隆帯を貼付し、細い棒状工具による連續刻尖。	有	7.5YR4/2	白色粒子、輝石	AK-22
116	18	II	i	b		上ノ山式	波状口縁。口縁部裏面下に隆帯を貼付し、指頭による交互押圧。	有	7.5YR8/6	白色粒子、輝石、長石、白雲母	N-9
117	18	II	j	a		入海式	口縁部。口縁部に跡み。口縁部裏面下に3条の隆帯を貼付し、ヘラ状工具による跡み、内面に施す。	有	7.5YR5/4	石英、赤色粒子、白色粒子、黑色粒子、長石、白雲母	AK-22
118	18	II	j	b		入海式	口縁部。口縁部裏面下に横位の隆帯を貼付し、ヘラ状工具による跡み。その一部に横位の隆帯が1条貼付し、指頭状の单方向向拵。内面に施す。	有	7.5YR5/4	石英、輝石、白色岩片	AL-21
119	18	II	j	b		入海式	波状口縁。口縁部に跡み。口縁部裏面下に各の隆帯を貼付し、ヘラ状工具による跡み。指頭による交互押圧。	有	7.5YR5/3	石英、輝石、白色岩片	L-II
120	18	II	j	b		入海式	波状口縁。口縁部に跡み。口縁部裏面下に各の隆帯を貼付し、棒状工具により跡みを施す。内面に施す。	有	7.5YR5/3	石英、白色粒子、輝石	AK-22
121	18	II	k			打趙式	口縁部。口縁部裏面下に斜位の条痕を施し、貝殻摩擦による押し印。	有	SYR5/6	輝石少、白色粒子少、黑色粒子少	H-9
122	19	III	i			型式不明	口縁部。口縁部に沈線。内外面に横位の条痕。	有	10YR5/3	輝石、白色粒子、長石少	J-8
123	19	III	i			型式不明	口縁部。口縁部に沈線。内外面に横位の条痕。	有	10YR4/1	石英、白色粒子、長石、白雲母	H-6
124	19	III	i			型式不明	口縁部。後位の条痕。口縁部は反する。内面に施す。	有	7.5YR6/6	輝石、白色粒子、白雲母	D-12
125	19	III	i			型式不明	口縁部。横位の条痕を施し、斜位の条痕を施す。斜位の一帯に横位の沈線。口縁部裏面下に横位の条痕。	有	7.5YR6/6	輝石、白色粒子、白雲母	I-6
126 a	19	III	i			型式不明	口縁部。横位の条痕。内面に横位・斜位の条痕。	有	SYR5/4	石英、輝石、赤色岩片、白色岩片	I-8
126 b	19	III	i			型式不明	横位・斜位の条痕。内面に横位・斜位の条痕。	有	7.5YR5/4	輝石少、赤色粒子、白色粒子、黑色粒子	I-8
126 c	19	III	i			型式不明	底部(丸底)。横位・横位の条痕。	有	7.5YR6/6	輝石、赤色粒子、白色粒子、黑色粒子	H-6
127	19	III	i			型式不明	波状口縁。横位の条痕。内面に横位の条痕。	有	SYR5/6	石英、白色粒子、黑色粒子、角閃石	H-7
128	19	III	i			型式不明	横位の条痕。内面に横位・横位の条痕。	有	7.5YR6/4	石英、白色粒子、長石	O-16
129	19	III	i			型式不明	横位の条痕。内面に横位の条痕。	有	SYR6/6	白色粒子、長石、白雲母、角閃石	O-13
130	19	III	i			型式不明	内外面に斜位の条痕。	有	SYR4/2	白色粒子、白雲母少、白色岩片	O-10
131	19	III	i			型式不明	横位の条痕。	有	7.5YR6/3	輝石少、白色粒子、高岭粒子	I-7
132	19	III	i			型式不明	斜位の条痕。	有	10YR4/2	石英、白色粒子、赤色粒子少、长石、白雲母	J-10
133	19	III	i			型式不明	底部(平底)。横位の条痕。	有	7.5YR6/4	輝石、白色岩片	N-10
134	19	III	i			型式不明	底部(尖底)。横位の条痕。	有	SYR4/6	輝石、黑色粒子、赤色岩片、白色岩片	N-9
135	20	III	2			型式不明	波状口縁。擦痕調査。	有	7.5YR5/4	石英、輝石、赤色粒子、白色粒子、角閃石	I-5
136	20	III	2			型式不明	波状口縁。口縁部をナデによる調整。	有	SYR4/3	石英、輝石、白色粒子、赤色岩片	I-9
137	20	III	2			型式不明	底部(乳頭状)。擦痕。内面に沈線。	有	SYR5/6	石英、輝石、白色岩片	K-11
138	20	III	2			型式不明	底部(尖底)。	有	SYR6/6	石英、輝石、白雲母、赤色岩片、白色岩片	白色岩片
139	20	III	2			型式不明	底部(上げ底座)。	有	10YR4/4	石英、長石、白雲母、白色岩片	P-8
140	20	III	2			型式不明	底部(上げ底座)。擦痕調査。	有	SYR5/4	石英、輝石、白色粒子、赤色岩片	N-10
141	20	III	3			型式不明	3条の斜位の条痕による横位の刺剥尖。	有	SYR5/6	石英、輝石	B-9
142	20	IV	b			諸種式	口縁部。深鉢式で底部はキャリバーパーク。波状口縁。口縁部は底部に内凹する。口縁部底面に横位の粘付印。縞文を地とし、手行沈線による横位の条痕。	無	7.5YR5/3	石英、輝石、白色粒子、長石	J-10
143 a	20	IV	b			諸種式	波状口縁。口縁部に跡み。縞文を地とし、横位の平行沈線を地とし、内面に沈線。	有	10YR2/2	石英、輝石、白色粒子、長石	O-9
143 b	20	IV	b			諸種式	底部。縞文を地とし、横位の平行沈線を地とす。	無	7.5YR4/6	石英、輝石、白色粒子、長石	P-9
144	20	IV	b			諸種式	口縁部裏面下に横位のあらわし隆帯を貼付し、その上下に越位の隆帯を貼付し。脚部は縞文を地とし、底辺上に縞文を地とす。	有	SYR5/4	石英、輝石、白色粒子、黑色粒子、白雲母	A1-27
145	20	IV	b			諸種式	口縁部裏面下に横位のあらわし隆帯を貼付し。その上下に越位の隆帯を貼付し。脚部は縞文を地とし、底辺上に縞文を地とす。	有	SYR4/4	石英、輝石、白色粒子、黑色粒子、白雲母	B-9
146	20	IV	b			諸種式	縞文を地とし、上部に平行沈線を地とす。	無	SYR5/6	石英、輝石、白色粒子、長石	M-19
147	20	IV	b			諸種式	口縁部部分に浮線を有する。	無	7.5YR4/4	石英、輝石、白色粒子、白雲母	AH-20
148	20	IV	b			諸種式	底部。平行沈線。	無	7.5YR5/4	石英、輝石、白色粒子、黑色粒子、長石	M-19
149	20	IV	d			十三書捲式	結節縞文線を曲線状に地とす(渦巻文の一部か)。	無	7.5YR3/1	石英、白色粒子、長石、白雲母	-

埠田 番号	標 様	回版 番号	群	類	種	型式	文様調整等	地層 (Ran)	胎土	グリッド	
150	21	IV	e	I		型式不明	波状口縁。原体R.L.の縞文を模倣に施文。輪郭み が裏面に確認される。	無	7.SYR4/4	石英多、白色粒子、黒色粒子、長石 多。	0-19
151	21	IV	e	I		型式不明	原体輪郭しの縞文を模倣に施文。輪積みが裏面 に確認される。	無	7.SYR4/2	石英、白色粒子、黒色粒子、長石、 黒雲母、赤色岩片	0-10
152	21	IV	e	I		型式不明	波状口縁。原体R.L.の縞文を模倣に施文。輪積み が裏面に確認される。	無	7.SYR4/4	石英多、輝石、白色粒子、砂粒	W-17
153 a	21	IV	e	I		型式不明	原体輪郭しの縞文を模倣に施文。輪積み が裏面に確認される。	無	SYRS/4	石英多、白色粒子、黒色粒子、長石 多、黑雲母。	I-9
153 b	21	IV	e	I		型式不明	底部付近。原体輪郭しの縞文を模倣に施文。 輪積み	無	SYRS/6	石英多、輝石、白色粒子、黒色粒子、 長石多、黑雲母。	I-8
154	21	IV	e	3		型式不明	口縁部。外面は無文。内面は丁寧に調整。	無	7.SYR5/4	石英、黑色粒子、長石多、含雲母、 黑雲母多、白色岩片	I-11
155	21	IV	e	3		型式不明	肩部から底部。無文。	無	7.SYR6/4	石英多、輝石多、長石、赤色岩片、 白色岩片	W-12
156	21	V	a			五領ヶ台式	波状口縁。口縁に沿って2条の波線。口縁部端部 に瘤状の貼付文。	有	SYRS/6	石英、輝石、長石、含雲母、黑雲母 多。	-
157	21	V	a			五領ヶ台式	底辺に2条の波状波線。	有	SYRS/6	石英、赤色岩片、白色岩片、砂粒	H-6
158	21	V	a			五領ヶ台式	平行する2本の波線で帯状に区画された中を源体 L.R.O.の波状文で充填。	有	SYRS/6	石英、輝石、赤色粒子、白色粒子、 黒雲母	V-17
159	21	V	b			輪板式	三角序文。沈款式。	無	SYRS/6	石英、輝石、白色岩片	AA-22
160	21	V	b			輪板式	三角序文。沈款式。	無	SYRS/6	石英、輝石、白色粒子、長石	AG-25
161	21	V	b			輪板式	口縁部。波紋状文と模倣の跡のある輪帶で腰垂 文を表す。	無	SYRS/6	石英、輝石、白色粒子、含雲母多	AI-20
162	21	V	b			輪板式	腰帶部に捺印した波線を施文。腰帶上に波紋状文 と接する部分を押す。	無	SYRS/4	石英、白色粒子、黑色粒子、含雲母	-
163 a	21	V	c			曾利式	原体R.L.の縞文を斜位に施文。腰帶に幅の広い腰帶 を貼付する。圓弧を波線で押さえ、腰帶の中央に1 条の波線を施文。	無	7.SYR6/6	石英、輝石、赤色粒子少、白色粒子、 長石	-
163 b	21	V	c			曾利式	原体R.L.の縞文。面部より下部は無文。	無	7.SYR6/6	石英、輝石、白色粒子	-
164	21	V	c			曾利式	腰帶の次緒。	無	7.SYR3/1	石英、輝石、白色粒子、長石	0-10
165	21	V	d	2		型式不明	把手。斜めに貼付した腰帶の正面に貫通しない 孔が1つ、両側面から穿孔あり。	無	7.SYR5/4	石英、輝石、白色岩片、赤色岩片	-
166	21	V	d	I		型式不明	把手。斜めに貼付した腰帶の正面に貫通しない 孔が1つ、両側面から穿孔あり。	無	10YR4/1	石英、輝石、赤色岩片。白色岩片多	AI-20
167	21	V	d	I		型式不明	把手。穿孔あり。	無	7.SYR5/3	石英、輝石、黑色粒子、白色岩片、黑 色岩片	I-6
168	21	V	d	I		型式不明	原体R.L.の縞文を斜位に施文。	無	SYRS/6	石英多、輝石、白色粒子、長石、赤 色岩片	-
169 a	22	VI	a			舟名寺	口縁部。口縁部に沿った平行波線と曲線状の平行 波線で区画し、無文と原体R.L.の縞文で充填。内面 はナデ。	有	7.SYR6/6	石英、輝石、黑色粒子、黑雲母	Z-24
169 b	22	VI	a			舟名寺	底部(平底)。無文。	無	7.SYR5/6	石英、輝石、赤色粒子、白色粒子、 黑色粒子。角閃石	AA-24
170	22	VI	b			堀之内	突起部。突起部が3ヶ所。孔が3ヶ所あり次緒によ り2ヶ所の孔が封ばれる。	無	7.SYR7/6	石英、輝石、赤色粒子、白色粒子	W-15
171	22	VI	b			堀之内	口縁部。口縁部直面に平行する1条の波線を施文。 屈曲する。内面にナデによる調整。浅鉢の一部 か。	無	SYRS/6	石英、輝石多、白色粒子、赤色粒子	-
172 a	22	VI	b			堀之内	口縁部。無文。内面にはミガキによる調査。	無	10YR4/2	石英、白色岩片	I-5
172 b	22	VI	b			堀之内	次緒部。外側にはミガキによる調査。	無	10YR5/1	白色岩片	L-17
173	22	VI	c	I		型式不明	口縫に平行する1条の波線。その下に縞文(縮減 している)。	無	7.SYR7/6	石英、輝石、赤色粒子、白色粒子、 長石	-
174 a	22	VI	c	I		型式不明	波状口縁。原体R.L.の縞文を模倣に施文。	無	7.SYR7/6	輝石、白色粒子、黑色粒子、岩片	U-20
174 b	22	VI	c	I		型式不明	原体R.L.の縞文を模倣に施文し、肩部下部はミガ キ半。	無	7.SYR6/6	石英少、輝石、白色粒子、黑色粒子、 岩片	S-20
175	22	VI	c	I		型式不明	原体R.L.の縞文を斜位に施文。一部に擦痕。内面 はナデによる調査。	無	SYRS/6	石英、輝石、白色粒子	AO-23
176	22	VI	c	2		型式不明	口縫部。口縫に平行して1条の波線。その間を原 体輪郭しの縞文で充填。玉筋文を施文。	無	7.SYR6/6	赤色粒子、白色粒子、黑色粒子、長 石	I-5
177	22	VI	c	2		型式不明	口縫部。口縫に平行する1条の波線。その下部に 斜位の波紋を施す。内外面はナデによる調査。	無	7.SYR7/6	石英、輝石、白色粒子	AA-24
178	22	VI	c	3		型式不明	底部(平底)。研磨痕。	無	7.SYR6/6	輝石少、白色粒子、黑色粒子、灰色 粒子、砂粒多	I-6
179	22	VI	c	3		型式不明	口縫部。口縫に平行する1条の波紋を施す。ヘラ 状工具による連続した刺突。	無	10YR4/2	輝石、白色粒子少	-
180	22					土製品	縞文を地文とし模倣に1条の波紋次緒・キャビ タ文・斜突を施す。	無	SYRS/4	石英、黑色粒子、金雲母、白色岩片	AK-21

2 石器

(1) 石鏃 (第71~73図181~238)

183点出土し58点を図示した。図示した資料を形状によって4形態に分類を行った。

a類：脚を有するもの (181~224)

44点分類した。181~200は、脚部が比較的長い資料である。その中でも、181~183は非常に長くなっている。また、183は脚の先が円形に整えられている。192は脚の先が方形に整えられており、縁辺は、鋸歯状を呈している。193~199は、脚部の間がU字状を呈している。200~211にかけて、脚部間のU字状の湾曲は弱まり、212~224では、屈曲部があまり顕著ではない。特に221~224は、平基に近くなっている。202・203・213~215・224は、素材剥片の元の面を残しているが、形状が整っているため完成品と判断した。石材は、諏訪星ヶ台群の黒曜石が多数を占めるが、神津島恩馳島群やガラス質黒色安山岩なども用いられている。

b類：平基であるもの (225~230)

6点分類した。229を除いて比較的大型の資料である。全体的に基部は薄く作られている。石材は229・230を除き、全てガラス質黒色安山岩である。なお、本類の資料は、漸移層以下で出土の例が多い。

c類：平面形状が五角形に近いもの (231~235)

5点分類した。縁辺部にのみ加工を施して、形状を五角形にした資料である。脚部を有するもの(231~233)と、平基なもの(234)がある。232は縁辺がやや鋸歯状を呈する。石材は全て珪質粘板岩である。

d類：茎を有するもの (236~238)

3点分類した。236・237は、逆刺が下方へ伸びているが、238はやや上向きに突き出している。237は茎部が長い資料である。石材は236が黒曜石諏訪星ヶ台群、237・238がホルンフェルスである。

(2) ドリル (第73図239)

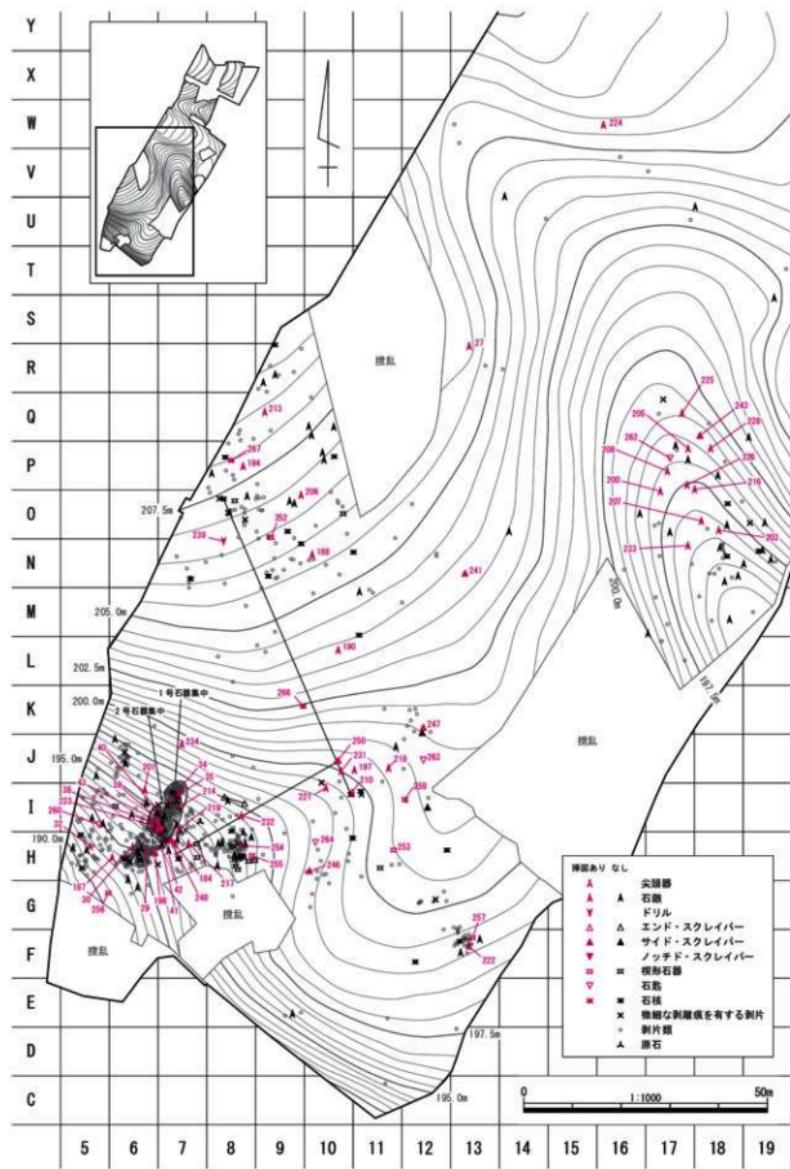
239は、素材剥片の縁辺を中心に細かな加工を行い、尖端部を作出している。加工は、石鏃を製作する際のものに似ているが、素材剥片の器体の厚さがそのまま残っている。そのため、尖端部の断面形状は、菱形に近くなっている。また、尖端部の両脇には、使用時のものと思われる擦痕が残存している。石材はガラス質黒色安山岩である。

(3) サイド・スクレイパー (第74~76図240~251)

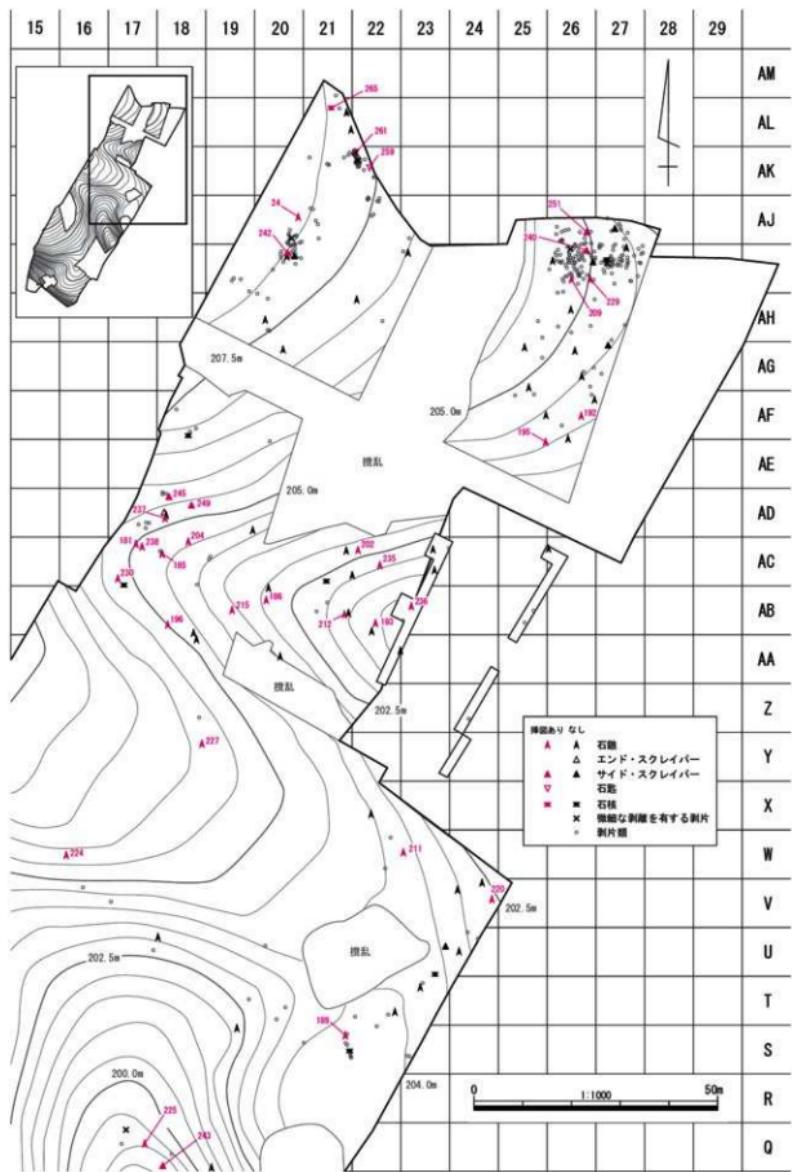
側縁に連続した加工を施して刃部とした石器を、サイド・スクレイパーとして12点分類した。刃部は厚さを持たないものが大半であるが、240のように厚い刃部を有するものも認められる。241は鋸歯状の加工を施している。素材となっている剥片は、244~251のような大型の縦長剥片である場合が多い。245・251は、腹面側からのみ加工を行っている。246~248の刃部は、表裏両面から加工を行っている。特に248は、器体の厚さも合わせて、小型の打製石斧のような印象も受ける。石材が珪質シルト岩であることから、打製石斧から剥離された剥片を素材としている可能性も考えられる。250は刃部の上部を腹面側から、下部を背面側から加工を行っている。使用されている石材は、全体的にチャートや珪質頁岩などの珪質な石材が多く含まれる。

第11表 縄文時代 石器組成表

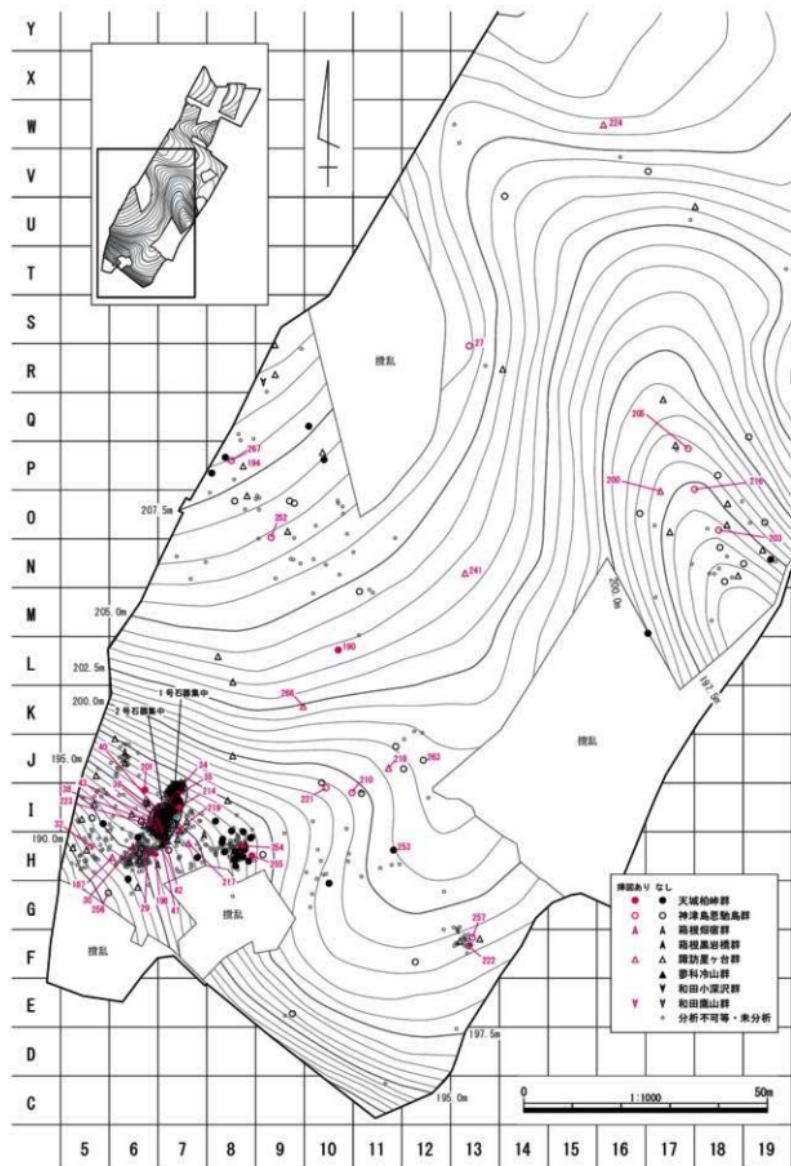
	尖頭器 (未製品含む) 石器	ドリル	スケンド ・サイド ・バイ	スケンド ・サイド ・バイ	ノフチド ・サイド ・バイ	複形石器	石器	微細な鋒を 有する剥離片	石核	剥片類	原石	打製石斧	磨製石斧	礫石	磨歯石	磨石	凹石	凸石	石皿	合計
黒曜石																				
天城柏崎群	19			1		9			4	34										67
神津島恩馳島群	42			4		4	2	5	3	61										121
箱根烟宿群	2							2	1	10										15
箱根黒岩橋群	1									1										2
譚訪星ヶ台群	2	62	1	1		1	4	8	328	1										408
蓼科冷山群										6										6
和田小深沢群										1										1
和田鷹山群	6			1	1			3	1	89										101
分析不可等					1			1		378										380
未分析	6		3	2	1	11	4	10	1781	1										1819
ホルンフェルス	7		2	3	1	1	1	2	12	108	1	1								139
ガラス質黒色安山岩	19	1	1	1			3	2	1	44										72
細粒安山岩										4	1									5
硬質細粒凝灰岩						1				7										8
緑色凝灰岩										1	1									2
凝灰岩										2										2
赤玉石(碧玉)										1										1
メノウ				1						1										2
流紋岩		1								6										7
チャート	5		2							4										11
硬質頁岩										1										1
珪質頁岩	4		4				1		8											17
頁岩									2	9		1								12
珪質粘板岩	9																			9
粘板岩										1										1
粗粒砂岩																				1
中粒砂岩										1			2							3
細粒砂岩										1		1	2							4
珪質シルト岩			1						1	1										3
シルト岩									2											2
デイサイト													2							2
緑色片岩										1										1
斑レイ岩													1							1
カンラン岩												3								3
輝石安山岩									4	1	14	33	41	4	1	4	3			105
多孔質安山岩												7	5	1	1	5	1			20
玄武岩										1			8	2	1					12
多孔質玄武岩												11	5	1	1	5	1			24
計	2	183	1	7	23	3	26	6	24	42	2887	3	15	3	15	64	54	9	3	3390



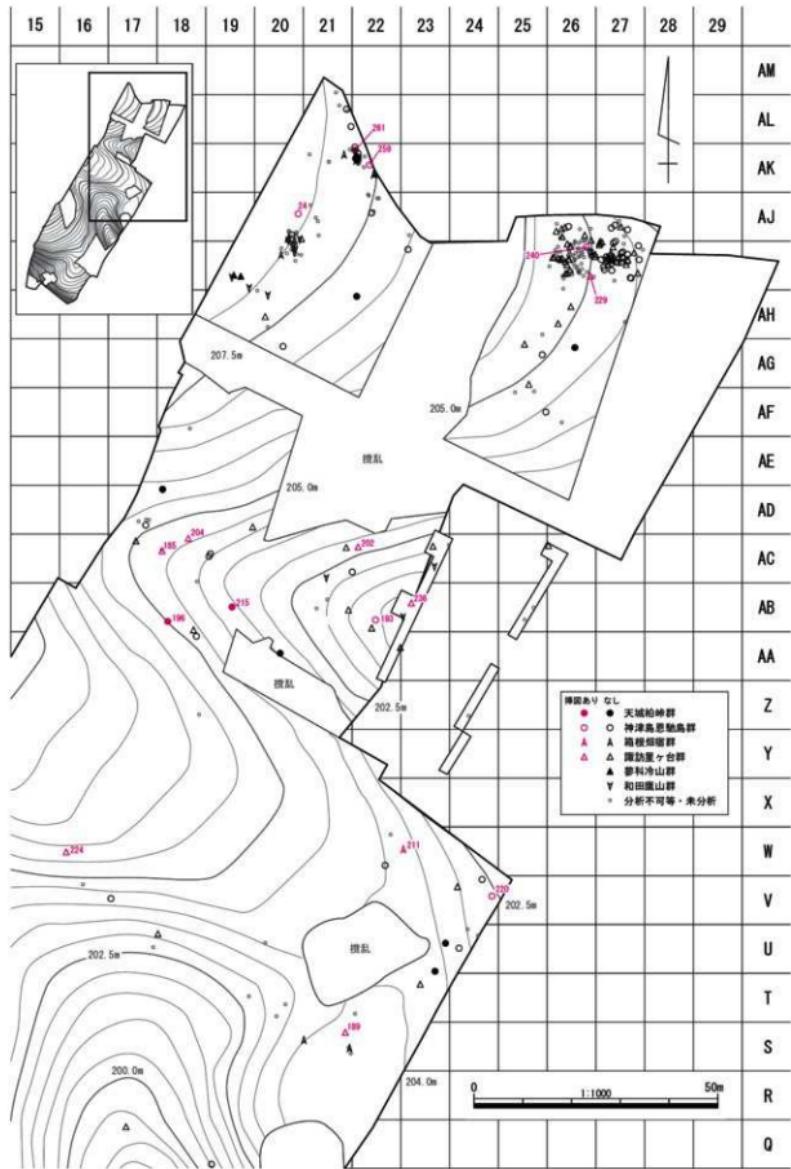
第66図 縄文時代 剥片石器器種別分布 (1)



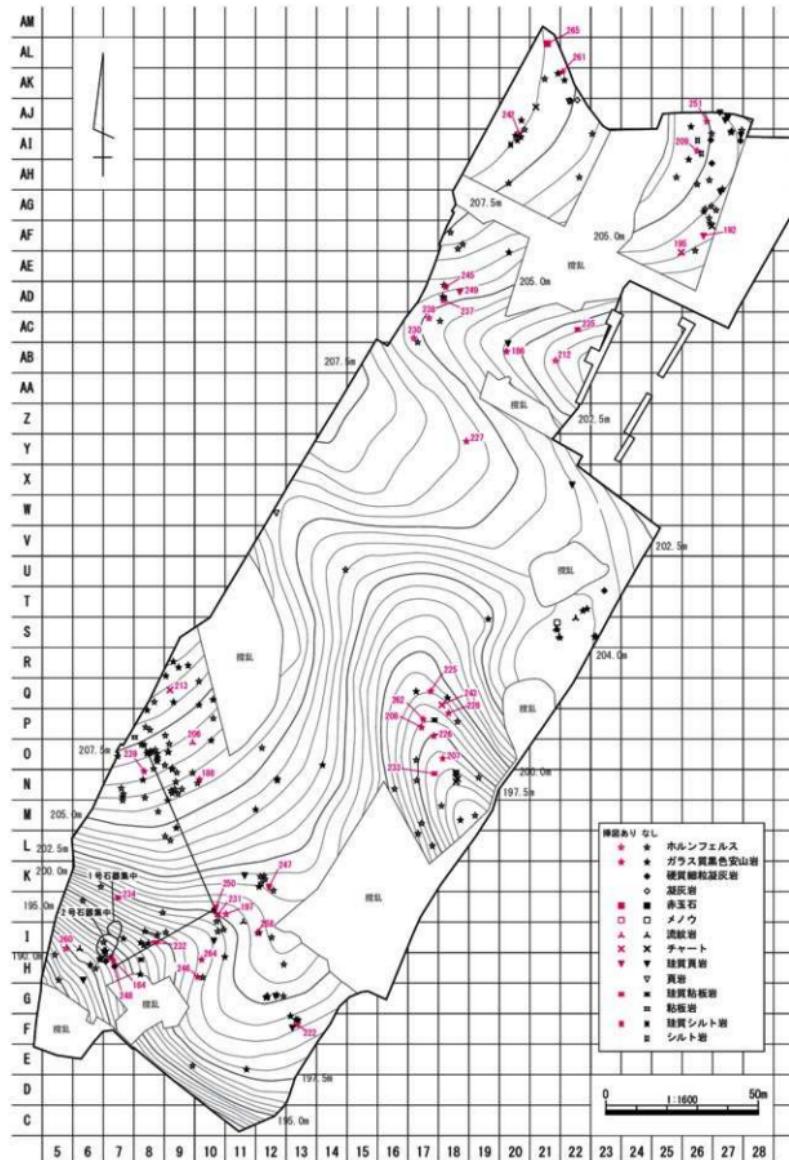
第67図 縄文時代 剥片石器種別分布（2）



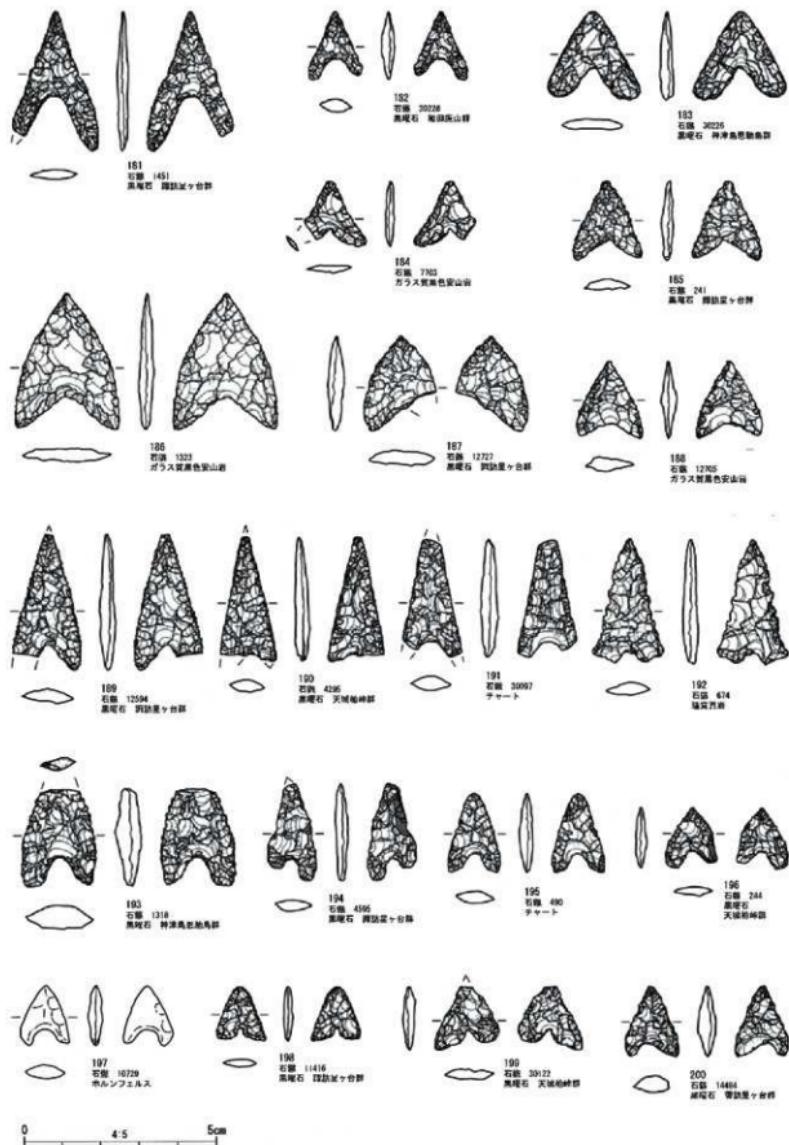
第68図 縄文時代 剥片石器黒曜石产地別分布（1）



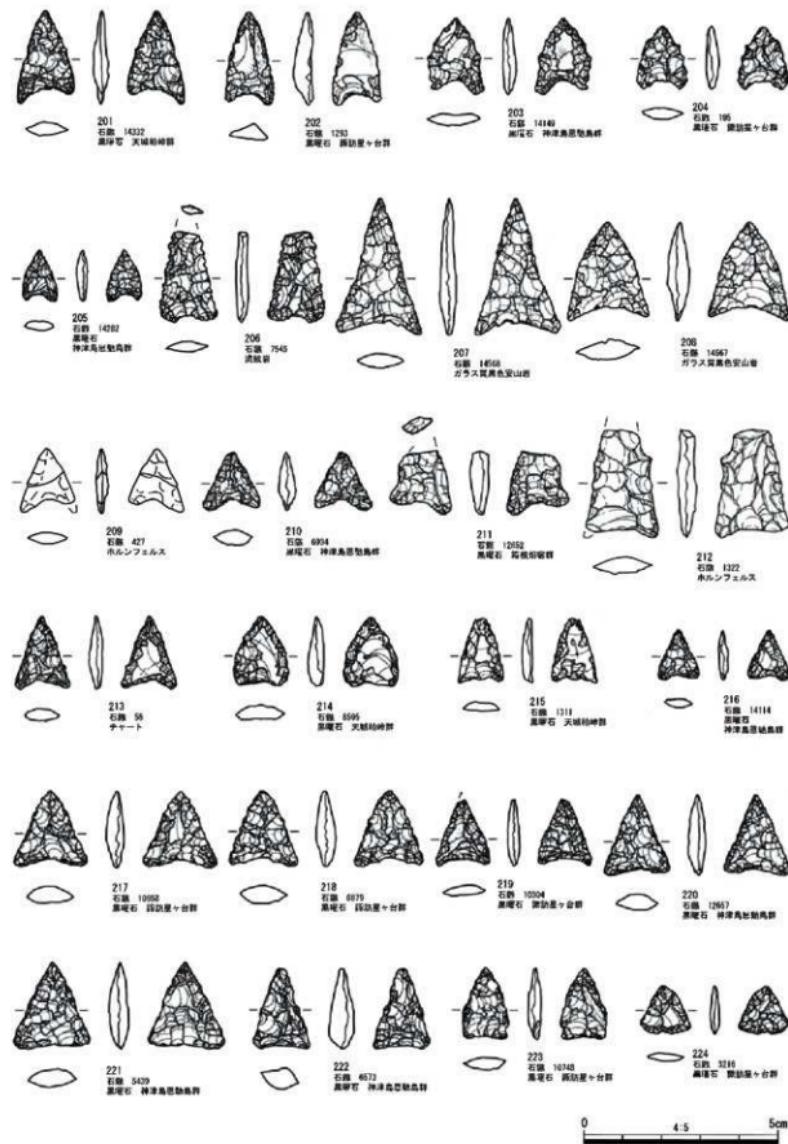
第69図 繩文時代 剥片石器黒曜石產地別分布（2）



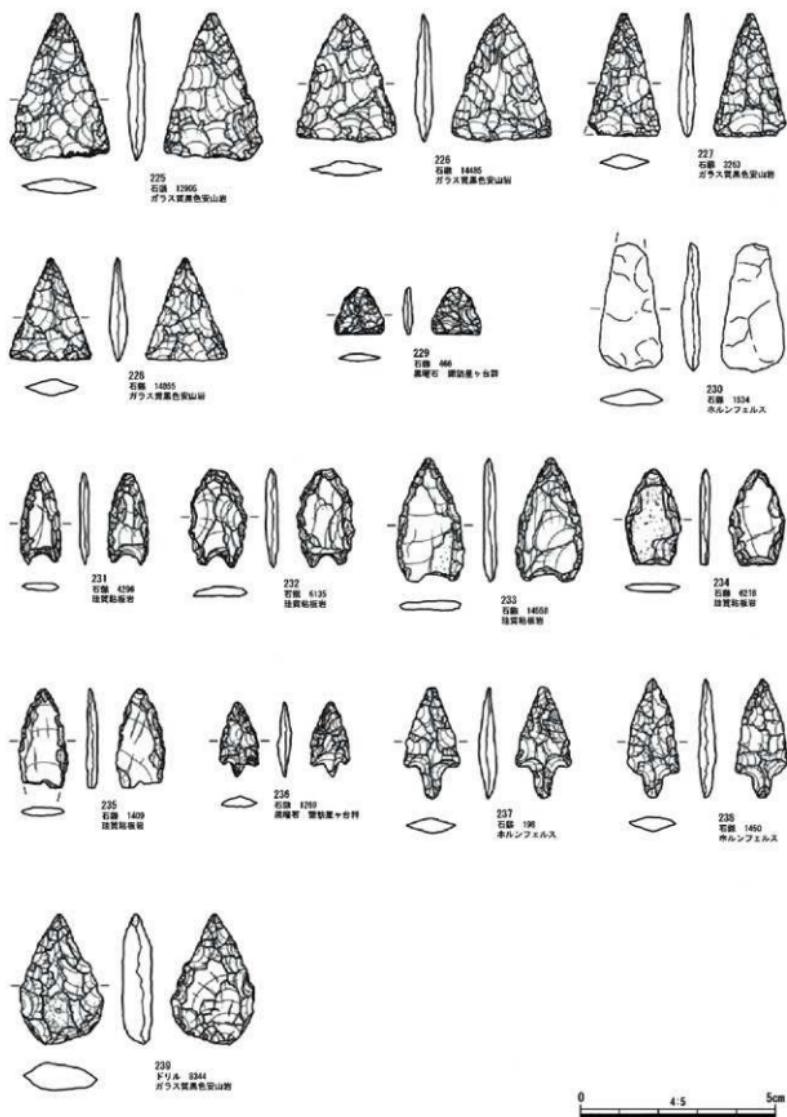
第70図 繩文時代 剥片石器黒曜石以外石材別分布



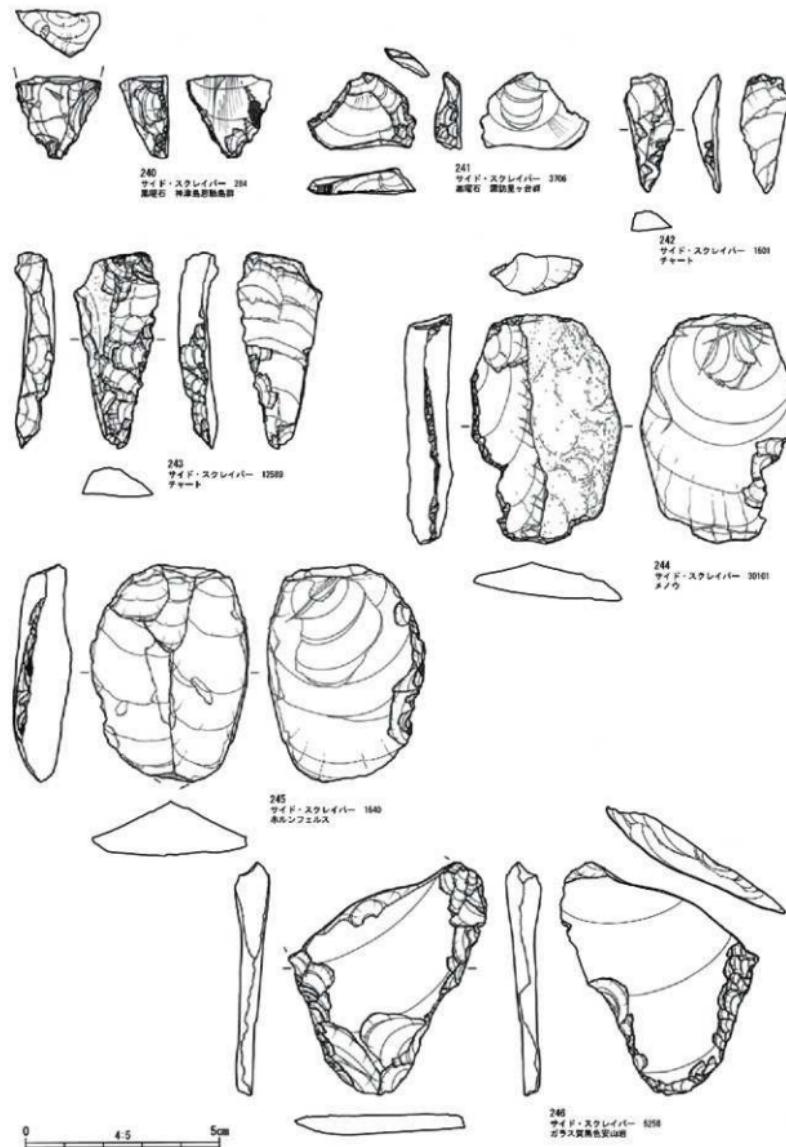
第71図 繩文時代 出土石器（1）



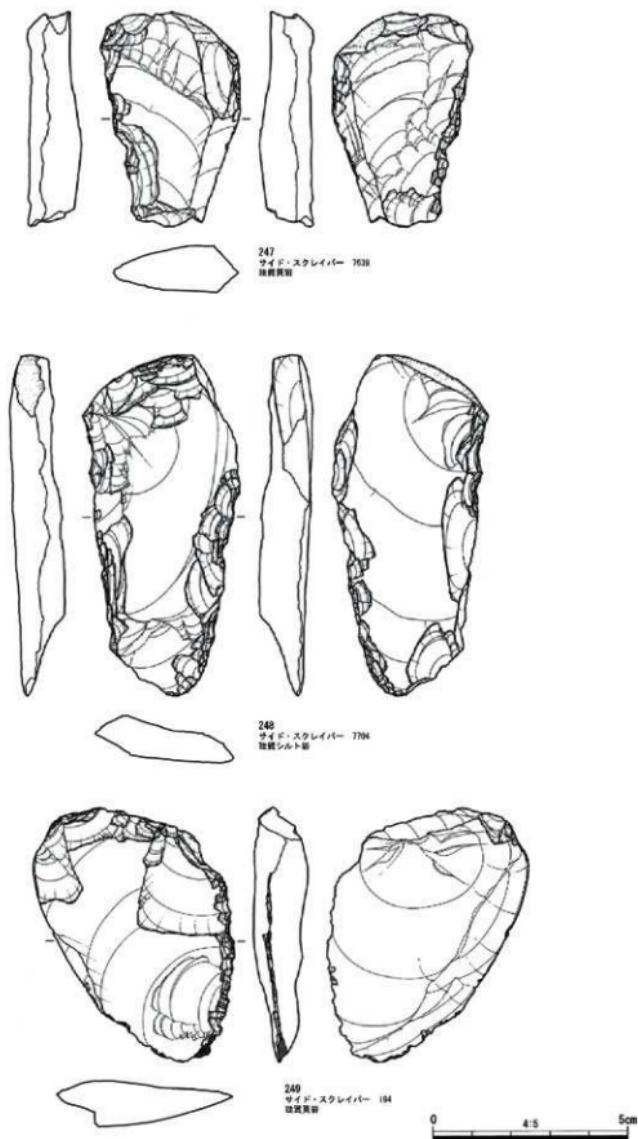
第72図 繩文時代 出土石器（2）



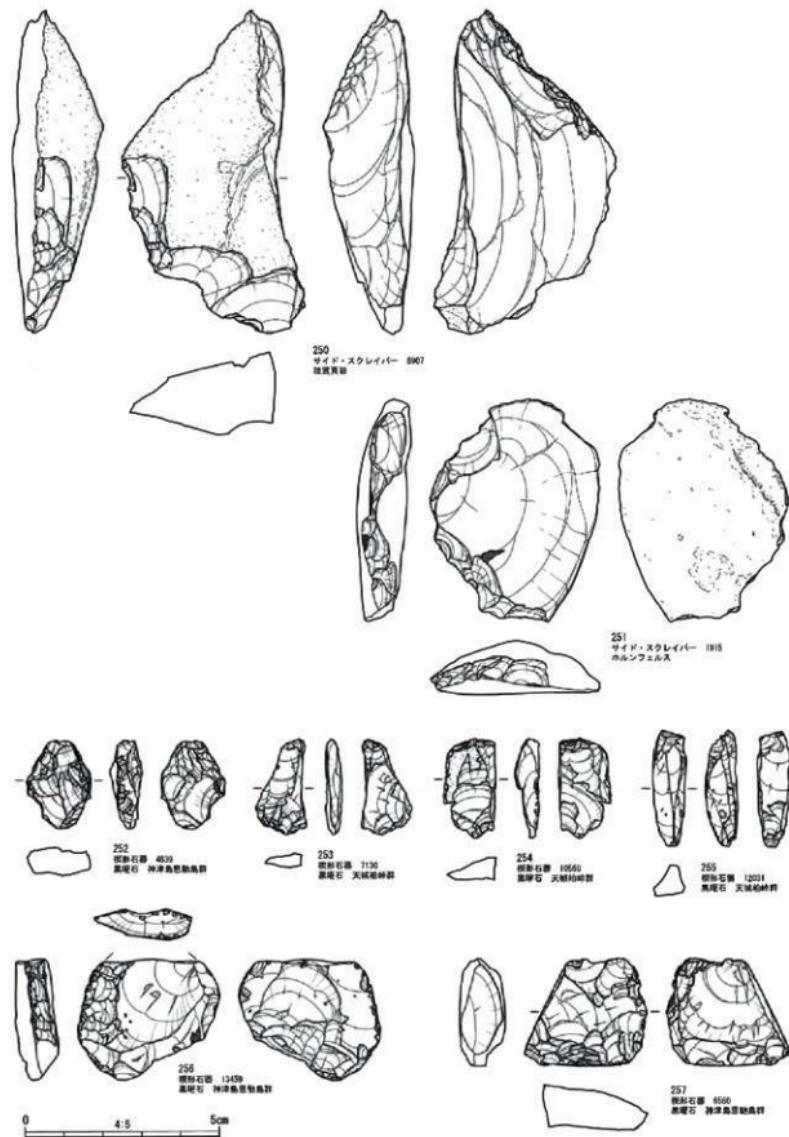
第73図 縄文時代 出土石器（3）



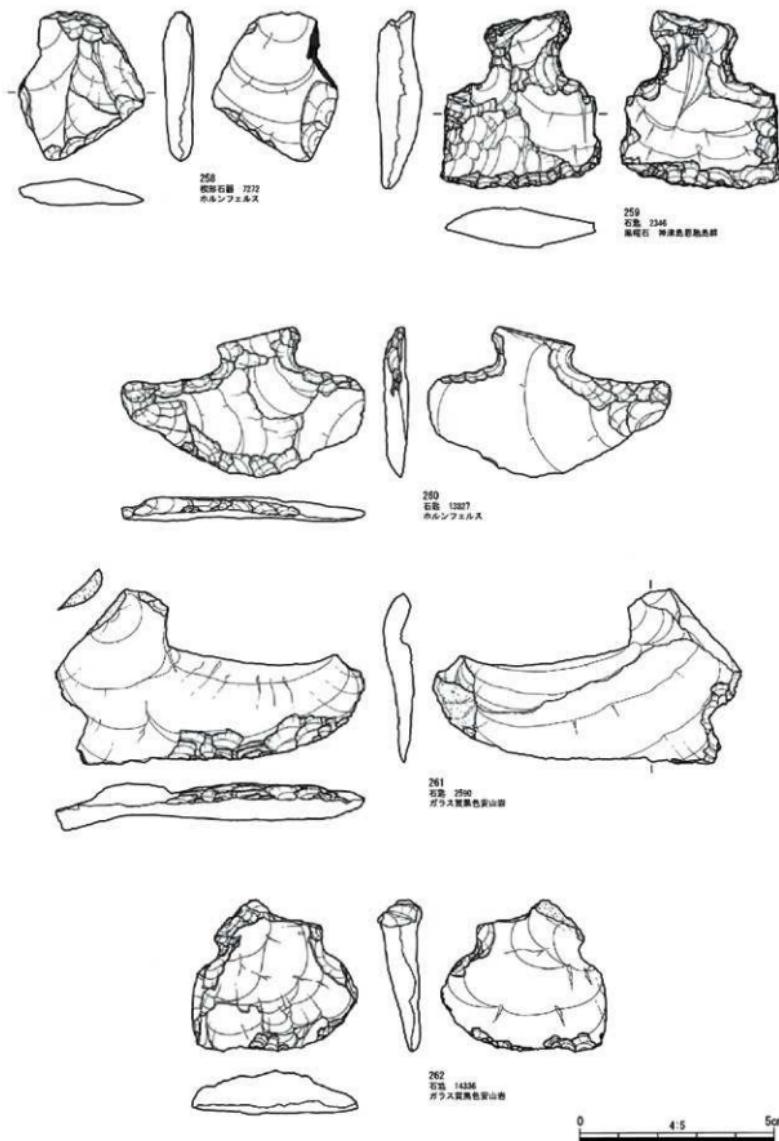
第74図 縄文時代 出土石器（4）



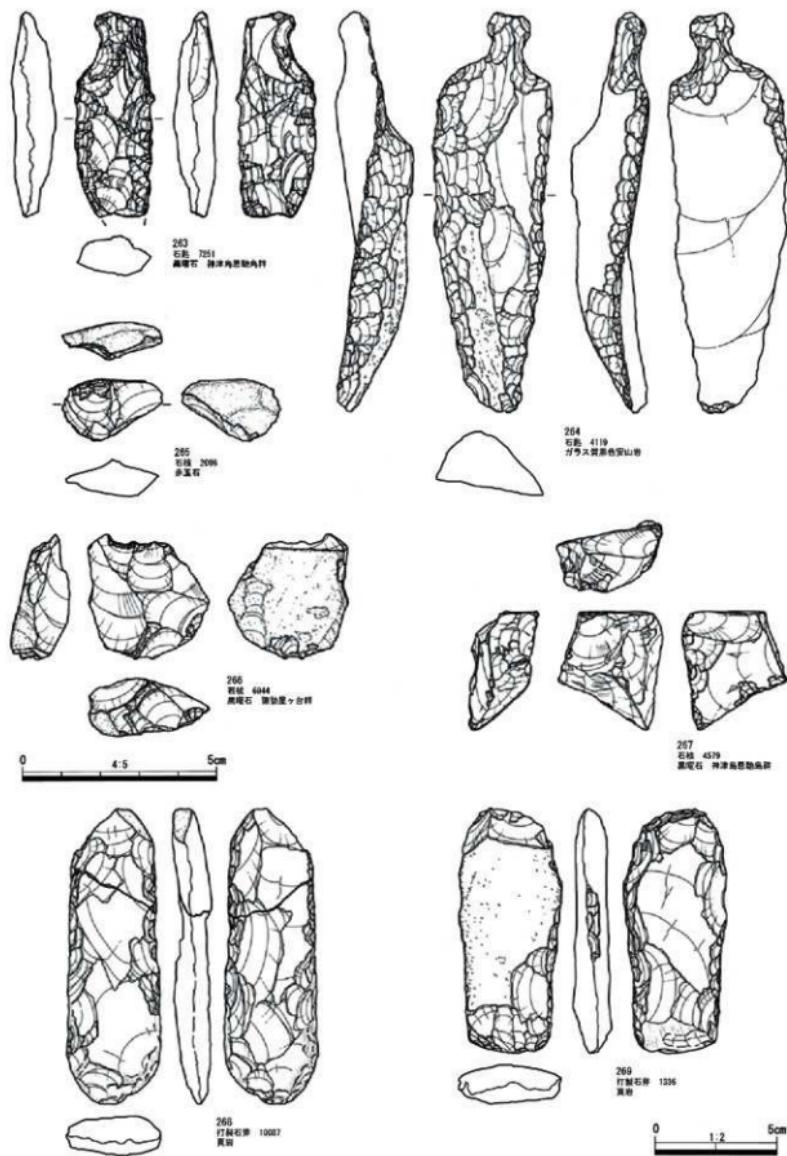
第75図 縄文時代 出土石器（5）



第76図 縄文時代 出土石器（6）



第77図 縄文時代 出土石器（7）



第78図 繩文時代 出土石器（8）

(4) 楕形石器（第76・77図252～258）

両極剥離の際に縁辺にできた明確な潰れが、全点に確認できた。252・257・258は上下方向だけでなく、左右方向からの両極剥離も確認できる。256・257は、側縁に加工痕が確認できる。この2点は器体自体に厚みを有しており、加工面も広くとられている。そのため、石匙の刃部に近くなっている。258を除いてすべて黒曜石であり、神津島恩馳島群、天城柏崎群が主体となっている。これは図示した資料以外にも同様の傾向である。

(5) 石匙（第77・78図259～264）

6点を図示した。259～262は横型の石匙、263・264は縦型の石匙である。

259は、器体上部の中央付近に、太いくびれ部を作出している。くびれ部には潰れが確認できる。器体の全周に加工を施しているが、縁辺のみであり、器体の内側までは及んでいない。横型の石匙であるが、長さと比較して、幅はやや狭い。石材は黒曜石神津島恩馳島群である。

260は、器体上部の中央付近に、太いくびれ部を作出している。下縁辺に加工が確認できる。下縁辺の加工に比べて、くびれ部の作出は入念に行われている。石材はホルンフェルスである。

261は、器体上部左側に、太いくびれ部を作出している。くびれ部の作出は片側のみ加工が行われ、もう片側は、素材剥片の元の形状をそのまま利用している。下縁辺に加工が施され、刃部としている。刃部の加工は、素材剥片の背面側から施されている。石材はガラス質黒色安山岩である。

262は、器体上部の中央付近に、太いくびれ部を作出している。全体的に加工は少なく、くびれ部の作出も数回の剥離で行われている。下縁辺に加工が確認できるが、貧弱である。横型の石匙であるが、長さと比較して、幅はやや狭い。石材はガラス質黒色安山岩である。

263は、器体上部の中央付近に、太いくびれ部を作出している。右側面上部を折断しており、くびれ部が確認できないが、折断面から加工を施して代わりとしている。両側縁に加工を施して、刃部としている。刃部の加工は入念に行われ、器体の内側にまで及んでいる。先端部は折損している。石材は黒曜石神津島恩馳島群である。

264は、器体上部の中央付近に、くびれ部を作出している。くびれ部の作出は入念に行われている。両側縁に加工を施して、刃部としている。素材剥片が湾曲しているため、器体がやや捻じれているが、出土した石匙の中で、最も精緻に製作されている。石材はガラス質黒色安山岩である。

(6) 石核（第78図265～267）

265は、碟面を有した小型の単設打面石核である。平坦な碟面を打面としているが、頭部調整は念入りに行っている。得られた剥片は、小型の縦長剥片である。石材は赤玉石（碧玉）である。

266は、剥片を素材とした、複設打面石核である。まず、剥片の一端に広く平坦な面を作出して、それを打面として剥離を行っている。次に、平坦な碟面を打面として、腹面側へ求心状の連続した剥離を行っている。得られた剥片は、两者とも小型の縦長剥片である。石材は黒曜石諏訪星ヶ台群である。

267は複設打面石核である。打面転移を繰り返した結果、形状はサイクロ状を呈する。剥片剥離の際に、細かな頭部調整などを行っているが、基本的に以前の作業面をそのまま打面としている。得られた剥片は、小型の幅広剥片である。石材は黒曜石神津島恩馳島群である。

(7) 打製石斧 (第78・82図268~273)

268・269は、短冊形の打製石斧である。刃部周辺に磨耗が確認できる。中でも269の裏面に確認できる磨耗部は、意図的に研磨していた可能性も考えられる。270は、刃部の加工がほとんど確認できない。3点とも、側縁には着柄痕と考えられる潰れが確認できる。石材は、268・269は頁岩、270は緑色凝灰岩である。

271は撥形の打製石斧である。刃部の左側縁側は、折損した後に加工を施しており、繰り返し使用されたことが窺える。石材はホルンフェルスである。

272は草鞋形の打製石斧である。大型の剥片を素材としており、裏面には素材剥片の面が残存している。大型であるが、その割に平坦な資料となっている。基部を折損している。石材は輝石安山岩である。

273は分銅形の打製石斧である。両側縁の抉り部分には、着柄痕と考えられる潰れが確認できる。平坦な円礫を素材としており、加工が顕著に施されている表面と異なり、裏面には未加工の礫面が多く残存している。石材は頁岩である。

(8) 磨製石斧 (第83図274・275)

274は、いわゆる定角式の磨製石斧である。正面、裏面は長軸に対して横方向に磨いており、側面は縱方向に磨いている。正面の刃部は他と区別されており、緩やかな稜が確認できる。全体的に精緻に研磨され、製作されている。石材はカンラン岩である。

275は、平面形状が撥形の磨製石斧である。全面をくまなく研磨しており、正面の刃部は、横方向の研磨が顕著である。両側縁に数ヶ所の剥離面が確認できるが、剥離面にも研磨が施されている。こうした剥離面は着柄痕の可能性も考えられ、補修を行って繰り返し使用されたことが窺える。刃部の一部にも、衝撃痕と考えられる剥離痕が確認できるが、研磨されている。また、基部を折損しているが、折断面にも弱く研磨の痕跡が確認できる。石材はカンラン岩である。

(9) 磨器 (第83~85図276~283)

すべて亜円礫、亜角礫を素材としている。使用されている石材は、ほとんどが安山岩である。

276は、平坦な亜角礫を素材としている。素材となった礫の端部に、数回の剥離で刃部を作出し、その反対側の端部にも剥離を施している。器体の薄さと刃部の位置、僅かに見られる両側縁の潰れなどから、打製石斧として捉えられる可能性も考えられる。石材は輝石安山岩である。

277~281は、素材の一端に連続した加工を施して、刃部としている。277~280は素材の短軸側に、281は長軸側に刃部を作出している。277・278は、裏面にも剥離が確認できる。

282は尖端部を有した刃部を作出している。

283は、器体に対し、求心状に加工を施して、刃部を周縁に作出している。

(10) 磨石 (第86図284~289)

すべて亜円礫を素材としている。使用されている石材の大半は、安山岩か玄武岩である。

284~286は、棒状に近い円礫の端部に、平坦な磨り面が確認できる。288は、円礫の両端部に磨り面が確認でき、形状はつぶて石に近い。289は、平面形状が円形に近く、広い平坦面と周縁に磨り面が確認できる。磨敲石の295・296に似た特徴を持っているが、敲打痕は確認できない。

(11) 敲石（第86図290～292）

290・291は卵状の円礫を素材としている。両端を中心に敲打痕が確認できる。290は、長さ5cm以下の小型の資料である。291は下端部の敲打痕が顕著であり、素材礫の形状が変化するほどである。292は、棒状の礫を素材とし、左側面に敲打痕が確認できる。石材はすべて輝石安山岩である。

(12) 磨敲石（第86～88図293～305）

すべて亜円礫を素材としている。広い面に磨り面を有し、周縁、もしくは端部に敲打痕を有している例が大半である。使用されている石材の大半は、安山岩か玄武岩であり、火山岩ではない石材は確認できなかった。

293～297は平面形状が円形で、298～303は平面形状が梢円形に近い。304は棒状である。296～299・303・304は、全体的に磨り面が顕著である。また、305は比較的大型の資料である。敲打痕はあまり顕著ではない。小型の石皿であった可能性も考えられる。

(13) 四石（第88図306～308）

すべて亜角礫を素材としている。使用されている石材は、安山岩か玄武岩である。

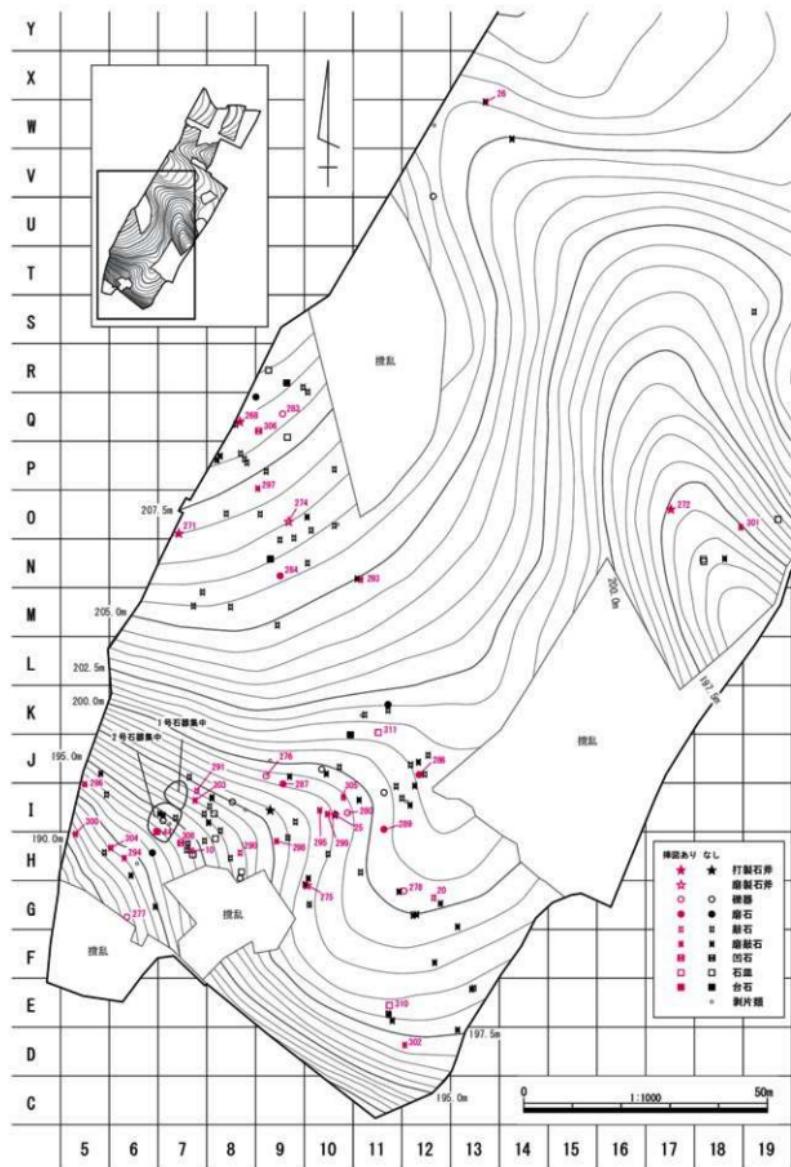
306・307は、広く平坦な面の中央と側面に凹みが確認できる。凹みは平坦な面の中央が最も顕著である。この2点は礫面が赤黒く変色しているが、凹みの範囲は変色しておらず、変色一凹みの順が確認できる。変色の原因は被熱か、あるいは水の流れる礫層から採取したため、当初から鉄サビが付着していた可能性も考えられる。しかし、306には、一部にスス状の黒色付着物が確認できることから、被熱していると考えられる。308は、礫面に複数の凹みが確認できる。凹みは数ヶ所に集中して配置されている。素材となった亜角礫は、重量10kgを超える大型のものであり、石皿のように平坦ではなく、厚みを有している。また、一部は被熱によって赤化している。

(14) 石皿（第89図309～311）

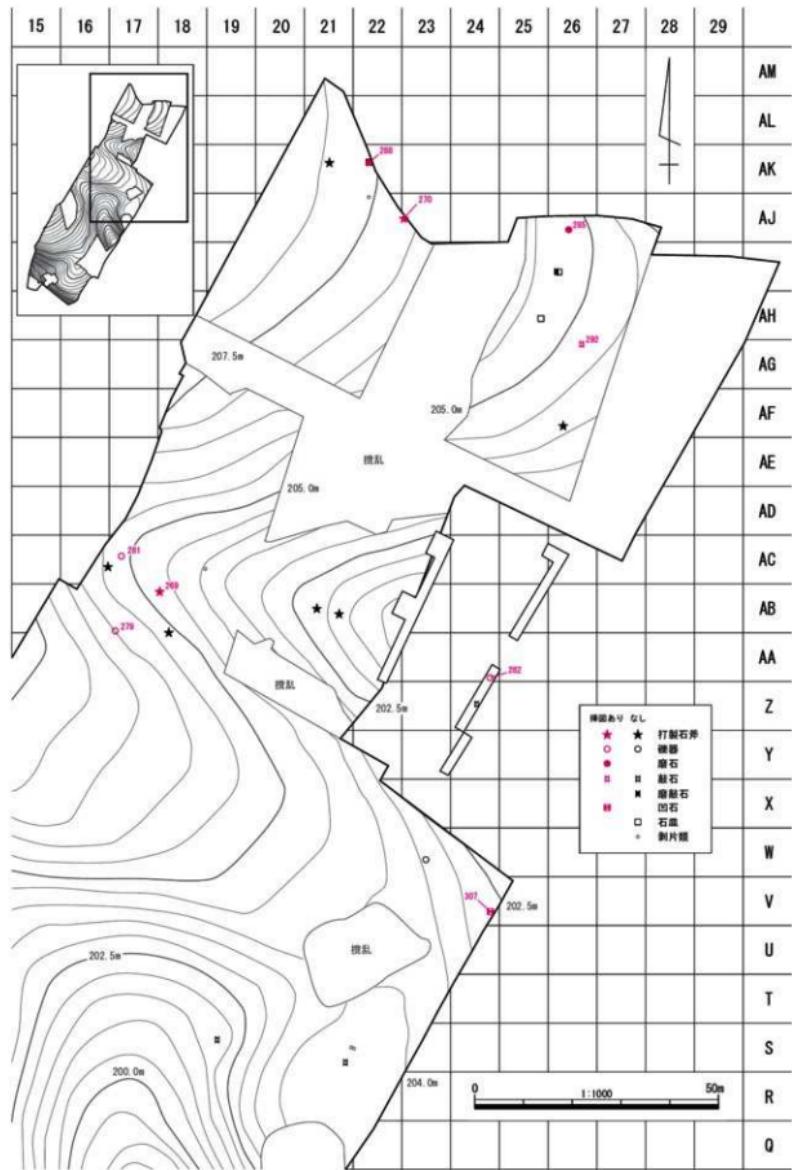
すべて亜円礫、亜角礫を素材としており、平坦な面の中央に使用面が確認できる。使用面は緩やかに凹んでおり、また、潰れが確認できることから、磨る行為を繰り返した結果、成形されたことが窺える。使用されている石材は、安山岩か玄武岩である。

309・311は使用面が狭く、使用箇所と未使用箇所の境が、はっきりとした稜となっている。

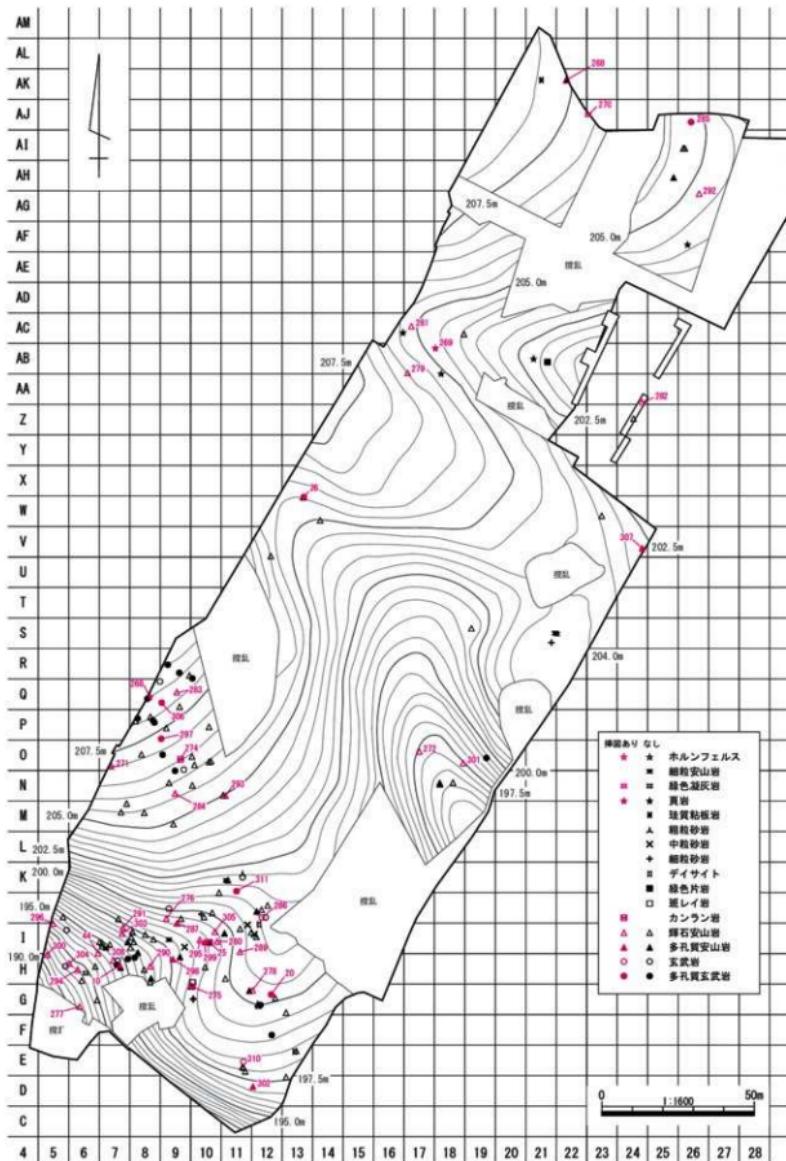
図示した3点は、重量8～12kgの大型の資料である。



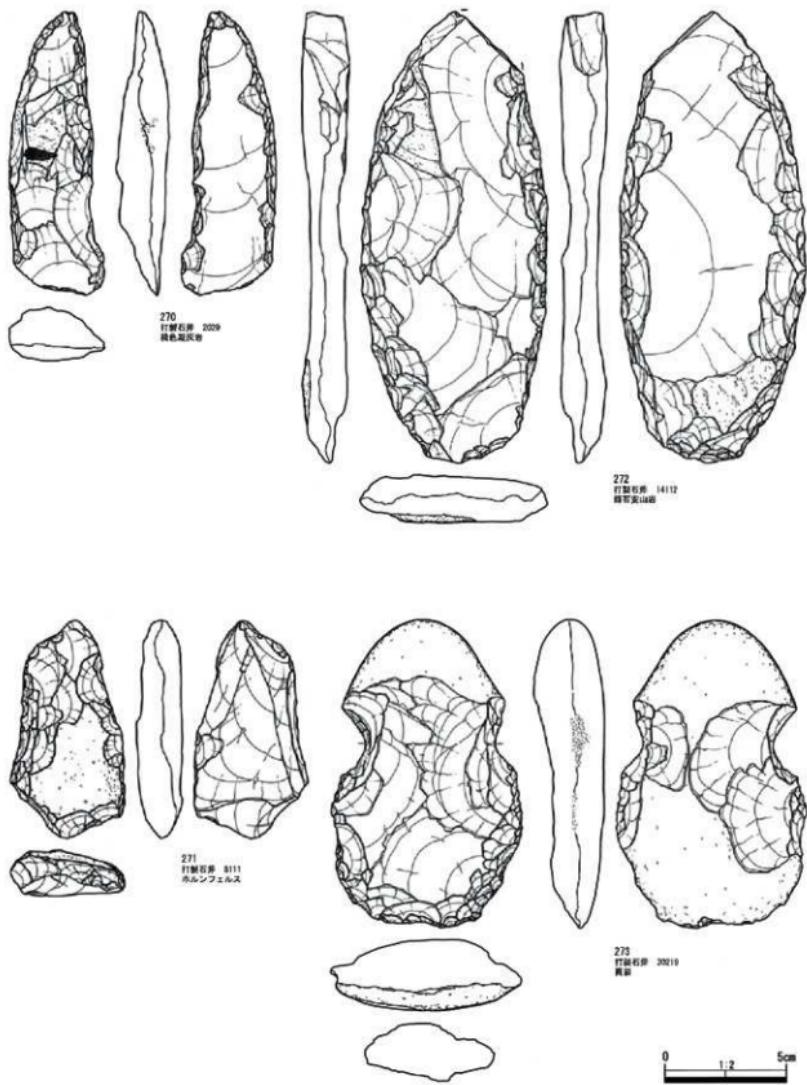
第79図 繩文時代 磯石器器種別分布（1）



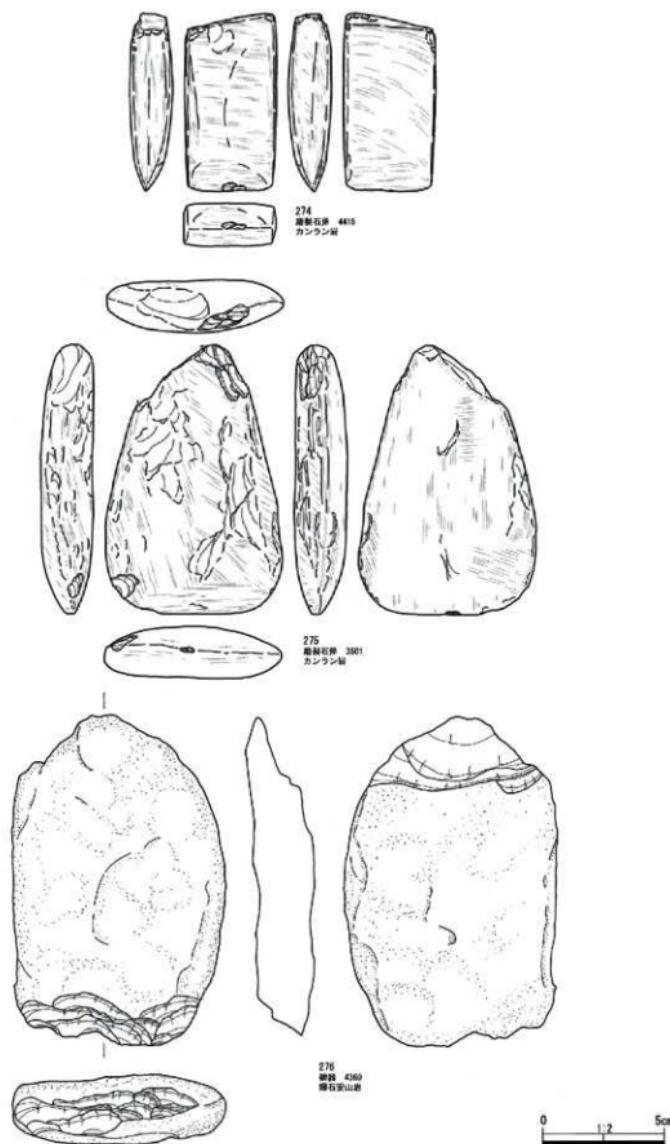
第80図 繩文時代 碓石器種別分布(2)



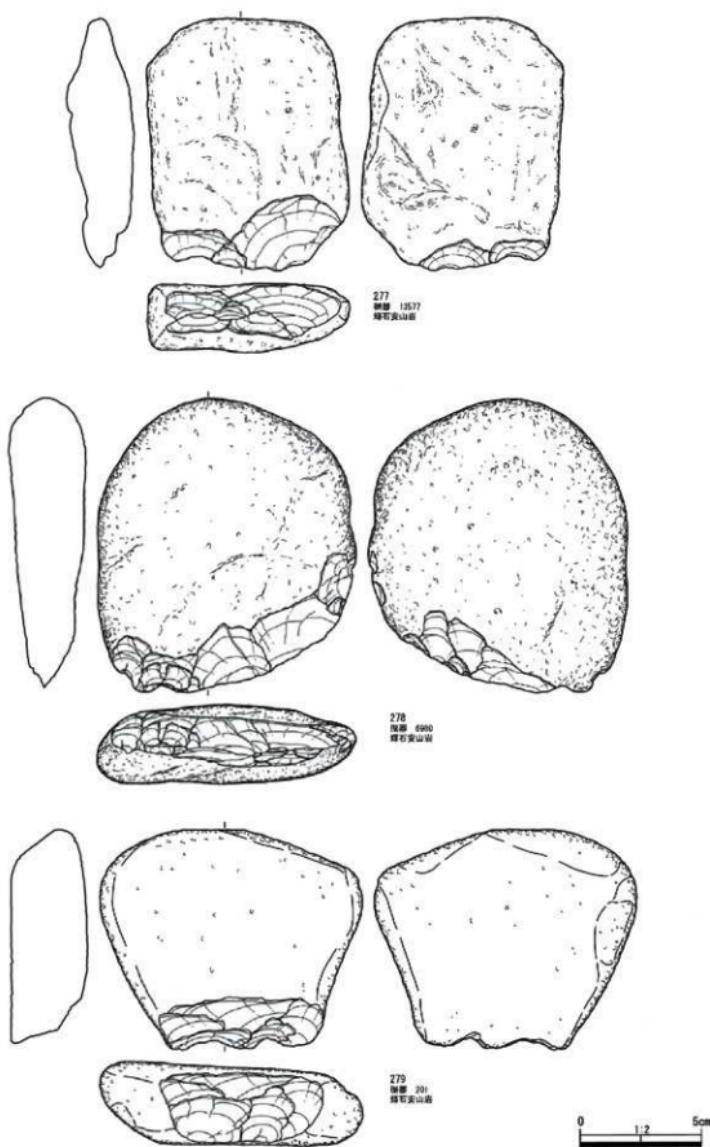
第81図 縄文時代 碓石器石材別分布



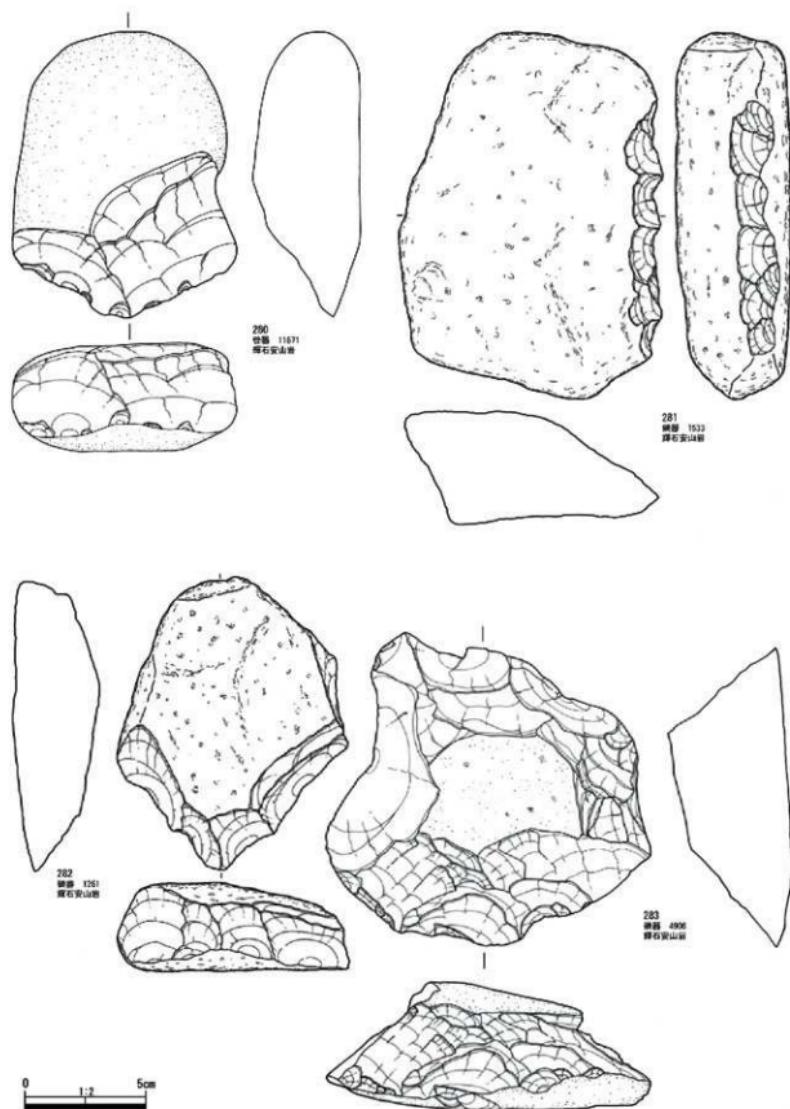
第82図 縄文時代 出土石器（9）



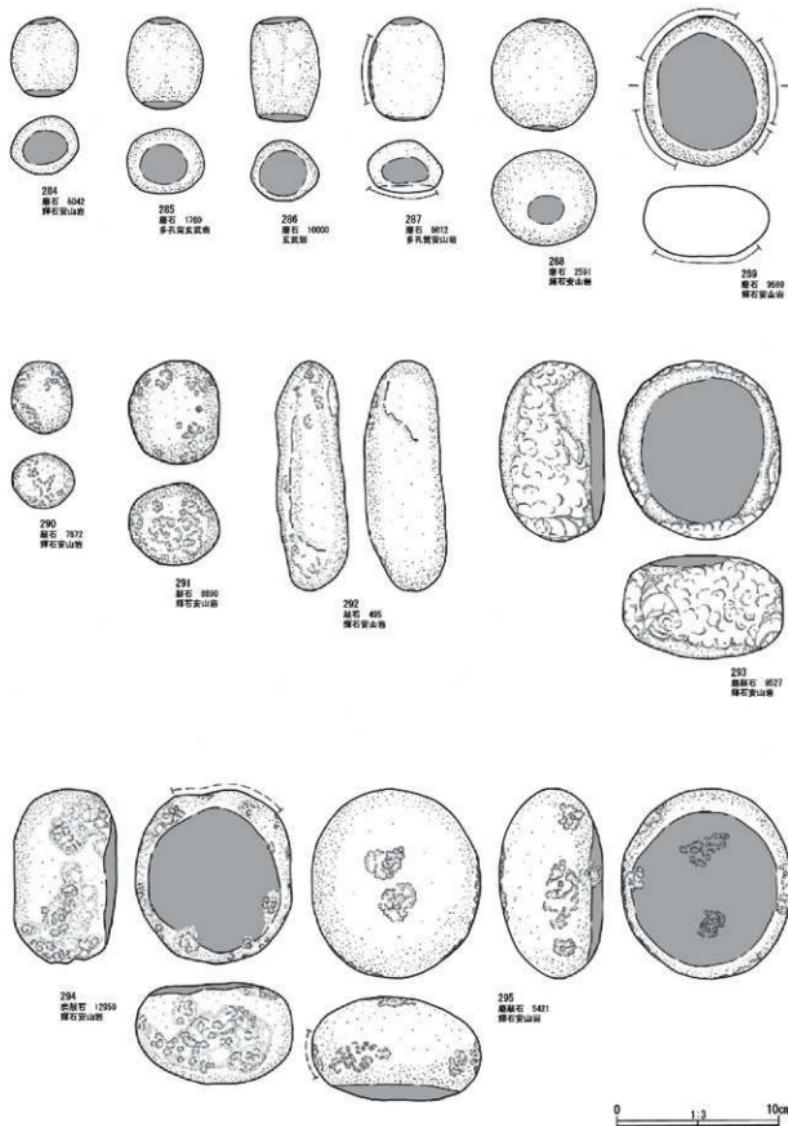
第83図 縄文時代 出土石器 (10)



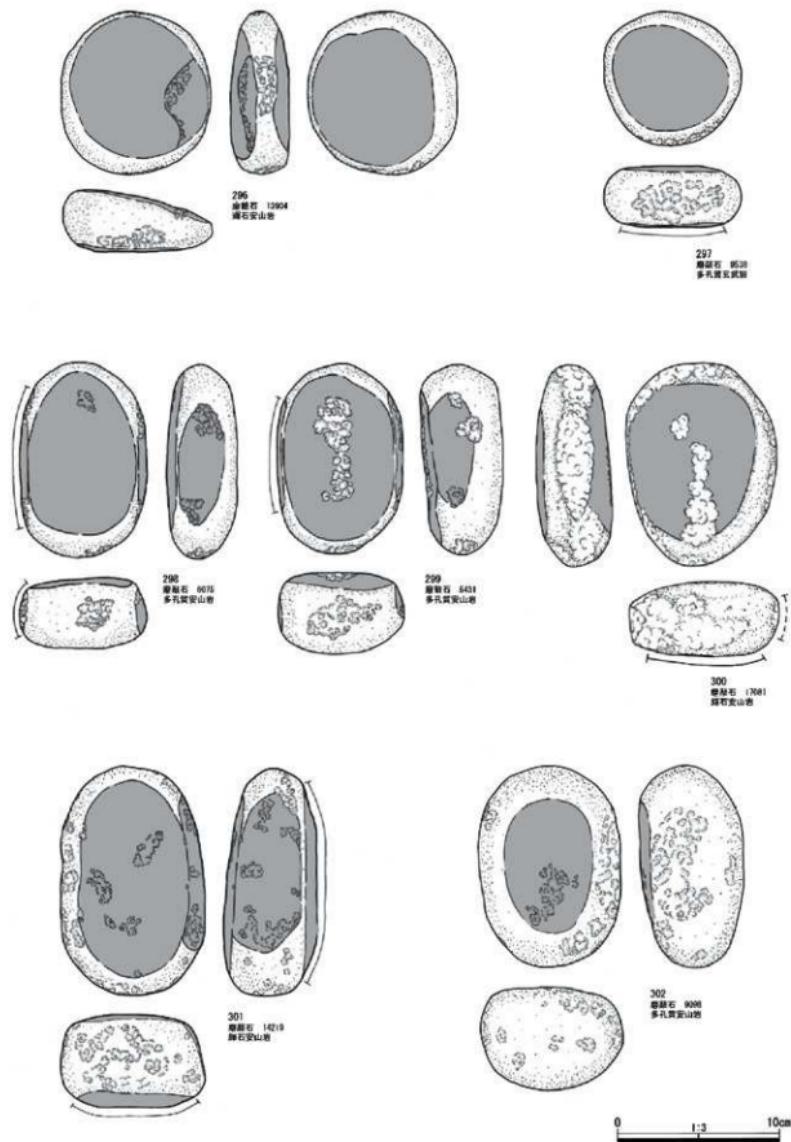
第84図 縄文時代 出土石器 (11)



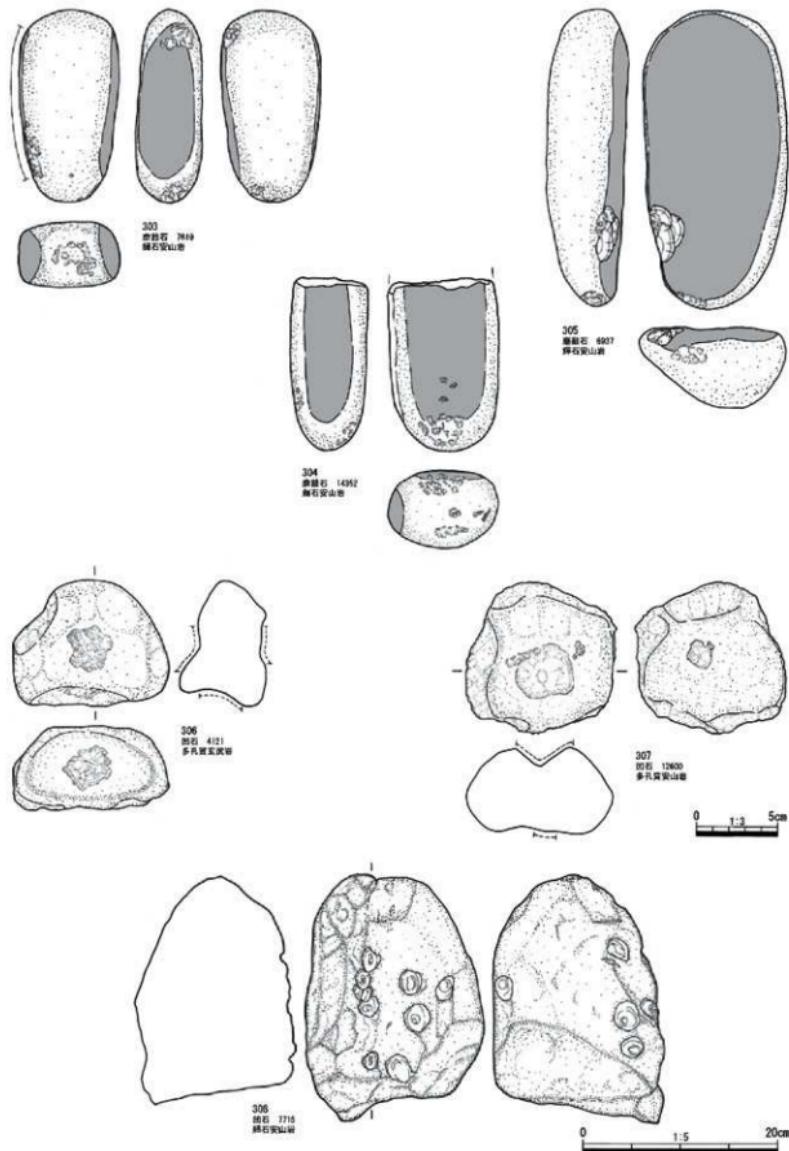
第85図 繩文時代 出土石器 (12)



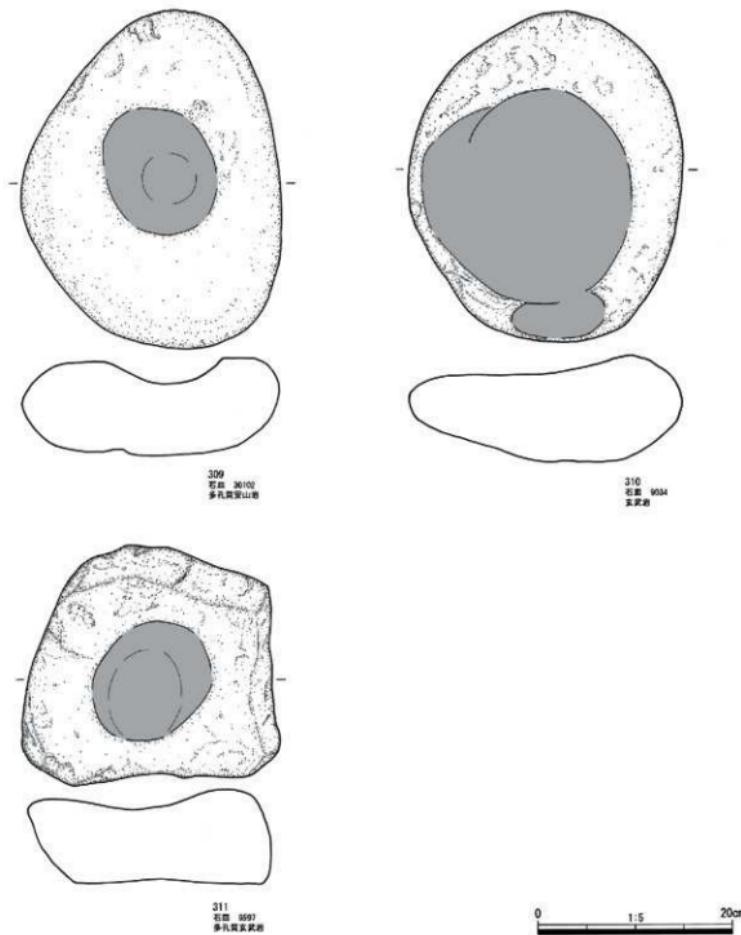
第86図 縄文時代 出土石器 (13)



第87図 繩文時代 出土石器 (14)



第88図 縄文時代 出土石器 (15)



第89図 繩文時代 出土石器 (16)

第12表 繩文時代 包含層出土石器一覧表

排列 番号	種類 番号	遺物 番号	技 名	層位	グリッド	基標	石材	堆 積 地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	複合 番号	X 座標	Y 座標	Z 座標
181	23	1451	KU-FB	AC-17	石鏡	Ob	SIMD	(35.8)	21.9	2.6	(1.04)	-	-92441_404	35025_655	206_242	
182	23	30226	素面	-	石鏡	Ob	WOTY	17.5	13.7	3.3	0.38	-	-	-	-	
183	23	30226	素面	-	石鏡	Ob	KZOB	22.6	23.7	3.4	1.17	-	-	-	-	
184	23	7703	KU	H-7	石鏡	GAn	(16.6)	15.8	2.0	(0.37)	-	-92452_440	34923_310	194_909		
185	23	241	KU-FB	AC-18	石鏡	Ob	SIMD	20.4	17.8	3.0	0.64	-	-92443_435	35031_020	204_814	
186	23	1323	KU-FB	AB-20	石鏡	GAn	35.0	26.8	3.6	2.76	-	-92452_881	35052_377	200_155		
187	23	12727	KU	H-6	石鏡	Ob	SIMD	(24.5)	18.6	4.2	(1.37)	-	-92455_272	34910_578	192_149	
188	23	12705	ZN	N-10	石鏡	GAn	19.6	16.8	3.9	0.71	-	-92593_198	34951_592	206_480		
189	23	12594	FB	S-21	石鏡	Ob	SIMD	(34.8)	17.2	3.6	(0.36)	-	-92542_098	35066_606	204_285	
190	23	4295	FB	L-10	石鏡	Ob	AGKT	31.7	14.1	3.6	(1.19)	-	-92612_748	34956_953	204_154	
191	23	30097	素面	-	石鏡	Ch	(30.1)	15.0	4.2	(1.55)	-	-	-	-		
192	23	674	ZN	AF-26	石鏡	SSh	31.9	18.1	3.6	1.53	-	-92415_146	35117_002	204_279		
193	23	1318	KU-FB	AB-22	石鏡	Ob	KZOB	(24.9)	19.1	6.3	(2.47)	-	-92457_619	35074_020	201_296	
194	23	4595	ZN	F-6	石鏡	Ob	SIMD	(24.9)	12.4	3.0	(0.69)	-	-92575_092	34997_447	206_819	
195	23	490	FB	AE-25	石鏡	Ch	20.2	13.3	3.1	0.69	-	-92420_502	35109_693	204_328		
196	23	244	KU	AB-18	石鏡	Ob	AGKT	15.4	13.0	2.6	0.36	-	-92457_917	35032_190	205_352	
197	23	10729	YL	J-11	石鏡	Hor	15.0	12.4	3.4	0.54	-	-92537_312	34960_272	200_011		
198	23	11416	FB	H-6	石鏡	Ob	SIMD	13.6	12.3	2.0	0.25	-	-92654_120	34919_420	193_483	
199	23	30221	素面	-	石鏡	Ob	AGKT	(16.3)	16.3	2.8	(0.54)	-	-	-	-	
200	23	14484	FB	O-17	石鏡	Ob	SIMD	17.9	13.6	4.5	0.69	-	-92580_229	35023_054	196_150	
201	23	14332	ZN	I-6	石鏡	Ob	AGKT	23.6	14.6	3.6	0.83	-	-92641_434	34917_282	196_366	
202	23	1293	FB	AC-22	石鏡	Ob	SIMD	23.9	12.6	4.7	1.03	-	-92442_643	35071_211	200_081	
203	23	14149	KU	O-18	石鏡	Ob	KZOB	19.6	14.5	3.3	0.75	-	-92588_191	35035_019	197_644	
204	23	195	FB	AC-18	石鏡	Ob	SIMD	15.9	12.7	3.2	0.52	-	-92440_894	35036_401	204_357	
205	23	14262	KU	P-17	石鏡	Ob	KZOB	13.2	8.9	2.8	0.22	-	-92571_461	35028_737	196_997	
206	23	7545	FB	O-9	石鏡	Rhy	(23.0)	14.5	2.9	(0.95)	-	-92580_954	34949_326	207_208		
207	23	14568	ZN	O-18	石鏡	GAn	34.9	21.8	3.9	1.95	-	-92596_309	35031_451	196_960		
208	23	14567	ZN	P-17	石鏡	GAn	25.1	20.5	5.2	1.80	-	-92576_102	35024_468	197_965		
209	23	427	FB	AI-26	石鏡	Hor	16.5	14.1	3.1	0.48	-	-92387_196	35114_987	205_505		
210	23	8934	KU	I-10	石鏡	Ob	KZOB	14.9	14.5	4.3	0.56	-	-92541_968	34959_797	200_294	
211	23	12652	FB	W-23	石鏡	Ob	HWJL	17.6	15.8	3.4	(0.97)	-	-92504_576	35080_522	200_893	
212	23	1322	KU-FB	AB-21	石鏡	Hor	(27.6)	18.7	5.2	(2.34)	-	-92455_837	35065_437	201_710		
213	23	58	KU	Q-9	石鏡	Ch	18.9	13.9	3.2	0.62	-	-92563_961	34941_885	208_876		
214	23	8595	KU	I-7	石鏡	Ob	AGKT	17.6	14.0	3.9	0.95	-	-92644_962	34924_344	196_399	
215	23	13111	AN	AB-19	石鏡	Ob	AGKT	16.6	11.5	2.5	0.42	-	-92454_952	35045_361	204_339	
216	23	14114	KU	P-18	石鏡	Ob	KZOB	12.9	10.3	2.4	0.22	-	-92579_819	35020_061	196_399	
217	23	10958	FB	H-7	石鏡	Ob	SIMD	19.6	18.6	4.4	1.03	-	-92652_389	34926_258	206_078	
218	23	6879	KU	J-11	石鏡	Ob	SIMD	19.3	17.4	4.8	1.13	-	-92636_935	34967_270	201_147	
219	23	10304	KU	I-7	石鏡	Ob	SIMD	(16.8)	13.4	2.6	(0.48)	-	-92649_540	34924_201	196_299	
220	23	12657	FB	V-24	石鏡	Ob	KZOB	20.4	16.5	4.2	0.85	-	-92514_184	35096_683	202_893	
221	23	5439	FB	I-10	石鏡	Ob	KZOB	22.2	19.6	4.9	1.42	-	-92641_006	34954_430	199_667	
222	23	8573	FB	F-13	石鏡	Ob	KZOB	20.6	14.5	6.4	1.39	-	-92673_393	34963_702	199_331	
223	23	10748	KU	I-6	石鏡	Ob	SIMD	18.1	11.8	3.1	0.63	-	-92648_666	34918_855	194_787	
224	23	3216	ZN	W-16	石鏡	Ob	SIMD	12.1	12.8	2.2	0.29	-	-92505_136	35011_362	205_896	
225	23	12905	YL	O-17	石鏡	GAn	37.7	25.3	4.1	3.33	-	-92564_238	35027_470	196_994		
226	23	14485	FB	P-17	石鏡	GAn	32.6	25.4	4.4	2.83	-	-92736_916	35028_495	197_561		
227	23	3263	ZN	Y-18	石鏡	GAn	31.4	18.2	3.9	1.65	-	-92402_313	35038_187	200_804		
228	23	14855	YL	P-18	石鏡	GAn	26.2	20.7	4.3	1.60	-	-92571_460	35033_348	196_253		
229	23	466	FB	AI-26	石鏡	Ob	SIMD	11.9	12.5	2.1	0.29	-	-92387_182	35118_848	206_371	
230	23	1534	KU	AC-17	石鏡	Hor	(83.2)	16.7	4.3	(2.60)	-	-92448_489	35021_935	205_307		
231	23	4296	FB	J-10	石鏡	SS1	23.5	10.2	2.2	0.64	-	-92537_565	34967_551	200_203		
232	23	6135	ZN	I-6	石鏡	SS1	25.2	14.6	2.9	1.34	-	-92546_672	34937_059	197_322		
233	23	14556	FB	N-17	石鏡	SS1	31.8	17.3	3.0	1.86	-	-92591_343	35026_695	196_975		
234	23	6218	KU	J-7	石鏡	SS1	24.6	14.0	2.2	1.10	-	-92532_064	34924_849	199_911		
235	23	1409	YL	AC-22	石鏡	SS1	(25.4)	12.3	2.5	(0.95)	-	-92445_730	35075_700	202_078		
236	23	1269	KU	AB-23	石鏡	Ob	SIMD	19.2	9.9	3.2	0.42	-	-92454_136	35082_151	201_457	
237	23	196	FB	AD-18	石鏡	Hor	28.8	14.2	4.3	1.27	-	-92436_147	35031_622	206_700		
238	23	1450	KU-FB	AC-17	石鏡	Hor	30.6	13.4	4.5	1.62	-	-92441_951	35026_905	206_058		
239	23	8344	FB	N-8	ドリル	GAn	33.3	21.2	7.4	5.29	-	-92500_491	34933_428	206_924		
240	23	284	KU	AI-26	サイド・スクレイパー	Ob	KZOB	(21.1)	(21.6)	(12.4)	(4.15)	-	-92381_237	35118_097	205_440	
241	23	3706	ZN	N-13	サイド・スクレイパー	Ob	SIMD	19.8	27.6	6.5	2.89	-	-92597_019	34982_968	203_731	
242	23	1501	ZN	AI-20	サイド・スクレイパー	Ch	30.4	12.5	6.3	1.92	-	-92381_767	35056_730	208_110		
243	23	12589	KU	O-18	サイド・スクレイパー	Ch	50.4	21.8	8.7	8.18	-	-92568_796	35031_158	199_456		
244	23	30101	素面	-	サイド・スクレイパー	Ag	59.0	38.4	11.2	26.66	-	-	-	-		
245	23	1540	ZN	AD-18	サイド・スクレイパー	Hor	56.2	40.5	13.9	33.41	-	-92431_721	35032_433	205_229		
246	23	5258	KU	H-10	サイド・スクレイパー	GAn	(60.0)	50.8	8.8	(19.47)	-	-92457_962	34951_037	199_037		
247	23	7639	KU	K-12	サイド・スクレイパー	SSh	55.2	35.9	13.3	28.99	-	-92628_593	34974_403	202_139		
248	23	7704	KU	H-7	サイド・スクレイパー	SS1	88.0	40.2	12.4	46.84	-	-92651_645	34922_668	194_912		
249	23	194	FB	AD-18	サイド・スクレイパー	SSh	65.6	51.8	13.6	40.08	-	-92433_465	35037_043	205_568		
250	24	8907	KU	J-10	サイド・スクレイパー	SSh	63.2	46.9	21.9	61.23	-	-92635_339	34964_928	200_842		

埠頭 番号	埠頭 番号	出島 番号	柱番 号	層位	グリッド	器種	石材	堆定 場所	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (kg)	埠 名	X 座標	Y 座標	Z 座標
251	24	1915	ZN	AJ-26	サイド・スクレーパー	Hor	Ob	K20B	57.6	43.4	12.7	36.05	-92377.512	35118.115	206.061	
252	24	4839	FB	0-9	楔形石器	Ob	AGKT	22.6	16.4	8.2	2.62	-92589.744	34943.161	206.619		
253	24	7130	FB	H-11	楔形石器	Ob	AGKT	24.4	12.9	4.0	1.05	-92653.744	34965.294	200.743		
254	24	10560	ZN	H-8	楔形石器	Ob	AGKT	25.6	13.3	6.0	1.48	-92652.861	34907.311	196.615		
255	24	12031	ZN	H-8	楔形石器	Ob	AGKT	29.8	8.4	8.0	1.92	-92654.891	34903.252	196.797		
256	24	13459	ZN	G-5	楔形石器	Ob	K20B	(31.2)	36.4	10.2	(12.76)	-92662.516	34905.795	190.406		
257	24	8560	FB	F-13	楔形石器	Ob	K20B	27.6	31.5	11.7	9.95	-92671.697	34984.592	199.452		
258	24	7272	KU	I-12	楔形石器	Hor	Ob	Hor	38.1	32.2	7.5	9.60	-92643.397	34970.619	201.157	
259	24	2346	FB	AK-22	石匙	Ob	K20B	45.8	41.2	11.4	16.77	-92364.387	35073.578	207.733		
260	24	13827	KU	I-5	石匙	Hor	Ob	Hor	38.9	62.5	6.2	12.78	-92648.547	34907.852	192.869	
261	24	2590	FB	AK-22	石匙	GAm	Ob	Hor	39.1	42.6	10.8	14.07	-92361.224	35070.773	207.700	
262	24	14336	KU	P-17	石匙	GAm	Ob	Hor	79.5	44.9	9.2	27.10	-92573.446	35025.020	196.729	
263	24	7251	FB	J-12	石匙	Ob	K20B	52.6	20.4	10.4	11.55	-92635.319	34974.411	201.669		
264	24	4119	KU	H-10	石匙	GAm	Ob	Hor	103.4	30.8	18.2	44.21	-92652.209	34952.282	199.244	
265	24	2098	FB	AL-21	石核	RJa	Ob	Hor	15.8	25.6	9.6	3.55	-92532.078	35065.721	200.059	
266	24	6944	FB	K-9	石核	Ob	SMHD	32.1	30.9	13.4	10.94	-92624.320	34949.758	202.493		
267	24	4579	FB	P-6	石核	Ob	K20B	30.5	27.1	15.7	10.20	-92573.930	34905.031	208.261		
268	25	10087	FB	Q-8	打制石斧	Sh	Ob	Hor	121.0	38.8	14.3	89.57	-92565.832	34936.640	208.724	
269	25	1336	KU	AB-18	打制石斧	Sh	Ob	Hor	100.1	42.0	14.5	85.63	-92451.551	35030.325	205.400	
270	25	2029	FB	JZ-23	打制石斧	GT	Ob	Hor	116.4	39.3	20.5	103.77	-92375.097	35080.444	207.282	
271	25	8111	FB	O-7	打制石斧	Hor	Ob	Hor	89.5	47.0	18.6	88.12	-92588.726	34924.119	207.297	
272	25	14112	KU	O-17	打制石斧	An(Py)	Ob	Hor	185.1	77.1	19.3	327.15	-92583.752	35025.048	198.278	
273	25	30219	FB	—	打制石斧	Sh	Ob	Hor	126.7	78.8	28.3	293.40	—	—	—	
274	25	4416	ZN	O-9	磨制石斧	Pe	Ob	Hor	72.8	37.9	17.6	102.55	-92596.305	34964.657	206.548	
275	25	3501	KU	O-10	磨制石斧	Pe	Ob	Hor	110.8	72.9	21.4	278.11	-92660.810	34950.473	199.133	
276	25	4360	KU	J-9	磨器	An(Py)	Ob	Hor	134.6	67.2	28.3	406	-92638.479	34942.024	199.699	
277	25	13577	ZN	G-6	磨器	An(Py)	Ob	Hor	103.9	64.4	27.0	330	-92667.369	34913.458	190.716	
278	25	6980	ZN	G-12	磨器	An(Py)	Ob	Hor	120.7	107.0	32.5	469	-92662.027	34970.327	200.175	
279	25	201	KU	AB-17	磨器	An(Py)	Ob	Hor	90.7	108.7	34.2	480	-92459.652	35021.265	206.303	
280	25	11571	ZN	I-10	磨器	An(Py)	Ob	Hor	116.9	91.7	44.0	619	-92646.036	34955.710	199.324	
281	25	1533	FB	AC-17	磨器	An(Py)	Ob	Hor	109.0	151.7	47.4	990	-92444.340	35022.466	206.442	
282	25	1261	KU	AA-24	磨器	An(Py)	Ob	Hor	120.5	95.6	35.8	450	-92469.234	35096.062	199.696	
283	25	4906	ZN	Q-9	磨器	An(Py)	Ob	Hor	128.2	133.4	52.1	750	-92564.294	34945.417	200.196	
284	25	5042	KU	N-9	磨石	An(Py)	Ob	Hor	47.5	41.1	35.2	85	-92597.483	34944.918	206.073	
285	26	1760	KU	AJ-26	磨石	VBa	Ob	Hor	55.9	46.7	40.1	141	-92377.452	35114.246	206.818	
286	26	10000	FB	J-12	磨石	Be	Ob	Hor	64.2	41.3	37.0	144	-92638.204	34973.409	201.534	
287	26	6012	KU	I-9	磨石	VAn	Ob	Hor	62.5	45.6	33.1	120	-92640.086	34945.504	199.694	
288	26	2591	FB	AK-22	磨石	An(Py)	Ob	Hor	68.0	63.9	58.0	316	-92363.706	35073.269	207.666	
289	26	9589	KU	I-11	磨石	An(Py)	Ob	Hor	91.0	76.8	43.2	474	-92549.404	34966.184	200.713	
290	26	7872	FB	H-8	磨石	An(Py)	Ob	Hor	43.5	36.7	34.0	72	-92654.233	34936.678	196.839	
291	26	28890	KU	I-7	磨石	An(Py)	Ob	Hor	62.6	54.7	50.0	242	-92641.517	34927.802	197.546	
292	26	495	ZN	AG-26	磨石	An(Py)	Ob	Hor	140.3	50.1	43.2	454	-92400.928	35116.873	200.866	
293	26	9527	FB	N-11	磨石	An(Py)	Ob	Hor	109.0	97.5	63.5	1074	-92596.252	34961.431	206.331	
294	26	12959	KU	H-6	磨石	An(Py)	Ob	Hor	106.1	95.3	63.0	968	-92655.290	34912.961	192.403	
295	26	5421	KU	I-10	磨石	An(Py)	Ob	Hor	115.2	102.5	62.9	1015	-92645.506	34953.027	199.376	
296	26	13904	AN	I-5	磨石	An(Py)	Ob	Hor	99.1	90.8	37.3	506	-92640.174	34904.811	193.571	
297	26	9538	KU	P-9	磨石	VBa	Ob	Hor	81.5	84.3	37.5	391	-92579.567	34940.318	207.755	
298	26	6075	KU	H-9	磨石	VAn	Ob	Hor	118.8	77.2	43.0	572	-92651.853	34944.170	198.175	
299	26	5431	FB	I-10	磨石	VAn	Ob	Hor	116.5	76.5	50.2	604	-92546.279	34954.627	199.109	
300	26	17081	FB	H-5	磨石	An(Py)	Ob	Hor	125.0	90.0	45.0	750	-92650.388	34902.882	190.303	
301	26	14219	KU	O-18	磨石	An(Py)	Ob	Hor	140.0	87.5	57.1	1029	-92587.535	35039.457	197.969	
302	26	9098	FB	D-12	磨石	VAn	Ob	Hor	122.8	86.2	63.3	929	-92693.596	34970.489	197.209	
303	26	7819	KU	I-7	磨石	An(Py)	Ob	Hor	117.6	60.5	40.2	493	-92643.487	34927.459	197.116	
304	26	14352	ZN	H-6	磨石	An(Py)	Ob	Hor	(106.2)	67.2	47.5	(528)	-92653.200	34910.182	192.003	
305	26	6937	KU	I-10	磨石	An(Py)	Ob	Hor	182.0	87.0	49.0	1111	-92642.863	34957.902	200.187	
306	—	4121	FB	O-9	凹石	VBa	Ob	Hor	77.4	94.8	52.4	313	-92567.758	34940.491	208.565	
307	—	12500	FB	V-24	凹石	VAn	Ob	Hor	93.3	92.4	68.7	534	-92517.158	35096.165	203.043	
308	26	7715	クロ	H-7	凹石	An(Py)	Ob	Hor	272.0	190.0	182.0	10600	-92652.218	34924.529	195.369	
309	—	30102	表裏	—	石皿	VAn	Ob	Hor	349	268	113	12300	—	—	—	
310	26	9034	KU	E-11	石皿	Be	Ob	Hor	338	281	129	12200	-92665.474	34967.309	198.584	
311	—	9597	FB	K-11	石皿	VBe	Ob	Hor	246	263	110	8000	-92629.563	34965.044	201.463	

()は欠損

第4章 弥生時代以降

縄文時代よりも新しい時代の資料は、遺構・遺物ともに少ない。また、時代が特定できる資料は極めて少なかった。そのため本章で一括して取り扱う。

なお、現地調査の段階で、北尾根と中央尾根に挟まれた北谷部に沿って、遺跡を東西方向に横断する溝状の地形が検出されたが、検討の結果、遺構ではないと判断した。

第1節 遺構と遺物

1 遺構

(1) 土坑（第91図）

南尾根からは、土坑が2基確認されている（82・83号）。覆土に栗色土層を多く含んでいるため、縄文時代より新しいと判断した。82号土坑の北側には小穴が集中して確認されており、大型の小穴としても捉えられる遺構である。

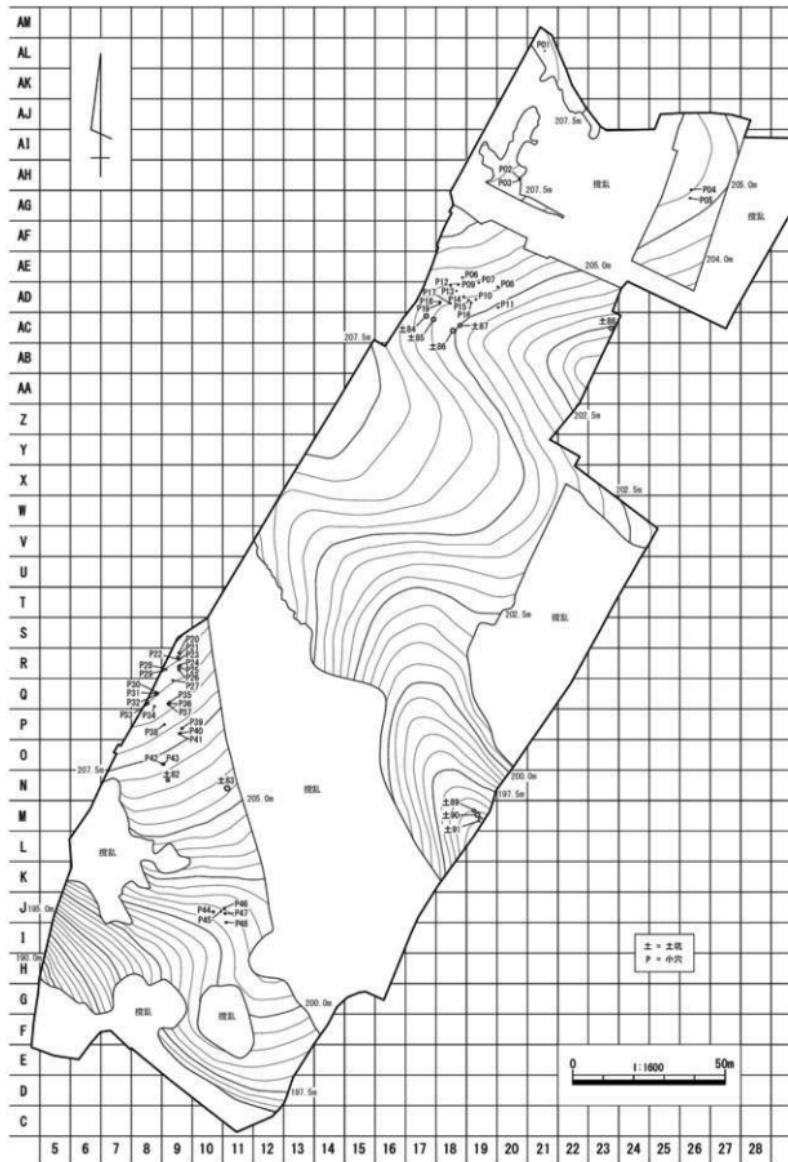
谷部からは、いわゆる円形土坑が8基確認されている。これらは愛鷹山麓周辺で多く確認できる遺構であり、古代以降に比定されると考えられている。性格については、墓坑、貯藏穴、水溜め用、トイレ等の諸説が考えられているが、詳細は不明である。当遺跡からも、それらを特定できる痕跡は確認できなかった。配置は、北尾根と中央尾根に挟まれた北谷部から4基（84～87号）、中央尾根と南尾根に挟まれた中央谷部から3基（89～91号）と、8基中7基が谷部に集中している。

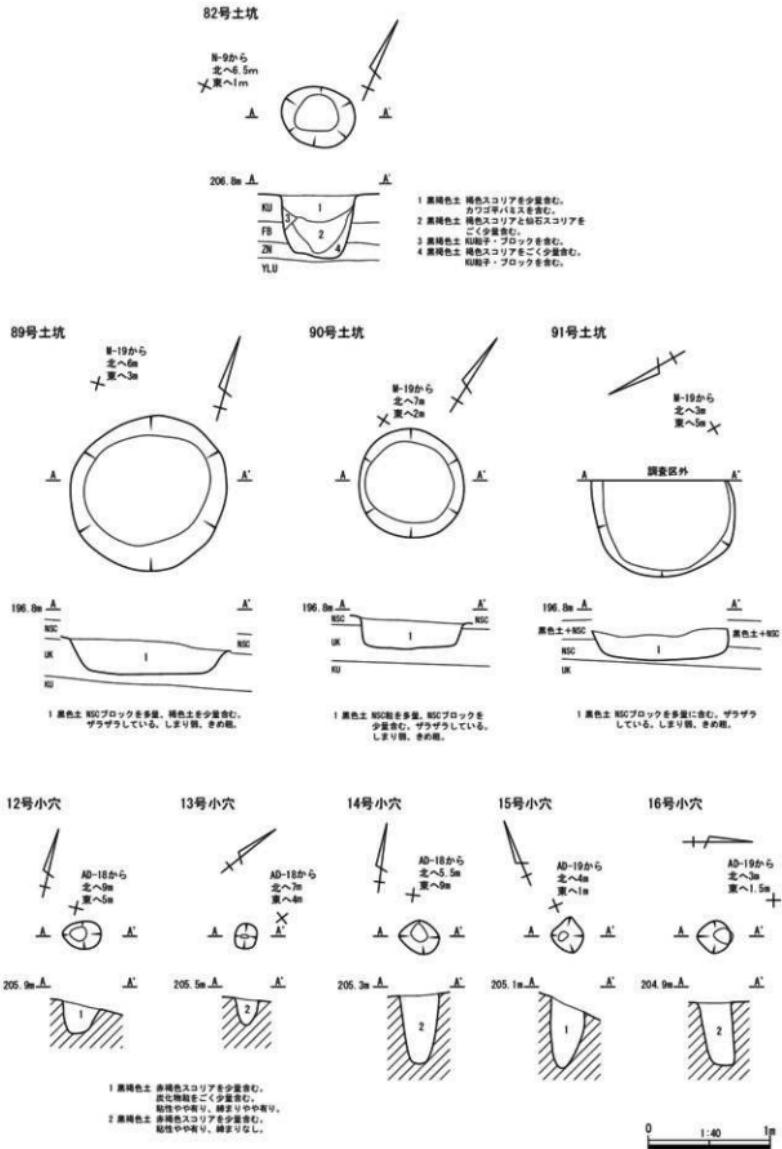
(2) 小穴（第91図）

北谷部の斜面、および南尾根を中心として、48基の小穴が検出された。北谷部では、列状に並んで配置されたような痕跡も確認できる（6～8号、9～11号、12～16号）。一方、南尾根では、2、3基がまとまりとなって検出されているが、詳細は不明である。

第13表 弥生時代以降 土坑計測表

遺構番号	グリッド	検出面	口径 (m)	底径 (m)	深さ (m)	分類
82号	N-09	KU	0.60	0.42	0.52	弥生土坑
83号	N-11	KU	0.90	0.87	0.13	
84号	AC-17	AN	1.16	1.10	0.31	
85号	AC-18	NSC	1.08	1.00	0.10	
86号	AC-18	NSC	1.36	1.20	0.13	
87号	AC-17	NSC	1.23	1.16	0.36	
88号	AC-23	NSC	1.12	1.10	0.15	
89号	M-19	NSC	1.32	1.06	0.28	
90号	M-19	NSC	0.90	0.80	0.24	
91号	M-19	UK	1.18	1.04	0.23	





第91図 弥生時代以降 土坑・小穴

2 遺物

(1) 土器

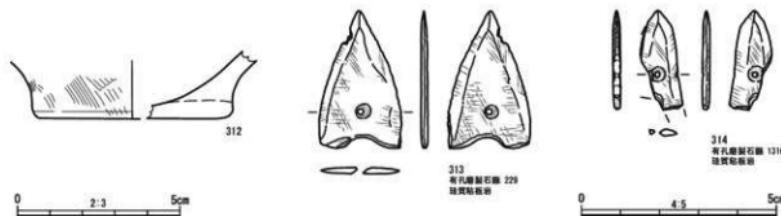
弥生土器（第92図312）

壺の底部である。胴部にはハケ目調整が施されている。底径が小さく、焼成が良いことから、弥生時代後期前半の資料と考えられる。

(2) 石器

有孔磨製石鎌（第92図313・314）

2点出土した。弥生時代後期に比定される資料である。表裏両面とも丁寧に研磨され、中心軸の基部寄りの箇所に円形の穿孔が施されている。314は、313と比べてやや細身の資料である。石材は2点とも珪質粘板岩である。



第92図 弥生時代 出土土器・石器

第14表 弥生時代 土器観察表

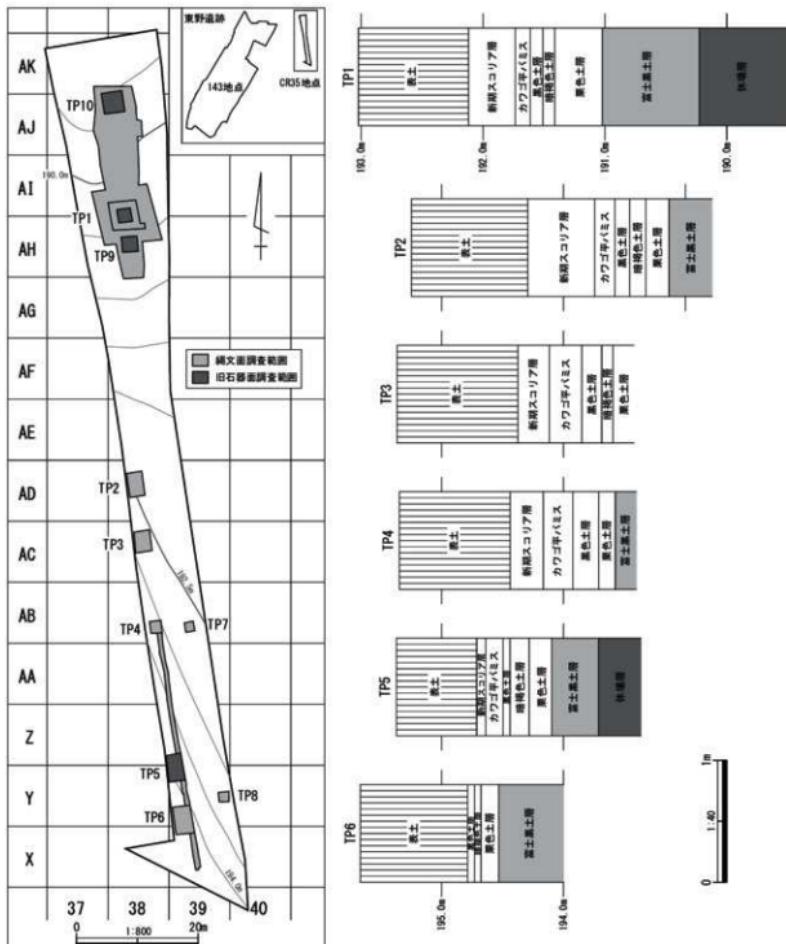
擇図番号	図版番号	種別	器種	残存部位	器面調整		計測値
					外面	内面	
312	26	弥生土器	壺	底部	櫛状工具による縦方向の短いハケ目	ヘラミガキと思われるが、磨滅していく不鮮明	底径 57mm 残存高 18mm

第15表 弥生時代 石器一覧表

擇図番号	図版番号	遺物番号	グリッド	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
313	26	229	AC-18	有孔磨製石鎌	SSI	35.0	21.1	1.8	1.73
314	26	1316	AB-22	有孔磨製石鎌	SSI	25.3	10.8	1.9	0.67

第5章 C R35地点

C R35地点は、No.143地点の北東に位置している。発掘範囲の北側は梅ノ木沢遺跡に含まれており、すでに報告済みである（（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所2008c, 2009c, 2010d）。南側は東野遺跡に含まれているが、No.143地点とは最短でも約70mの距離を隔てており、立地も1段低い尾根である。そのため独立した形で報告を行う。旧石器～縄文時代の資料が確認されたが、大半は縄文時代に属する。



第93図 トレンチ・テストピット配置および土層堆積状況

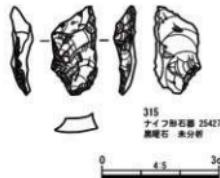
第1節 旧石器時代

旧石器時代に分類される可能性のある遺物は、ナイフ形石器1点である。調査範囲北側の南端より出土している。遺構は確認できなかった。

1 遺物

ナイフ形石器（第94図315）

幅広、あるいは横長な剥片を素材としている。両側縁に加工を施して、切出状の刃部を作出している。素材剥片の打点部は、加工によって失われている。石材は黒曜石である。产地分析は行っていないが、肉眼鑑定から箱根烟宿群の資料であることが推測される。なお、出土層位は栗色土層であるが、ナイフ形石器のため旧石器時代の遺物とした。



第94図 旧石器時代 出土石器

第2節 縄文時代

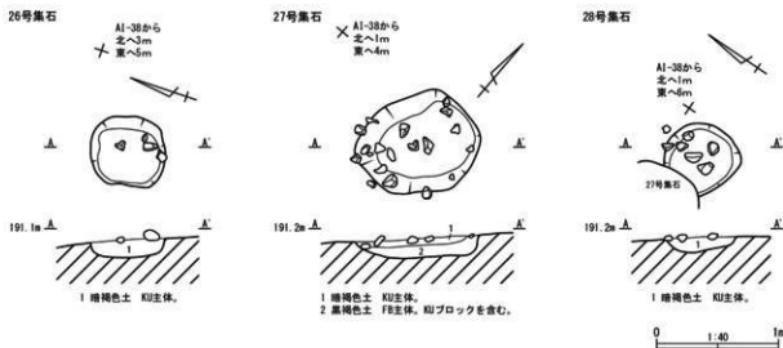
1 遺構

(1) 土坑（第96図）

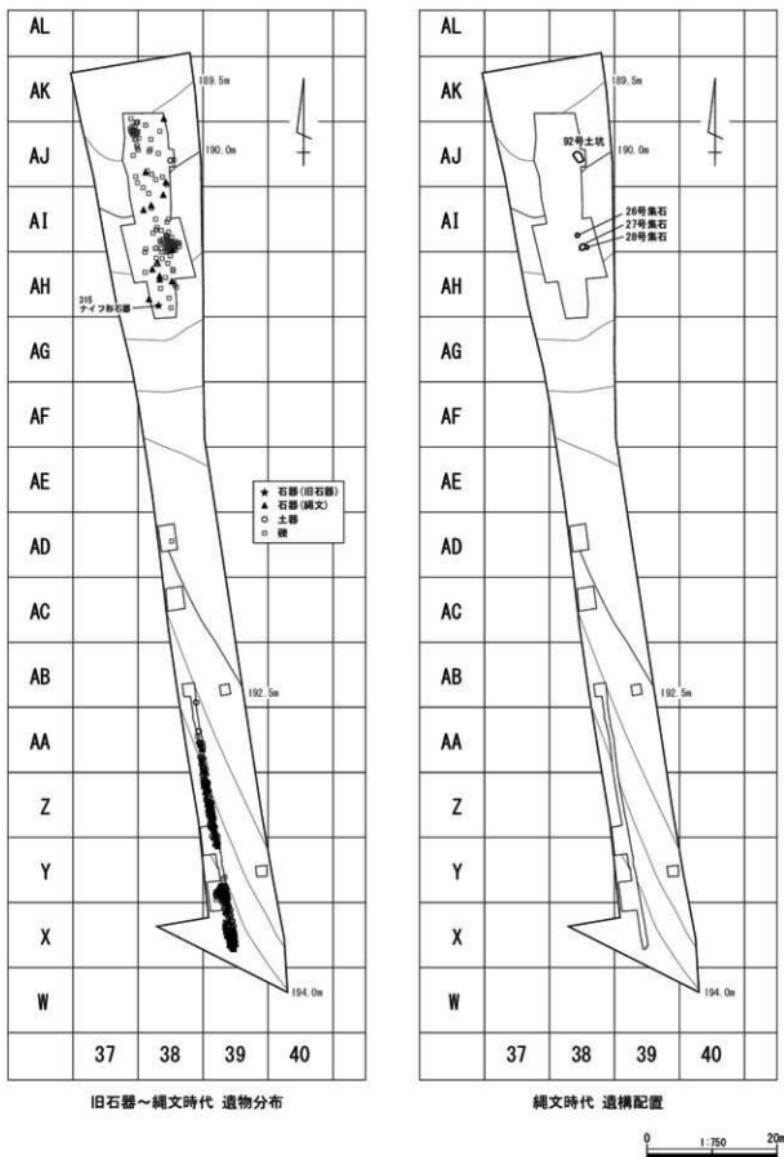
調査範囲の北側で1基確認された（92号土坑）。平面形状は隅丸長方形を呈している。調査範囲外に他の土坑が配置されていた可能性も考えられるが、現状では単独の検出であり、詳細は不明である。

(2) 集石（第95図）

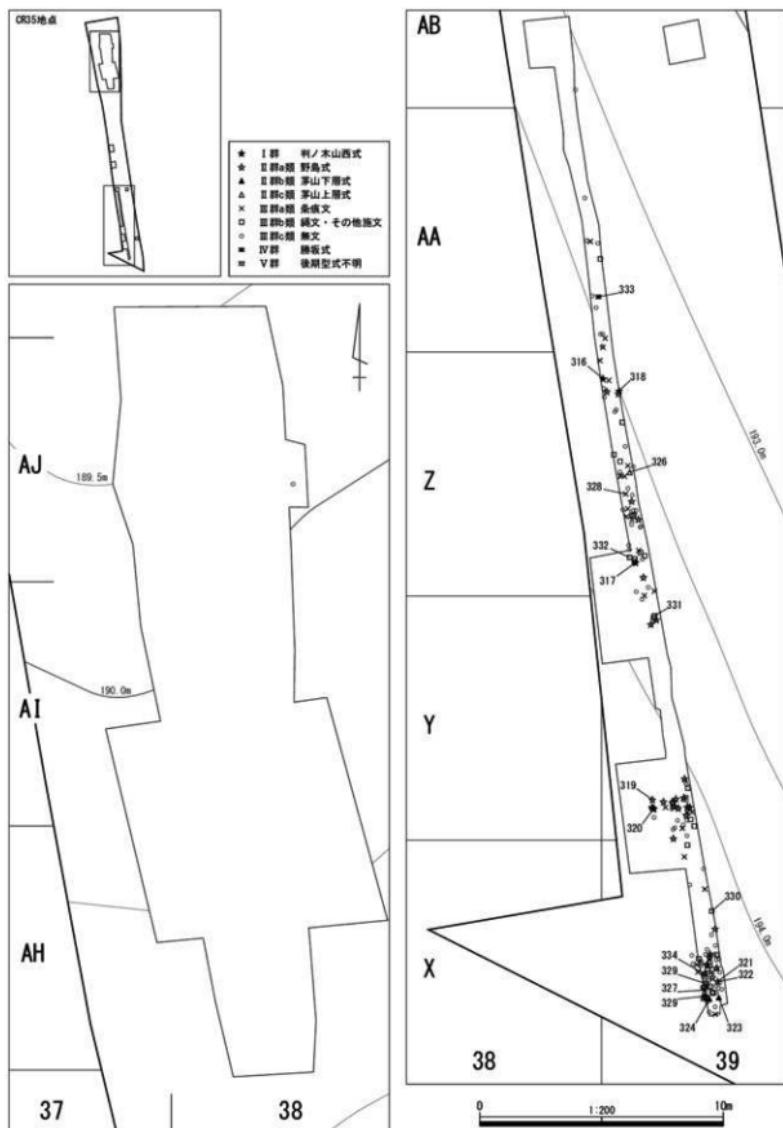
調査範囲の北側で3基確認された（26～28号集石）。全て近接しており、検出面も富士黒土層であることから、同時期の遺構と考えられる。また、全て土坑を伴っており、27号集石は28号集石を切っている。27号集石は比較的の疊数も多いが、26・28号集石は散漫な出土状況を見せる。



第95図 縄文時代 26～28号集石



第96図 遺物分布および遺構配置



第97図 繩文時代 土器分布

2 遺物

土器が186点、石器が131点、礫が271点出土した。

(1) 土器

土器は、調査範囲の南側から集中して出土しており、北側からの出土は1点のみであった。出土した土器の大半は小片であり、接合も顕著には確認できなかった。そのため、全体形状が確認できる資料は存在しない。型式・文様等により、以下の5群に分類して記載を行った。中でも、胎土に纖維を含み、条痕文、沈線文が施されている例が多く、186点中181点が早期後半（第II・III群土器）の資料である。

第16表 縄文時代 出土土器分類一覧

群	時期	類	型式・文様
I	早期前半		判ノ木山西式土器
II	早期後半	a	野島式および野島式併行土器
		b	茅山下層式土器
		c	茅山上層式土器
III	早期後半～ 前期初頭	a	型式不明土器（条痕文を施したもの）
		b	型式不明土器（縄文・その他施文を施したもの）
		c	型式不明土器（無文のもの）
IV	中期		勝坂式土器
V	後期		型式不明土器（縄文を施したもの）

第I群土器：早期前半

判ノ木山西式土器（第98図316・317）

早期前半の資料は2点出土し、いずれも判ノ木山西式土器に属するものであった。316・317は胴部片である。316は先割竹管状工具による縦位の細沈線を施したのち、その周囲を竹管状工具による沈線で囲っている。この沈線は、U字を逆さまにしたような曲線的なものも確認できる。317は先割竹管状工具による細沈線を横位、縦位の順に施している。裏面には条痕による調整が施されている。縦位沈線文が施されていることから、第II群a類（野島式）の範疇に含まれる可能性も考えられる。

第II群土器：早期後半

a類：野島式土器（第98図318～322）

318は胴部片である。縦位の沈線を連続して施したのち、斜位の沈線によって区画している。この斜位の沈線は、縦位の沈線と比較して太くなっている。内外面ともに、横位の条痕調整が施されている。厚みを有しており、多量の纖維と白色粒子（デイサイト）を含んでいる。

なお、この土器の外面に付着していた炭化物について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、 $7,675 \pm 30\text{yrBP}$ (PLD-17439) の ^{14}C 年代値が確認された（詳細は「東野遺跡II」附編を参照）。この値は当該期の資料として整合性を有している。

319は胴部片である。斜位の細沈線を施したのち、半截竹管状工具による幅広の沈線を縦位に施している。破片下端にはわずかに屈曲部が確認できる。内面には横位の条痕調整が施されている。

320・321は、波状を呈する口縁部片である。320は、半截竹管状工具による斜位の沈線を連続して施したのち、縦位、さらに斜位の沈線で区画している。2点とも、内外面ともに条痕調整が施されており、

胎土、器厚などから同一個体と推測される。

322は胴部片である。細隆起線を垂下させ、その両脇に、縦位の短沈線および斜位の沈線が施されている。細隆起線上には刺突が施される。また、屈曲部が確認され、下部は無文帯となっていると推測される。胎土がやや軽じょうであり、これは愛鷹周辺で確認される野島式土器にはあまり確認できない。

b類：茅山下層式土器（第98図323・324）

323・324は胴部片である。2点とも屈曲部にあたる。323は、上部に半截竹管状工具による刺突列が施されている。刺突はやや押し引き状に行われている。その下には細い棒状工具による刺突列が斜位に施されている。屈曲部には細隆起線が確認され、刻みが施されていると考えられるが、判然としない。324は、上部に半截竹管状工具による刺突列、その下に2条の斜位の細沈線、さらにその下の段部には横位の細隆起線が施されている。細隆起線上、およびその下には細い棒状工具による刺突が連続して施されている。

c類：茅山上層式土器（第98図325・326）

325・326は胴部片である。325は、屈曲部付近に横位の沈線、およびその直下に刺突列を施し、下部の無文帯と分けている。第II群b類（茅山下層式）と比べて、屈曲が緩やかになっている。326は横位の短沈線を複数施し、それを3条1組の斜位の沈線文で上書きしている。いずれも内面には横位の条痕調整が施されている。

第III群土器：早期後半～前期初頭

胎土に纖維痕を有する、型式不明の土器を分類した。

a類：条痕文を施したもの（第98図327・328）

327・328は、波状を呈する口縁部片である。327は、内外面に横位～斜位の条痕を施し、外面の一部には縦位の条痕で上書きしている。328は口唇部を平坦に調整し、波頂部は突起状を呈している。外面に斜位の、内面に横位の条痕を施している。いずれも外面の条痕は明瞭で、調整というよりも文様の要素が強い。

b類：縄文・その他施文を施したもの（第98図329～332）

329は胴部片である。屈曲部を有していることから、早期後半の八ッ崎式以前に伴う資料であると推測される。外面には原体L Rの縄文を横位に施文している。内面には斜位の条痕調整が施されている。

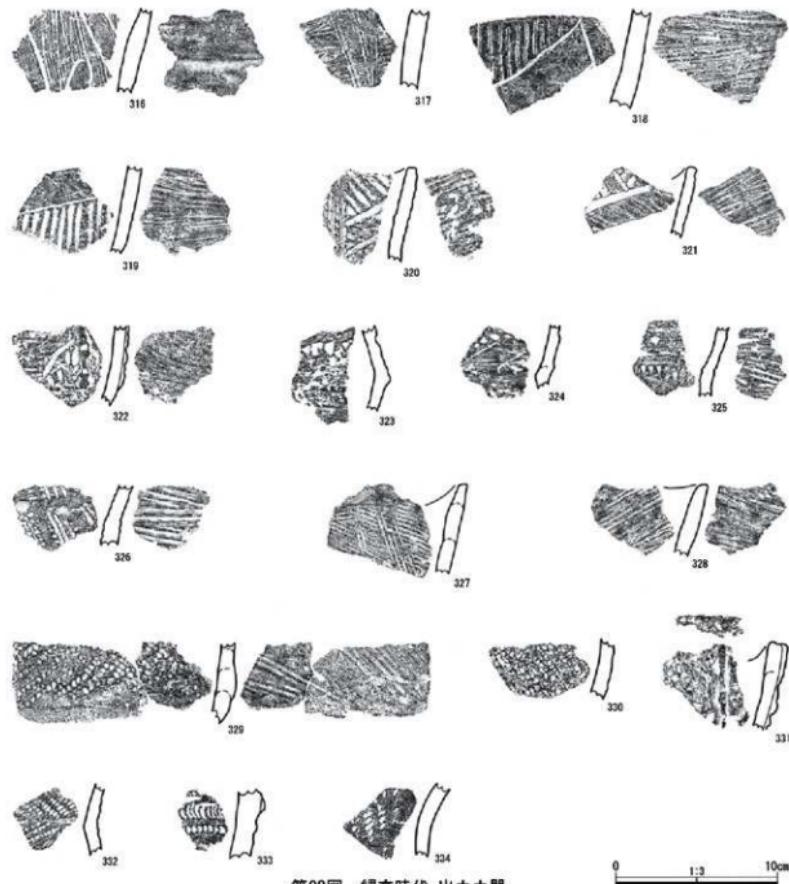
330は胴部片である。原体R Lの縄文を、横位に施文している。

331は口縁部片である。口縁は波状であり、波頂部には小さな皿状突起が確認できる。波頂部からは細隆起線が垂下しており、細隆起線上には刻みが施されている。また破片右下端には斜位の細隆起線も確認できる。施文の特徴から第II群b・c類（茅山式前後）の可能性が窺えるが、判然としない。

332は胴部片である。中央にくびれが確認され、そこを境に外反する器形である。くびれ部の上部には原体L Rの縄文を縦位に施文し、下部には半截竹管状工具による連続押引文を斜位に施文している。器形から、前期前半の黒浜式段階に伴う資料であることが推測されるが、連続押引文は当該期にはあまり用いられない施文であり、判然としない。

c類：無文のもの

86点が出土したが、図化に堪えうる遺物はなかった。



第98図 縄文時代 出土土器

第IV群土器：中期の土器（第98図333）

333は胴部片である。上部には半截竹管状工具による幅広な爪形文が、下部には上部より細く、逆向きの爪形文が、それぞれ横位列状に施されている。小片のため詳細は不明だが、勝坂式（藤内式期）の資料であることが推測される。

第V群土器：後期の土器（第98図334）

334は胴部片である。中央付近で外反した器形である。原体R Lの縄文を斜位に施文している。縄文は大きく型崩れしており、判然としない。内面を光沢が出るほど調整しており、後期の資料であることが推測される。

(2) 石器

内訳は、石鑿10点、楔形石器1点、微細な剥離痕を有する剥片11点、石核6点、剥片類91点、敲石6点、磨敲石6点である。石材は、黒曜石90点（諏訪星ヶ台群6点、分析不可等1点、未分析83点）、ホルンフェルス2点、ガラス質黒色安山岩18点、硬質細粒凝灰岩1点、黄玉石（碧玉）1点、珪質真岩2点、珪質粘板岩1点、ひん岩1点、輝石安山岩13点、多孔質安山岩1点、多孔質玄武岩1点である。

製品類は少なく、大半が微細な剥片か碎片であった。また、黒曜石の比率が非常に高く、ホルンフェルスは極少である。黒曜石の大半は未分析であるが、透明度が高い資料が多く、信州産の割合が高いことが推測される。

石鑿（第99図335～344）

10点出土した。335～341は脚部を有するもの、342・343は平基のもの、344は茎部を有するものである。

全体的に作りが粗い資料が多く、縁辺に微細剥離を施していない資料が多い。そんな中、335は縁辺の微細剥離によって丁寧に整形を行っており、精緻な印象を受ける。また、335・342・343など、未加工な面を残している資料も多い。形が整っているため、未製品ではないと推測されるが、最低限の加工で製作していると考えられる。その中でも、342は素材剥片の捻じれをそのまま残しており、特に稚拙な印象を受ける。341は胸部より脚部の方が長くなっている。

有茎石鑿は後期以降の資料であることが推測されるが、他は時期が限定できる資料は確認できなかった。複数時期の資料が混在していると推測される。石材は、黒曜石7点（諏訪星ヶ台群2点、分析不可等1点、未分析4点）、ガラス質黒色安山岩3点である。黒曜石の産地未分析資料は、肉眼鑑定から信州産か、神津島産であることが推測される。

楔形石器（第99図345）

1点出土した。上下から両極剥離を行っており、下部の縁辺には明確な潰れが確認できる。上部は剥離の際の衝撃で失われている。角柱形に近い形状を呈している。石材は黒曜石である。産地は未分析であるが、肉眼鑑定から信州産であることが推測される。

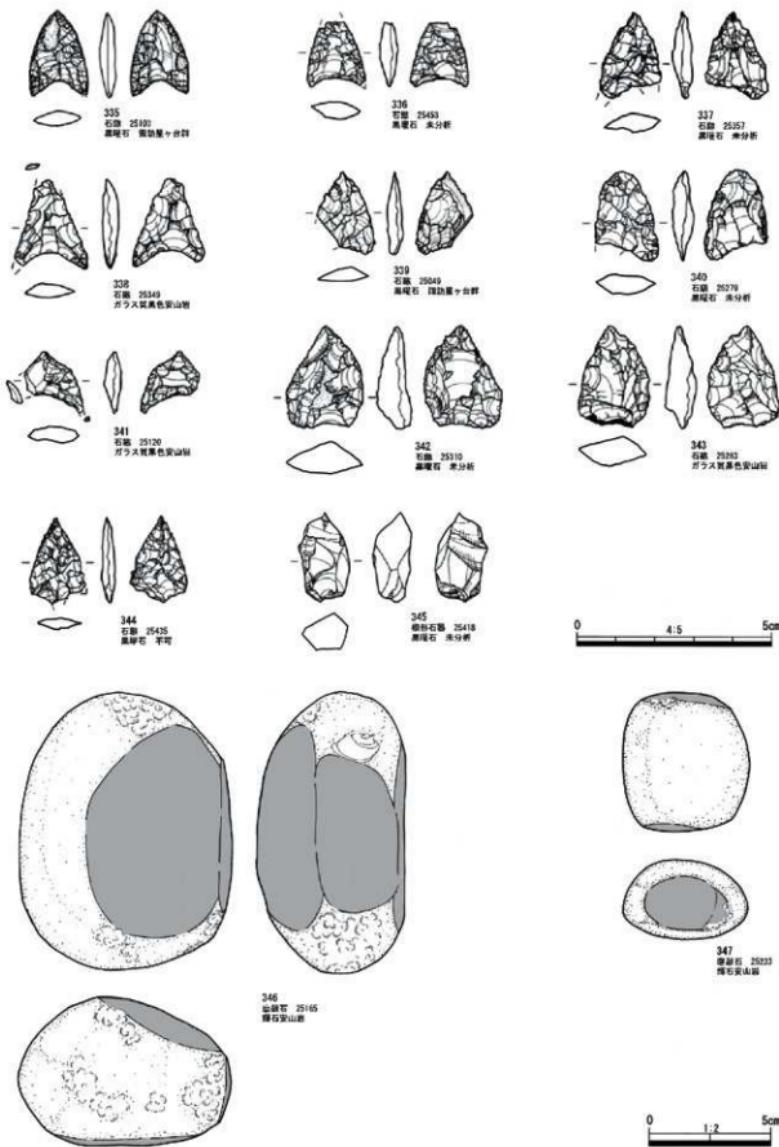
磨敲石（第99図346・347）

346は、厚みのある円盤を素材としており、平坦な広い面の表裏と、右側面に磨り面を有している。側面の磨り面は使用が顕著に確認され、平坦になっている。また端部には敲打痕も確認できる。

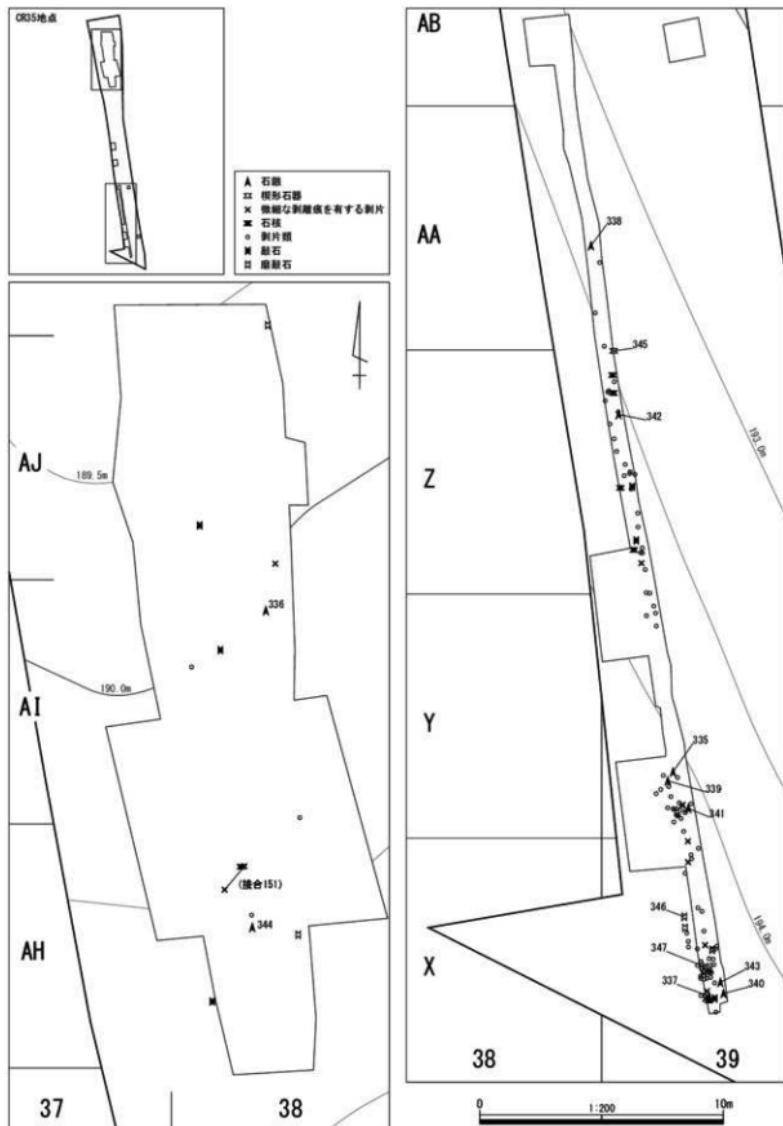
347は、やや平坦な小型のつぶて状の円盤を素材としており、その両端に磨り面が確認できる。磨り面は顕著であり、碟の形状そのものが変化している。磨り面の脇には敲打痕も確認できる。石材は2点とも輝石安山岩である。

第17表 謄文時代 石器組成表

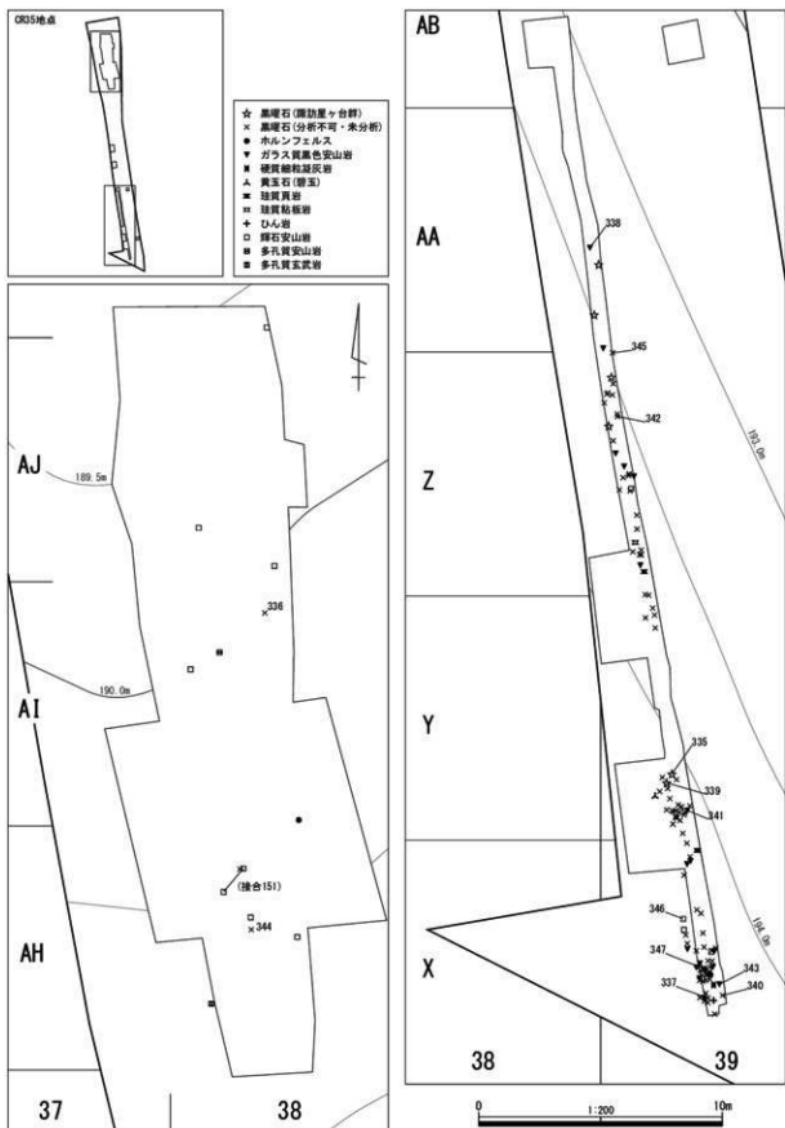
	未製品 石鑿	楔形石器	微細な 剥離痕を 有する剥片	石核	剥片類	敲石	磨敲石	計
黒曜石	諏訪星ヶ台群	2			1	3		6
	分析不可等	1						1
	未分析	4	1	6	5	67		83
ホルンフェルス						2		2
ガラス質黒色安山岩	3		2		13			18
硬質細粒凝灰岩						1		1
黄玉石（碧玉）						1		1
珪質真岩						2		2
珪質粘板岩						1		1
ひん岩						1		1
輝石安山岩			3		2	2	6	13
多孔質安山岩						1		1
多孔質玄武岩						1		1
計	10	1	11	6	91	6	6	131



第99図 繩文時代 出土石器



第100図 繩文時代 石器器種別分布



第101図 繩文時代 石器石材別分布

第18表 旧石器時代 石器一覧表

標図番号	図版番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	石材	産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	X座標	Y座標	Z座標
315	—	25427	KU	L-13	ナイフ形石器	(b)	未分析	22.5	11.5	5.3	0.98	-92396.244	35233.144	191.484

第19表 繩文時代 遺構計測表

遺構番号	グリッド	横出面	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	土層	石層	様	分類
92号土坑	AJ-38	—	1.87	1.00	—				調査未方形
26号集石	AI-38	FB	1.12	0.53	0.13				土坑あり
27号集石	AI-38	FB	1.02	0.76	0.16				土坑あり
28号集石	AI-38	FB	0.64	0.60	0.12				土坑あり

第20表 繩文時代 土器観察表

標図番号	図版番号	群	類	型式	文様調査等	縦	色調 (Hue)	胎土	グリッド
316	27	I		利ノ木山西式	先削竹管状工具による縦位の細次線。周囲を竹管状工具による波線で飾る。	有	7.5YR6/6	輝石、白雲母	D-14
317	27	I		利ノ木山西式	先削竹管状工具による細次線を複位。縦位の頃に施す。	有	10YR6/3	石英、白雲母、白色粒子、黒色粒子	D-14
318	27	II	a	野鳥式	縦位の波線を連続して施し、斜位の次線で區画。内外面に複数の条痕調査。	有	10YR4/2	輝石、白色粒子、黒色粒子	D-14
319	27	II	a	野鳥式	斜位の波線の下位に、半削竹管状工具による幅広の次線を複位に施す。内面に横位の条痕調査。	有	7.5YR5/4	輝石、白色粒子、黒色粒子、赤色岩片	C-14
320	27	II	a	野鳥式	波状口縫。半削竹管状工具による波縫。内部を斜位の次線で区画。一部を斜位の次線で充填。内外面に複数の条痕調査。	有	7.5YR3/1	輝石、白色粒子	C-14
321	27	II	a	野鳥式	波状口縫。標図20と同一個体と推測される。	有	10YR3/1	輝石、白色粒子、赤色岩片	B-14
322	27	II	a	野鳥式	重ねた細胞起縫上に斜位。周囲に縦位の細次線。斜位の次線を施す。	有	7.5YR5/4	石英、輝石、白色岩片、黒色岩片、赤色岩片	B-14
323	27	II	b	茅山下用式	屈曲形。上部に半削竹管状工具による剝突刃。その下位に細い竹管状工具による剝突刃。内面に複数の条痕調査。	有	5YR6/6	石英、輝石、白色粒子、赤色粒子	B-14
324	27	II	b	茅山下用式	屈曲形。上部に半削竹管状工具による剝突刃。その下位に斜位の細次線。屈曲形には複数の細胞起縫を施す。細胞起縫とその下位に、細い棒状工具による連結剝突。	有	7.5YR6/4	石英、輝石、白色岩片、赤色粒子	B-14
325	27	II	c	茅山上用式	屈曲部付近に横位の次線。直下に剝突刃。内面に横位の条痕調査。	有	7.5YR5/4	石英、輝石、白色粒子	B-14
326	27	II	c	茅山上用式	横位の波線を複数施し、3条1組の縦位の次線で上書き。内面に横位の条痕調査。	有	7.5YR4/2	石英、輝石、白色粒子	D-14
327	27	III	a	型式不明	波状口縫。内外面に横位の条痕を施す。外側の一部に縦位の条痕を上書き。	有	5YR4/2	石英、白色粒子、黒色粒子	B-14
328	27	III	a	型式不明	波状口縫。波状部は突起状。内外面に斜位の条痕調査。	有	7.5YR4/3	石英、輝石、白色粒子、黒色粒子	D-14
329	27	III	b	型式不明	原体Rの縦文を横位に施す。内面に斜位の条痕。	有	7.5YR6/6	石英、輝石、白色粒子	B-14
330	27	III	b	型式不明	原体Rの縦文を横位に施す。	有	7.5YR5/6	輝石、白色粒子	B-14
331	27	III	b	型式不明	波状口縫。波頂部に直位起縫。そこから細胞起縫が垂下し跡が残る。	有	7.5YR6/6	石英、輝石、白色岩片、赤色岩片	C-14
332	27	III	b	型式不明	くびれがある部に原体Rの縦文を施す。下部に半削竹管状工具による連続剝突刃を斜位に施す。	有	7.5YR5/4	石英、輝石、白色岩片	B-14
333	27	IV		勝板式	上部に半削竹管状工具による幅広の爪形刃。下部に上部より細い逆向きの爪形刃。それぞれを横位剝突状に施す。	無	7.5YR6/6	石英、輝石、白色粒子、黒色粒子、赤色粒子	E-13
334	27	V		型式不明	原体Rの縦文を斜位に施す。	有	7.5YR5/4	石英、輝石、白色粒子、赤色岩片	B-14

第21表 繩文時代 石器一覧表

標図番号	図版番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	石材	推定産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
335	28	25103	FB	C-14	石盤	(b)	SMD	29.2	14.7	6.7	0.98
336	28	25453	KU	M-13	石盤	(b)	未分析	16.8	15.2	4.1	0.97
337	28	25257	FB	B-14	石盤	(b)	未分析	21.3	16.1	4.9	1.16
338	28	25349	YL	E-13	石盤	GAn		23.3	18.3	3.9	1.16
339	28	25049	FB	C-14	石盤	(b)	SMD	24.1	14.5	11.3	0.89
340	28	25279	FB	B-14	石盤	(b)	未分析	22.9	16.7	5.5	1.60
341	28	25120	FB	C-14	石盤	GAn		16.0	14.2	4.0	0.67
342	28	25210	YL	D-14	石盤	(b)	未分析	25.6	20.0	8.5	3.51
343	28	25263	FB	B-14	石盤	GAn		26.0	18.9	7.5	3.49
344	28	25435	KU	L-13	石盤	(b)	不可	21.4	14.6	3.1	0.74
345	28	25418	KU	D-14	楔狀石器	(b)	未分析	21.1	13.1	9.9	2.49
346	28	25165	KU	B-14	磨歎石	An(Py)		112.8	86.8	60.5	925
347	28	25233	KU	B-14	磨歎石	An(Py)		56.9	51.2	32.8	150

第6章 まとめ

第1節 縄文時代

1 遺構

縄文時代の遺構で、明確に時期を特定することができたのは調査区北部で検出された住居跡のみである。その他に土坑、集石、焼土跡、石器集中が見つかっているが、これらの遺構覆土や範囲内から出土した土器や石器などの遺物が直接遺構に関係する資料かどうか不明であり、各遺構の帰属時期を特定するには至らなかった。そのため、これら遺構同士の同時期性や先後関係について判然としない部分が多い。

住居跡は1軒のみで、縄文時代中期の勝坂式土器（藤内式1段階）を伴う。床面と炉が二重に存在することから、改築が行われたことが推察できる遺構である。出土した遺物には、新道式期から藤内式期への移行的な資料や、長野県岡谷地方など遠隔地の影響を受けた土器が確認された。

土坑は調査区北部や南部で計80基が検出された。逆茂木の有無や平面・断面形状などにより大きく以下の5形態に分類可能であった。

- 1類：1本の逆茂木を有し、平面形状が円形、断面形状がバケツ状のもの
- 2類：複数の逆茂木を有し、平面形状が円形、断面形状がラッパ状のもの
- 3類：複数の逆茂木を有し、平面形状が長方形のもの
- 4類：逆茂木が確認できず、平面形状が円形、断面形状がバケツ状のもの
- 5類：逆茂木が確認できず、平面形状が長方形のもの

調査区の南、南西谷部から南尾根の南東部にかけては、2類にあたる20基の土坑がやや蛇行しながら列状に並んでいる。逆茂木を有していることから、狩猟用に意図的に配置された同時期の陥穴群であると考えられる。また、北尾根と中央尾根に挟まれた北谷部付近では、3類に該当する12基中9基がまとまって確認されており、2類同様、狩猟用に意図的に配置された同時期の陥穴群と推測される。

集石は25基が検出された。南尾根、南西谷部で多く確認されたが、特に南西谷部の密集度が高い。確認された集石の大半は検出面が栗色土層付近であるが、漸移層以下である集石もあり、複数時期の遺構が存在していると考えられる。また、集石構成礫は明確に赤化しており、被熱していると考えられる。南西谷部では、旧石器時代から礫群が多く確認されており、礫の採集箇所が近くに存在した可能性が窺える。

焼土跡は22基が検出された。南西谷部に比較的集中している。2、3基が近接して見つかっており、単独で検出されたものは少ない。これらがすべて人為的なものであるのかについては判然としないが、焼土の範囲は狭いため、山火事のように大規模で広範囲を焼くようなものではなく、限られた範囲が焼かれたものと思われる。また、検出面は漸移層以下のものと富士黒土層から栗色土層のものがあり、集石同様、複数時期の遺構が存在していると考えられる。

南西谷部で、隣接する2ヶ所の石器集中が確認された（1・2号）。漸移層から栗色土層にかけて上に大きな幅を持って分布しているが、出土のピークは富士黒土層の中部である。出土石器の石材は1号石器集中ではすべて黒曜石であり、2号石器集中でも大半が黒曜石である。出土した石器の大部分は微細な碎片であり、両極剥離によって出たプランクが多く含まれていることから、剥片剥離を行った作業場跡であると考えられる。微細な剥片が大半であったため、産地分析のできた出土黒曜石の数は限ら

れたが、1号石器集中では和田鷹山群や諏訪星ヶ台群が多く、2号石器集中でも諏訪星ヶ台群が突出して多いことが判明した。未分析の資料も同様の傾向にあることが、肉眼鑑定から推測される。

以上のように南西谷部には2類土坑群、集石、焼土跡、石器集中といった遺構が集中しており、また土器や石器など遺物の出土密集地帯でもあることから本遺跡範囲の中で最も積極的に利用された場所といえるだろう。

2 遺物

(1) 土器

土器は2,967点が出土した。縄文時代早期前半から晩期までの土器が確認され、複数時期に渡って断続して利用されていたことが明らかになった。最も出土量の多かった早期後半（II・III群）の資料は、土器全体の7割強を占めており、本遺跡が最も積極的に活用された時期と考えられる。II・III群土器は南尾根から南西谷部にかけて集中して出土しているが、型式分類のできたII群土器は型式ごとにある程度まとまった分布を見せていている。本遺跡で検出された住居跡は中期のものと考えられる1軒のみであるため、当地は人々が定住したというよりはキャンプ地として利用された可能性が高い。土器の分布状況から、特に早期後半においては時期によって人々の滞在域が異なっていたと推測される。

(2) 石器

石器は3,390点が出土したが、8割以上が剥片類であった。時期の特定できる石器は極めて少ない。石材は黒曜石が8割以上を占めており、未分析や分析不可等を除くと産地は5割以上が諏訪星ヶ台群であった。

製品類で最も多く確認されたのは石器で、未製品も含め183点が出土した。石器は調査区北部でも出土しているが、南尾根や南西谷部、中央尾根と南尾根に挟まれた中央谷部に集中しており、早期後半の土器（II・III群）の分布範囲とも重なることから、土器と同様、早期後半の資料が多く含まれていると推定される。逆茂木を有する一連の陥穴群の存在も考え合わせると、獵場として利用されていたことが窺える。

スクレイパーは、エンド、サイド、ノッチドの3形態に分類される資料が計33点出土したが、最も出土数が多かったのはサイド・スクレイパーで、23点が確認された。また、土掘り具とされる打製石斧も出土しているが出土数は15点と、遺跡内で確認されている土坑の数に比べて少ない。

第2節 弥生時代以降

1 遺構

南尾根からは2基の土坑が検出された。また、調査区北部や中部で8基の円形土坑が確認されており、北尾根と中央尾根の間で4基、中央尾根と南尾根の間で3基と、1基を除いた7基が谷部に集中している。円形土坑は愛鷹山周辺で多く確認できる遺構であり、古代以降に比定されると思われる。墓坑、貯蔵穴、水溜り用、トイレ等の諸説が考えられているが詳細は不明であり、当遺跡で検出された円形土坑からもそれらを特定することはできなかった。

北尾根と中央尾根に挟まれた北谷部の斜面や南尾根を中心として48基の小穴が検出された。北谷部では3～5基がまとまって列状に並んで配置されているようにも見える。南尾根では2、3基ずつがまとまって検出されているが、その意図や性格については不明である。

2 遺物

弥生時代以降のものと考えられる遺物もまた、遺構と同様に少ない。時期が特定できる遺物として、壺の底部1点と有孔磨製石錐2点が出土した。いずれも弥生時代後期に帰属するものと思われるが、壺は底径が小さく、焼成が良いことから後期前半の資料と考えられる。

縄文時代に比べ弥生時代以降に位置づけられる遺構・遺物数は明らかに貧弱であり、土器の出土数が1点となる縄文時代晚期以降、当地はそれほど活用されず、徐々に廃退していったものと思われる。

第3節 C R35地点

1 旧石器時代

旧石器時代に帰属する可能性のある遺物は、黒曜石製のナイフ形石器1点である。調査範囲北側の南端より出土した。産地分析は行っていないが、肉眼鑑定から箱根畠宿群の資料であると推測される。遺構は確認できなかった。

2 縄文時代

(1) 遺構

調査範囲の北側で土坑1基と集石3基が検出された。3基の集石は近接しており、いずれも検出面が富士黒土層であることから同時期の遺構と考えられる。

(2) 遺物

土器の出土総数は186点であるが、1点を除き、調査範囲の南側から集中的に出土している。胎土に繊維を含み、条痕文、沈線文が施されている例が多く、186点中181点が早期後半の資料である。早期後半の資料として、野島式土器、茅山下層式土器、茅山上層式土器が確認された。

石器は131点が出土した。製品類は少なく、大半が微細な剥片か碎片であった。また、石材は黒曜石が全体の7割近くを占めるなど、他の石材に比べ明らかに割合が高いことがわかる。黒曜石の大半は未分析であるが、透明度が高い資料が多く、信州産の割合が高いことが推測される。

参考文献（五十音順）

論文

- 赤塙仁 1996 「諸磯b・c式土器の変遷過程」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 愛鷹ローム団研グループ 1969 「愛鷹山麓のローム層：東名高速道路工事現場を中心として」『第四紀研究』第8卷第1号
- 今村啓爾 2000 「諸磯c式の正しい編年」『土曜考古』第24号 土曜考古学研究会
- 岩崎義信 2003 「右燃り・左燃り－縄文の土器文様と紐の燃り－」山形県長井市教育委員会
- 小崎晋 2004a 「縄文早期東海系土器群と広域編年（1）－広域編年の作成に向けて－」『伊勢湾考古』18 知多古文化研究会
- 小崎晋 2004b 「静岡県における縄文中期中葉から後葉への移行期の様相」『シンポジウム 縄文集落研究の新地平3－勝坂から曾利へ－発表要旨』縄文集落研究グループ セツルメント研究会
- 猿津海祥・瀬川裕市郎・関野哲夫・杉山治夫 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1、沼津市歴史民俗資料館
- 末木健 2010 「縄文中期の抽象文世界－龍か山椒魚か頬か－」『研究紀要』26 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

報告書等

- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985 「茶ノ木畠遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第8集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996a 「下原遺跡II」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第72集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996b 「北神馬土手遺跡他I」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第74集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 「北神馬土手遺跡他II」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第89集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 「上ノ池遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第99集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 「池田B遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第122集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a 「鉄平遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第137集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003b 「大岡元長塚園関連遺跡I 桜畑上遺跡 中峯遺跡 柏庭B遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第138集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003c 「寺林遺跡・虎杖原古墳」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第142集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 「上松沢平遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第145集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 「西山遺跡 第二東名No.2地点」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第170集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007a 「佛ヶ尾遺跡 第二東名No.147地点」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第175集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007b 「向田A遺跡 第二東名No.140地点」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第178集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008a 「元野遺跡 第二東名No.19地点」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第189集
- 財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b 「下ノ大庭遺跡 第二東名No.146地点」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第190集

- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008c『老平遺跡 第二東名No.145地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第192集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008d『裾野市富沢・桃園の遺跡群 塚松遺跡（第二東名No.144地点）入ノ洞B遺跡（第二東名No.144-2）内野山V遺跡（第二東名No.144-3）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第193集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008e『梅ノ木沢遺跡I（縄文時代以降編） 第二東名No.143-2地点、C R35地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第194集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009a『矢川上C遺跡 第二東名No.39-II地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第200集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b『大岡元長窓線関連遺跡III 野台南遺跡 柏窪A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第205集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c『梅ノ木沢遺跡II（旧石器時代編） 第二東名No.143-2地点、C R35地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第206集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009d『桜畠上遺跡 第二東名No.1地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第208集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009e『丸尾北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第210集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a『細尾遺跡 第二東名No.141地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第222集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b『桜畠上遺跡I（旧石器時代～縄文時代草創期編）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第224集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c『富士石遺跡I 第二東名No.142地点 旧石器時代（AT下位）編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第232集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010d『梅ノ木沢遺跡III（旧石器時代編2・縄文時代草創期編） 第二東名No.143-2地点、C R35地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第233集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011a『八分平E遺跡 第二東名No.141-2地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第243集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2011b『桜畠上遺跡II』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第245集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012a『富士石遺跡II 第二東名No.142地点 旧石器時代（AT上位）～縄文時代初期編』静岡県埋蔵文化財センター調査報告第3集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2012b『富士石遺跡III 第二東名No.142地点 縄文時代以降編』静岡県埋蔵文化財センター調査報告第7集
- 静岡県埋蔵文化財センター 2013『裾野市富沢・桃園の遺跡群II 富沢内野山I西遺跡（第二東名土3地点）富沢内野山III北遺跡・富沢内野山IV西遺跡・富沢内野山V遺跡（第二東名C R36地点）』静岡県埋蔵文化財センター調査報告第31集
- 長泉町 1992『長泉町史 上巻』
- 長泉町教育委員会 1965『長泉町郷土誌』
- 長泉町教育委員会 1976『陣場上・平畦遺跡』
- 長泉町教育委員会 1978『西願寺遺跡（A地区）・長久保城址（二の丸）』
- 長泉町教育委員会 1979『下長窪上野遺跡』
- 長泉町教育委員会 1981『八分平B・富士石遺跡』
- 長泉町教育委員会 1986『中尾・イラクネ・野台』

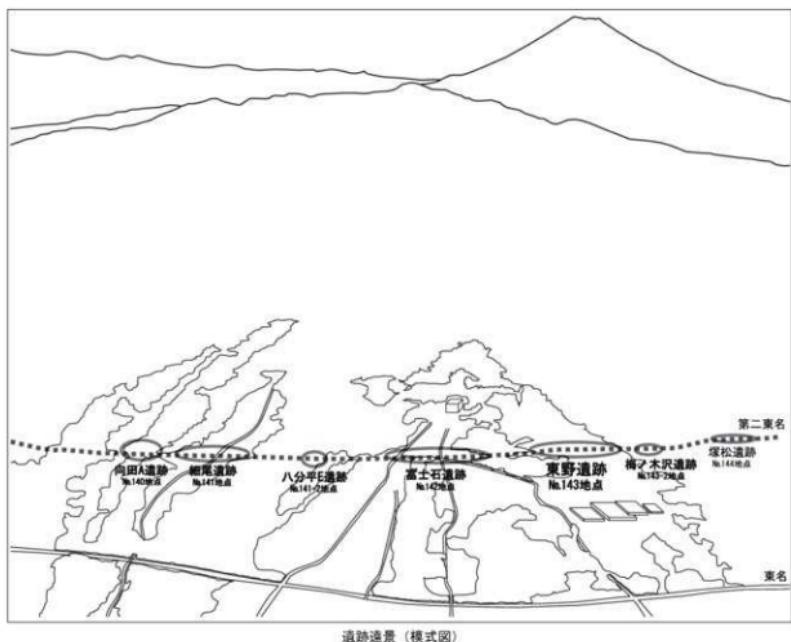
- 長泉町教育委員会 1989『富士石遺跡群』
- 長泉町教育委員会 1990『上山地遺跡』
- 長泉町教育委員会 1994『平駐遺跡・陣場上B遺跡』
- 長泉町教育委員会 2001『木戸遺跡・中見代遺跡・東野Ⅱ橋下遺跡』
- 長泉町教育委員会 2006『追平B遺跡』
- 沼津市教育委員会 1981『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第23集
- 沼津市教育委員会 1982『一般国道246号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第27集
- 沼津市教育委員会 1985『寺林南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第33集
- 沼津市教育委員会 1988『土手上・中見代第II・第III遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第43集
- 沼津市教育委員会 1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』沼津市文化財調査報告書第48集
- 沼津市教育委員会 1991『広合遺跡（e区）・二ツ洞遺跡（a区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第52集
- 沼津市教育委員会 1992『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書II』沼津市文化財調査報告書第53集
- 沼津市教育委員会 1993『二ツ洞遺跡（b・c区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第54集
- 沼津市教育委員会 1994『大谷津遺跡・井出丸山古墳発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第55集
- 沼津市教育委員会 1996『柏葉尾遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第61集
- 沼津市教育委員会 1998『拓南東遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第65集
- 沼津市教育委員会 2002『尾上イラウネ北遺跡（第2次）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第81集
- 三島市教育委員会 1999『初音ヶ原遺跡』

写真図版



1号住居跡出土土器

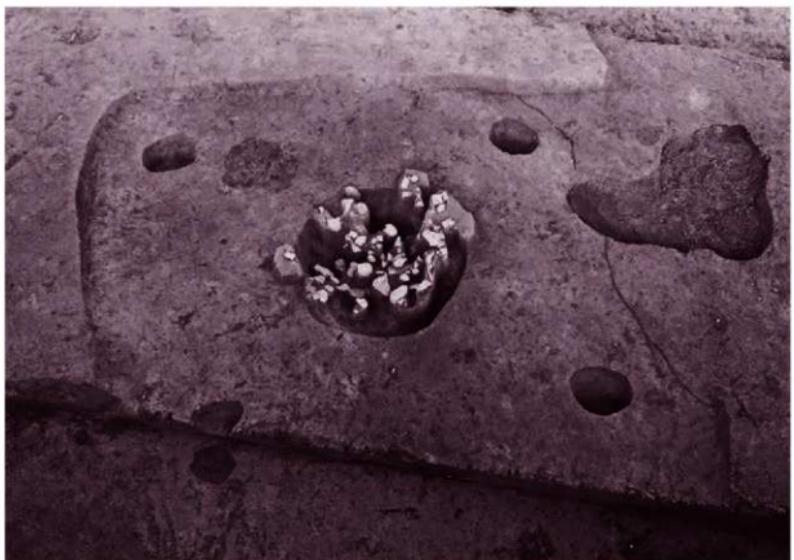
図版2





遺跡遠景

図版4



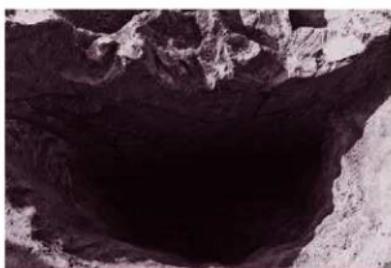
1号住居跡



1号住居跡内炉跡土層堆積狀況



1号住居跡内炉跡（薪：伊）完掘狀況



1号住居跡内炉跡と37号土坑土層堆積狀況



37号土坑完掘狀況



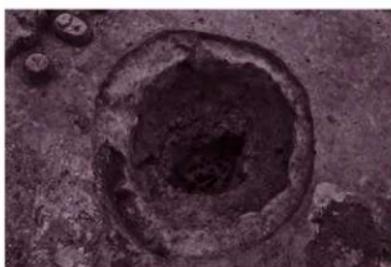
1号土坑完掘状況



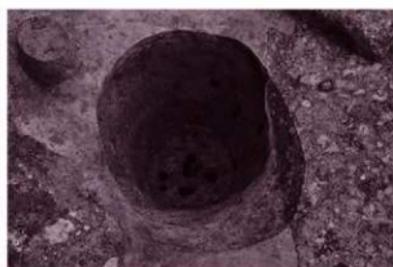
2号土坑完掘状況



6～21号土坑配置状況

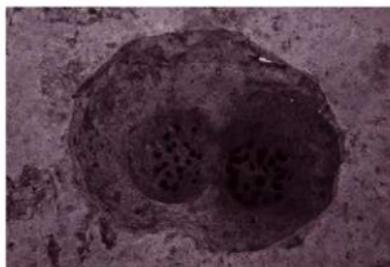


17号土坑完掘状況

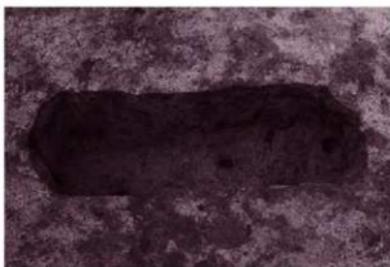


18号土坑完掘状況

図版 6



22・23号土坑完掘状況



28号土坑完掘状況



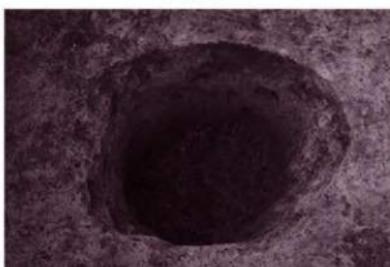
29号土坑完掘状況



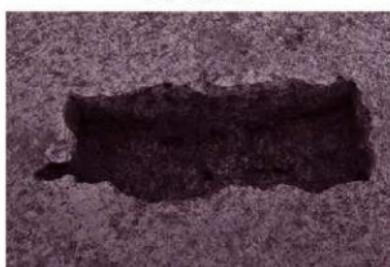
33号土坑完掘状況



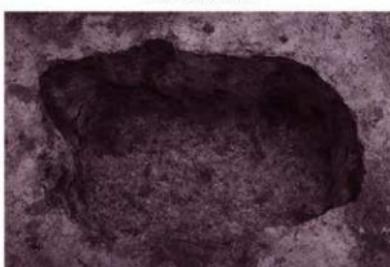
43号土坑完掘状況



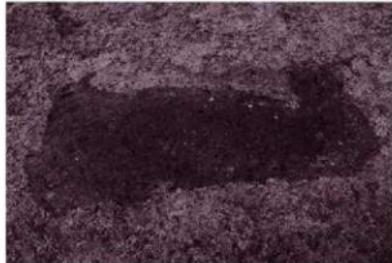
49号土坑完掘状況



66号土坑完掘状況



72号土坑完掘状況



76号土坑検出状況（東より）



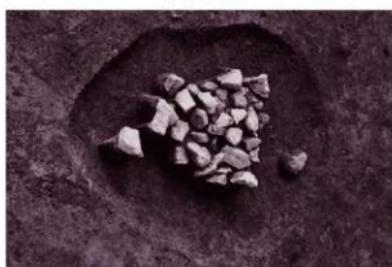
76号土坑土層堆積状況



76号土坑完掘状況



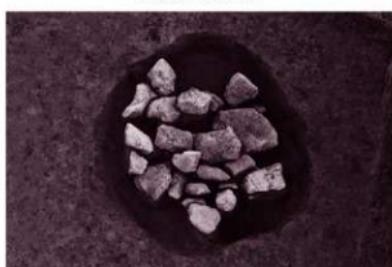
77・78号土坑土層堆積状況



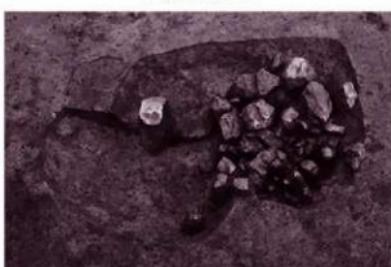
2号集石（南東より）



3号集石（東より）

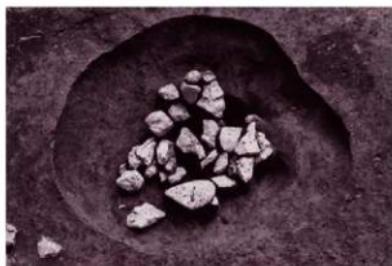


4号集石（西より）



5号集石・55号土坑（東より）

図版 8



6号集石（西より）



12号集石（南東より）



南西谷部18~25号集石配置状況（南より）

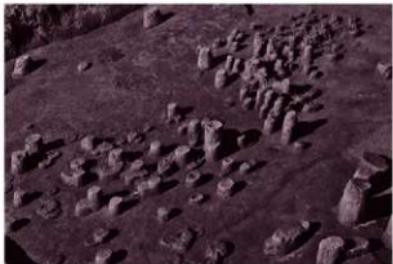


18号集石（東より）

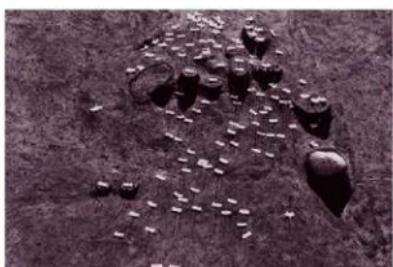
図版 9



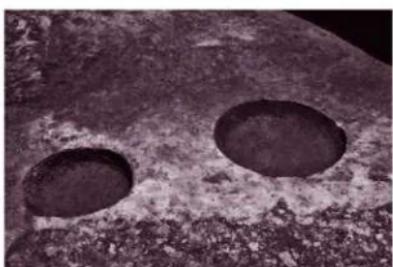
縄文時代南西谷部～南尾根遺物出土状況（南東より）



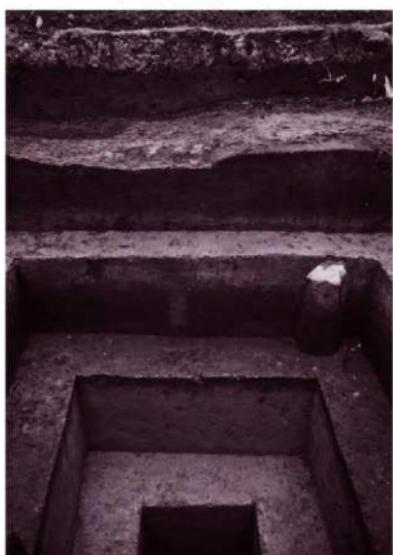
1・2号石器集中検出状況（南東より）



2号石器集中検出状況（西より）



弥生時代以降89・90号土坑配置状況

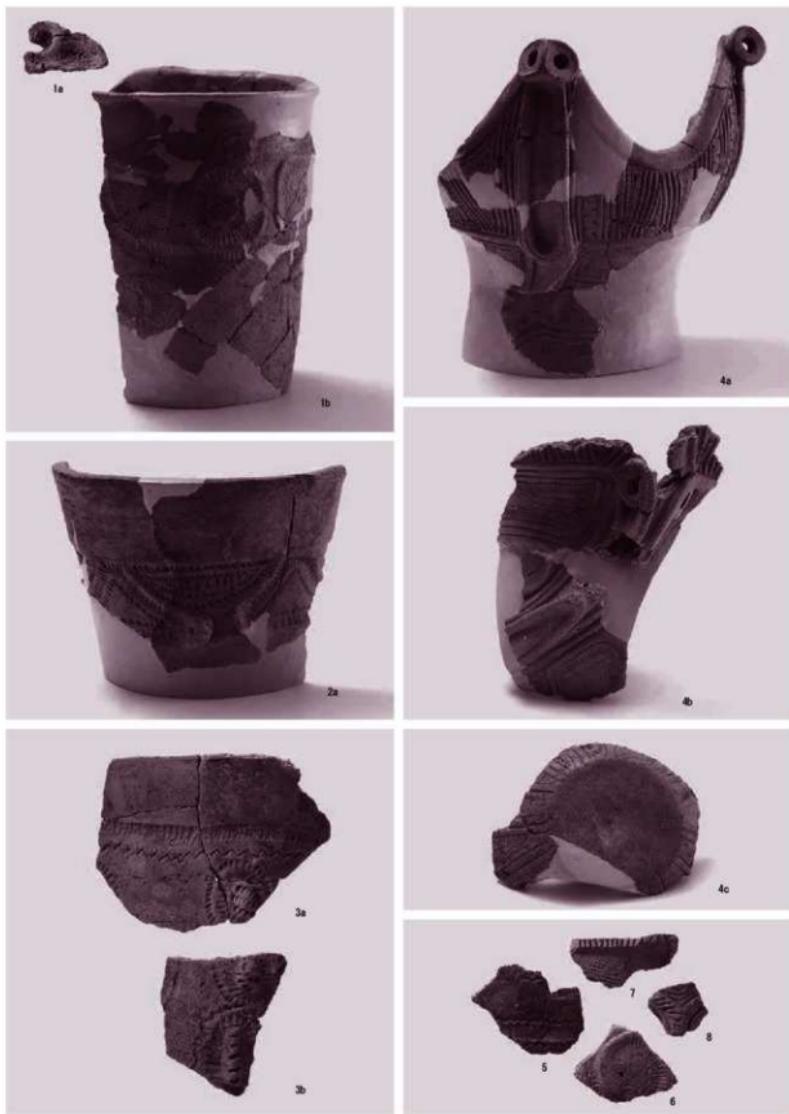


CR35地点テストピット土層堆積状況



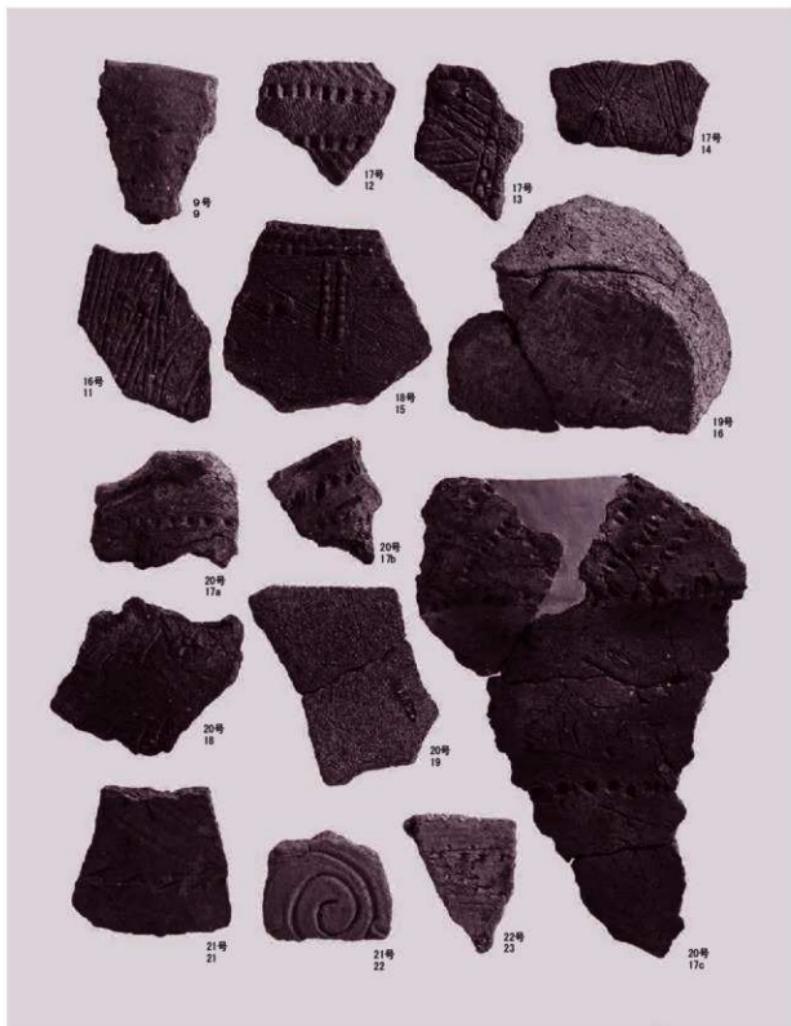
CR35地点27号集石

図版10



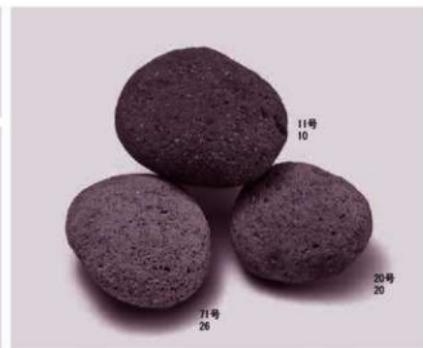
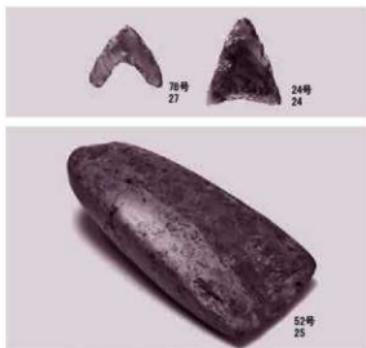
1号住居跡出土土器

図版11

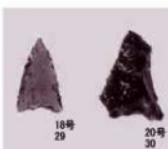
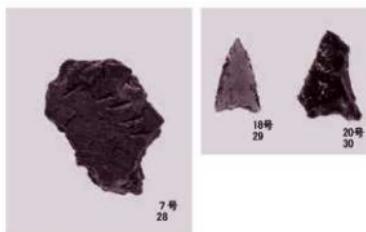


土坑出土土器

图版12

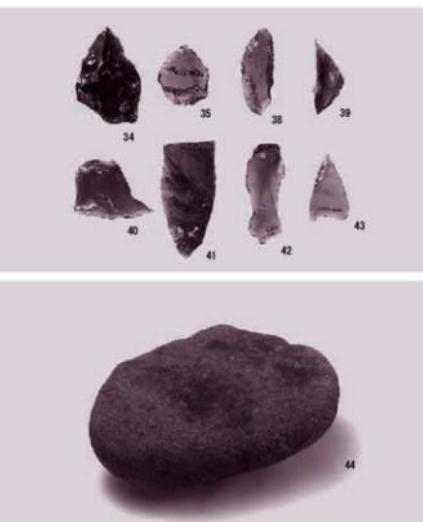
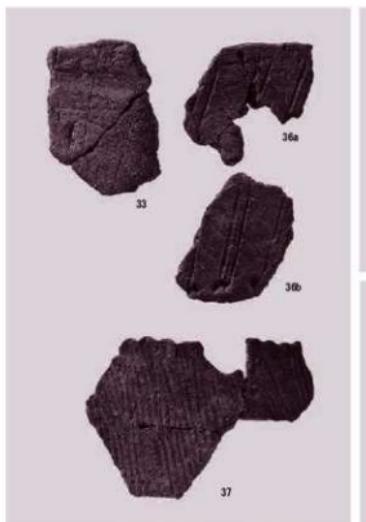


土坑出土石器

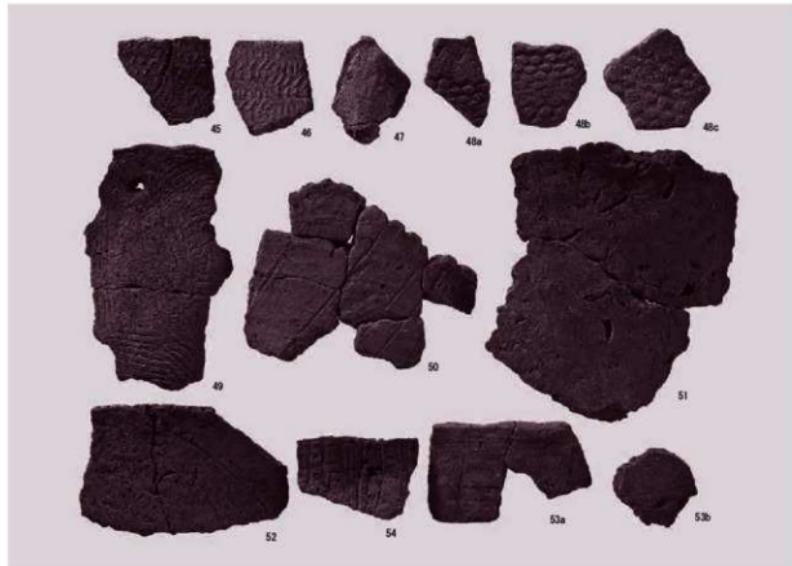


集石出土遗物

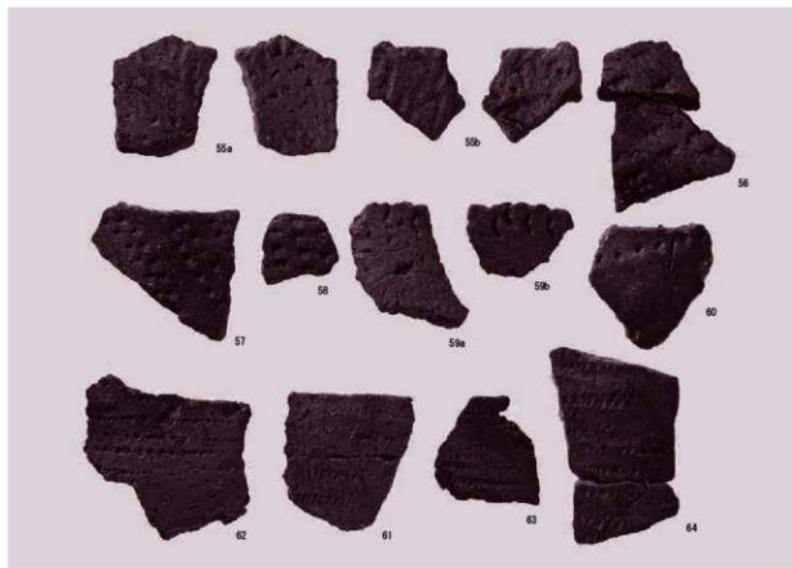
烧土迹出土遗物



石器集中出土遗物

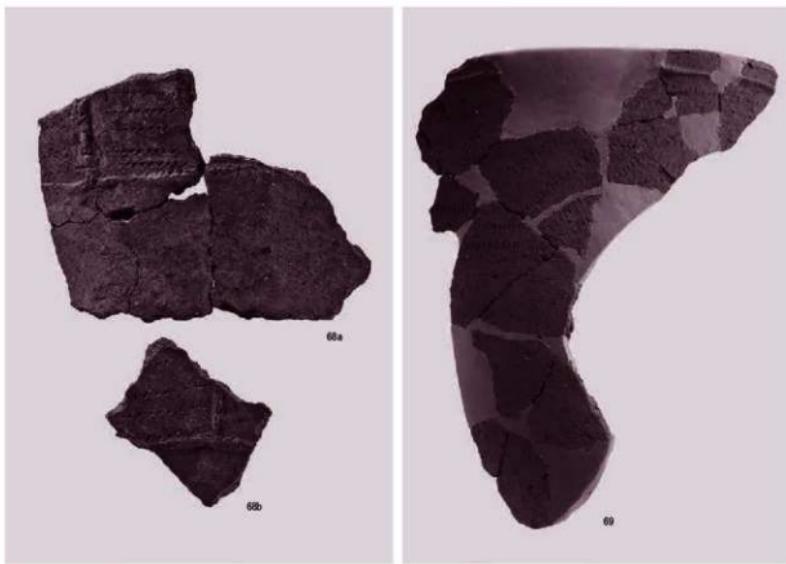
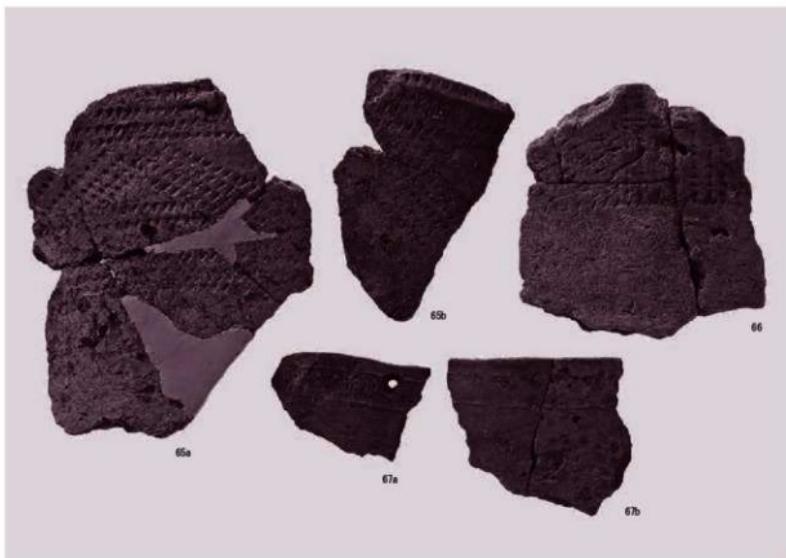


I群a・b・c類土器

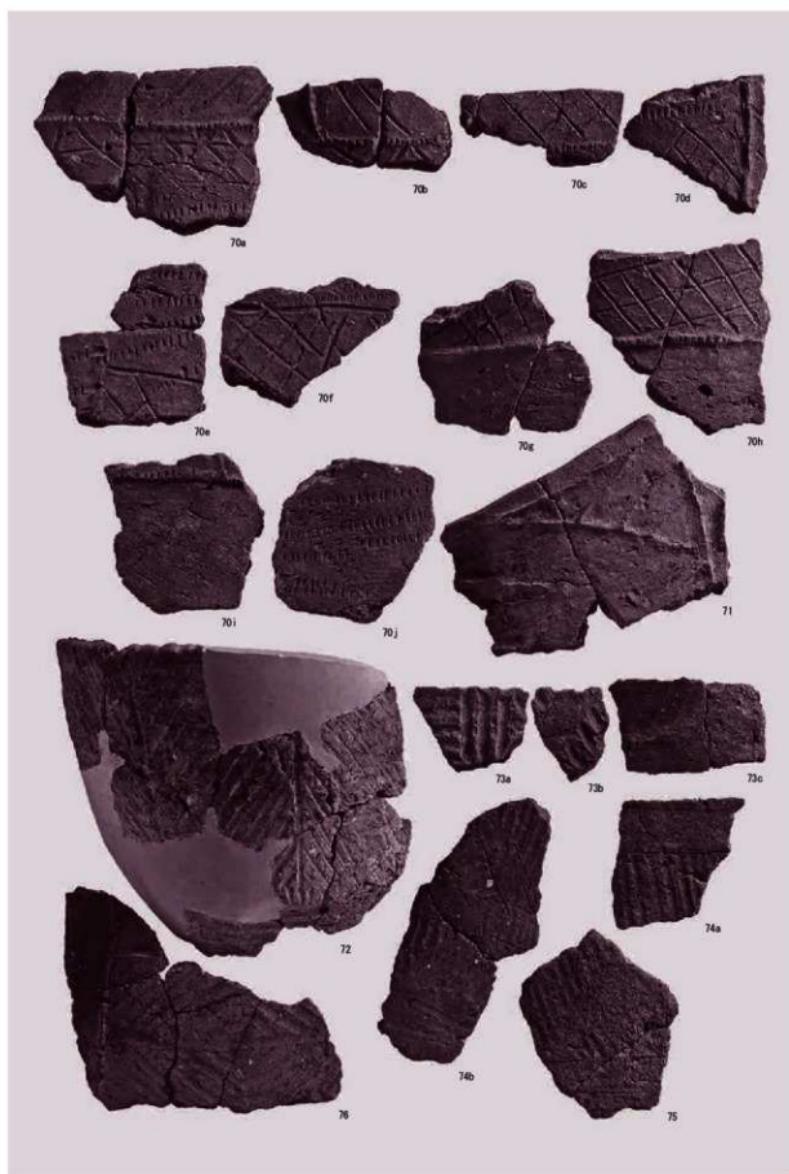


II群a・b類土器

図版14

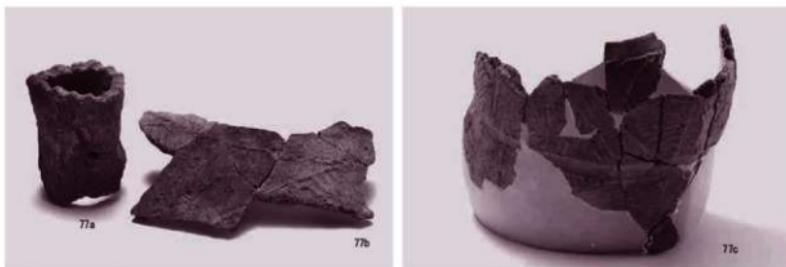


II群 b 類土器



II群b・c類土器

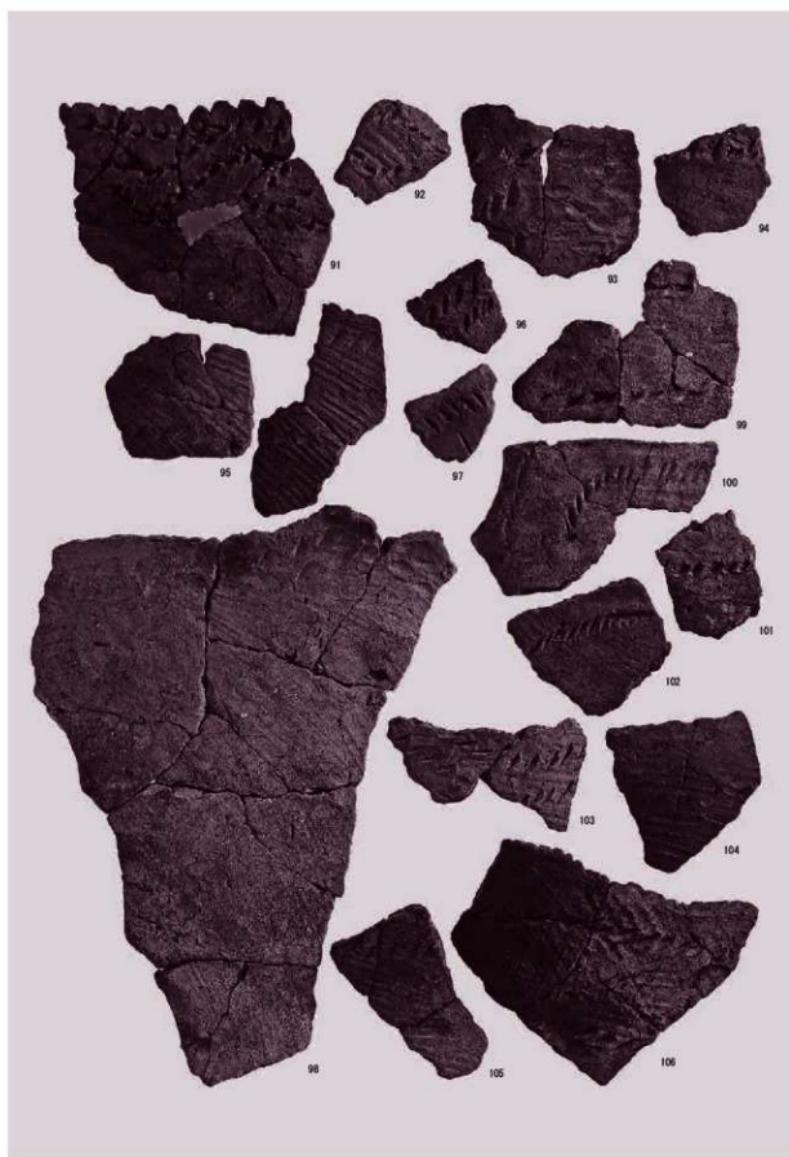
図版16



II群 d 頸土器

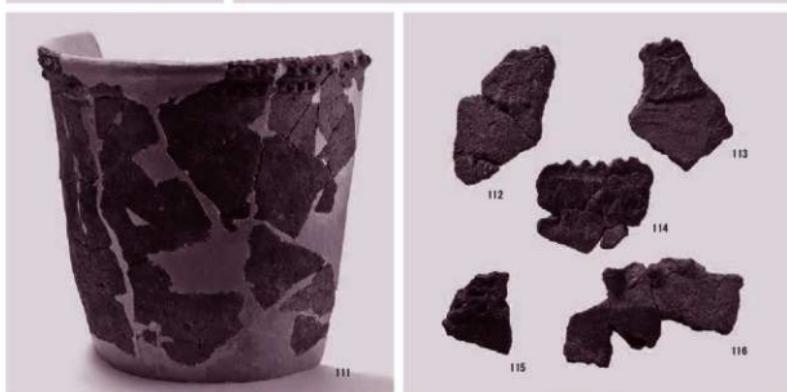
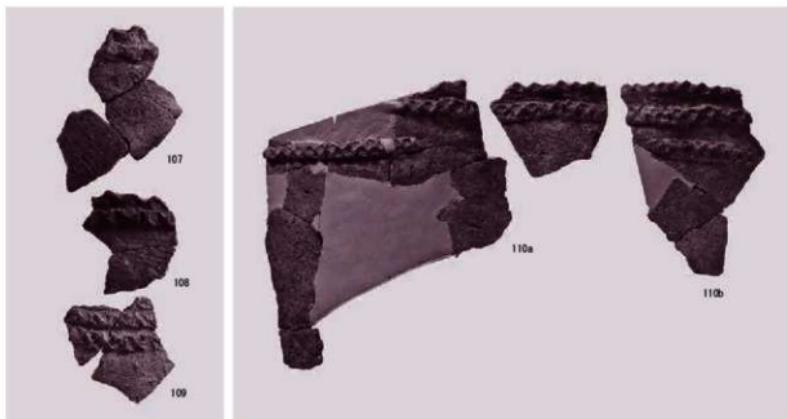


II 群 e・f 類土器

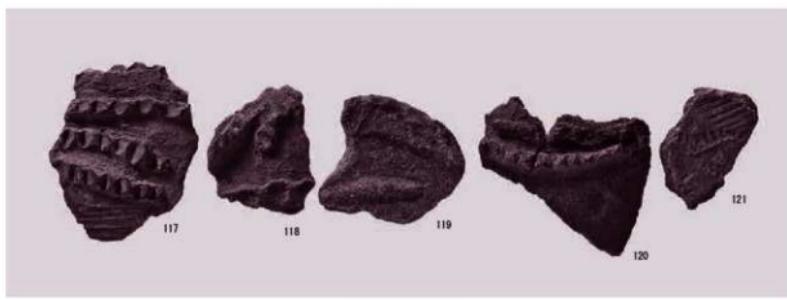


II群g・h類土器

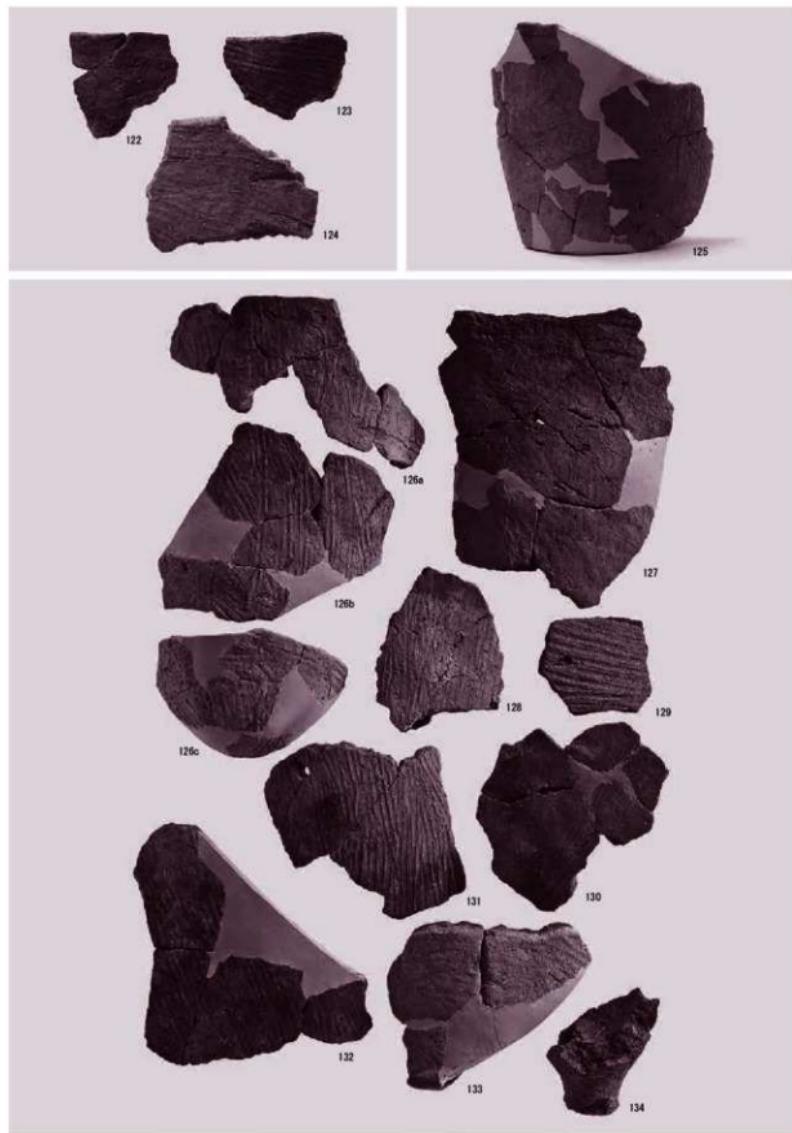
図版18



II群 i 領土器

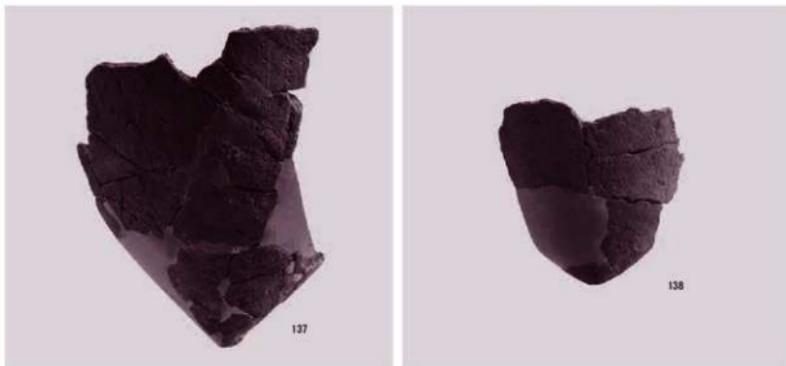
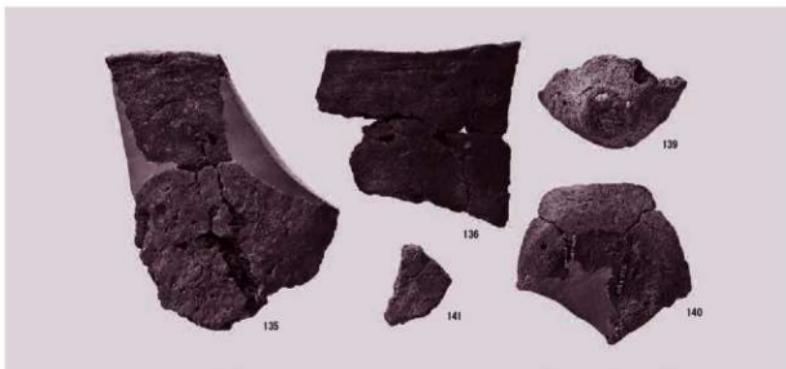


II群 j + k 領土器

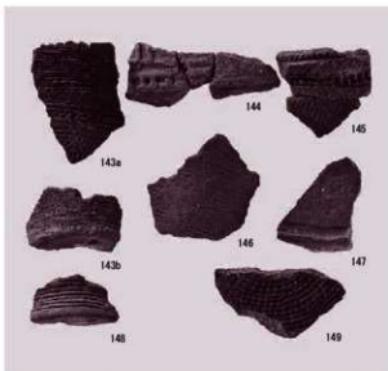
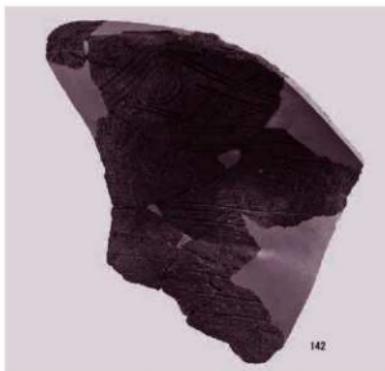


III群 1種土器

図版20

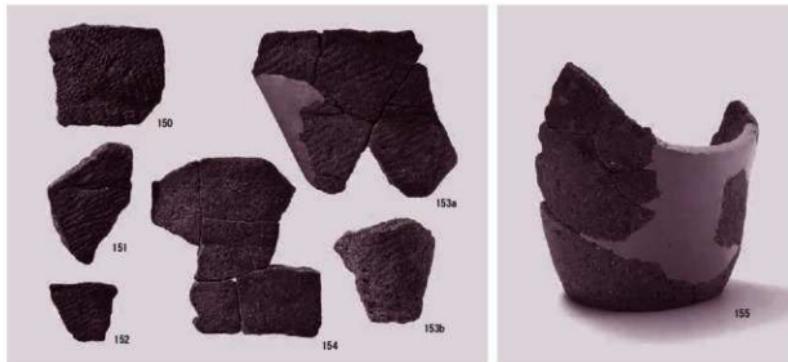


III群2・3種土器



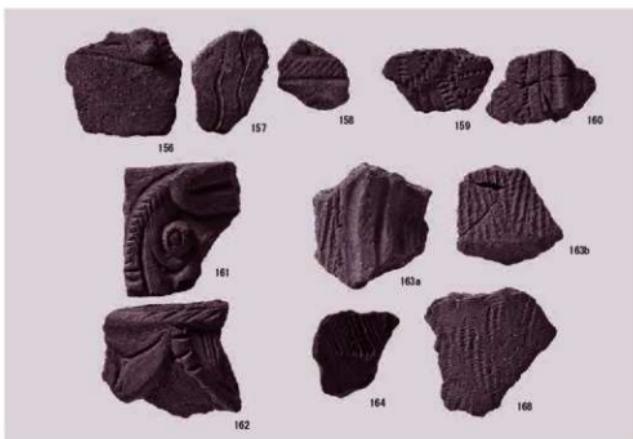
IV群b類土器

IV群b・d類土器



IV群 e類土器1

IV群 e類土器2

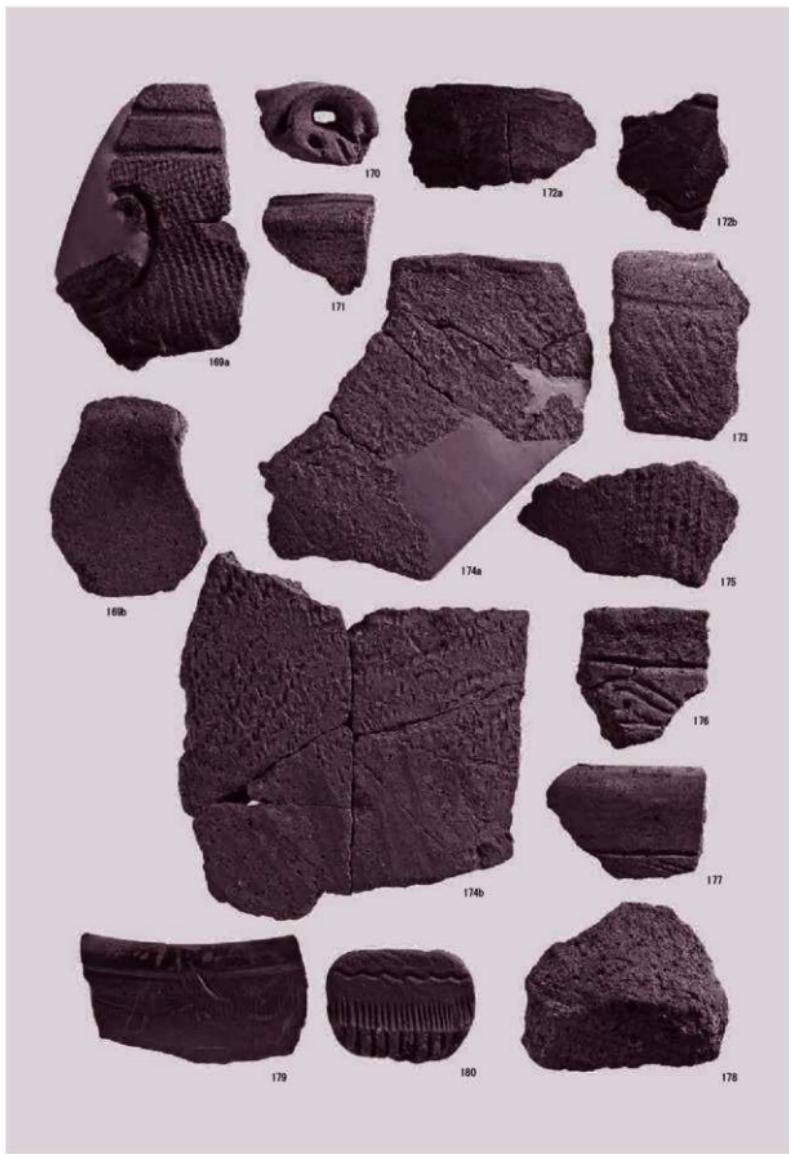


V群a・b・c・d類土器

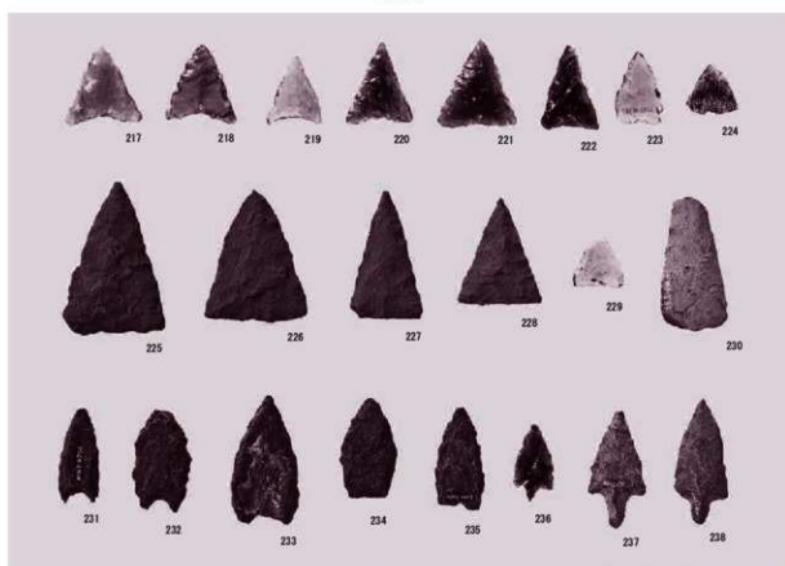
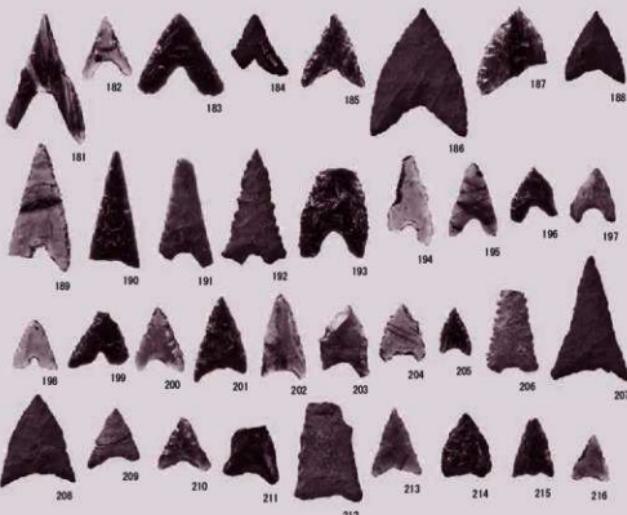


V群d類土器

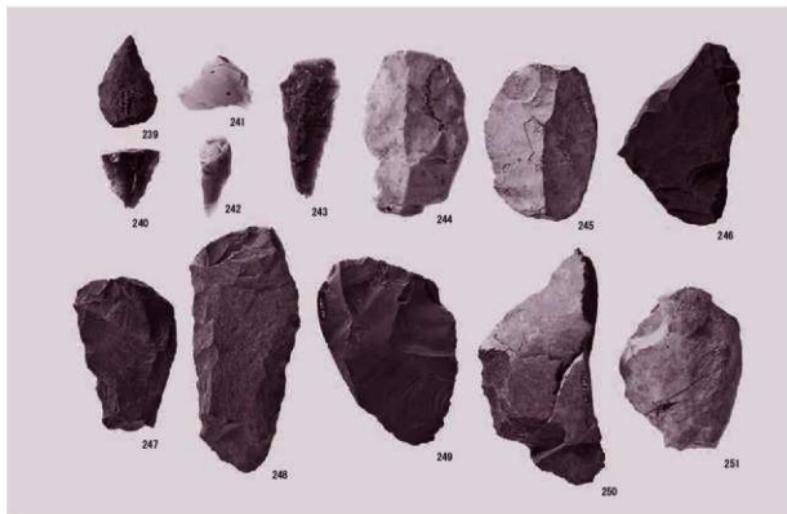
図版22



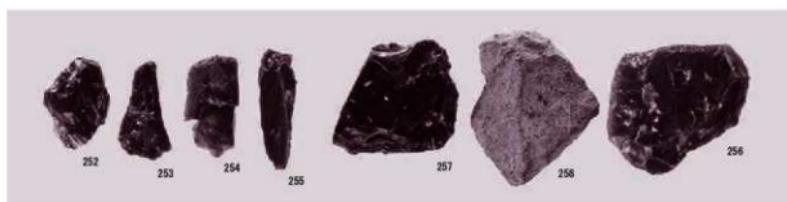
VI群 a・b・c類・VI群土器・土製品



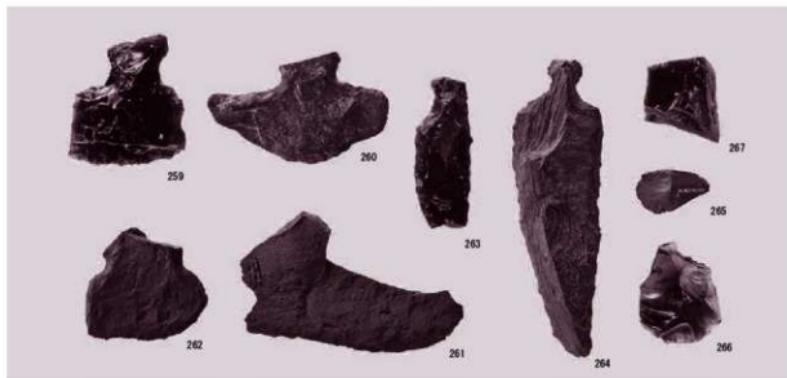
図版24



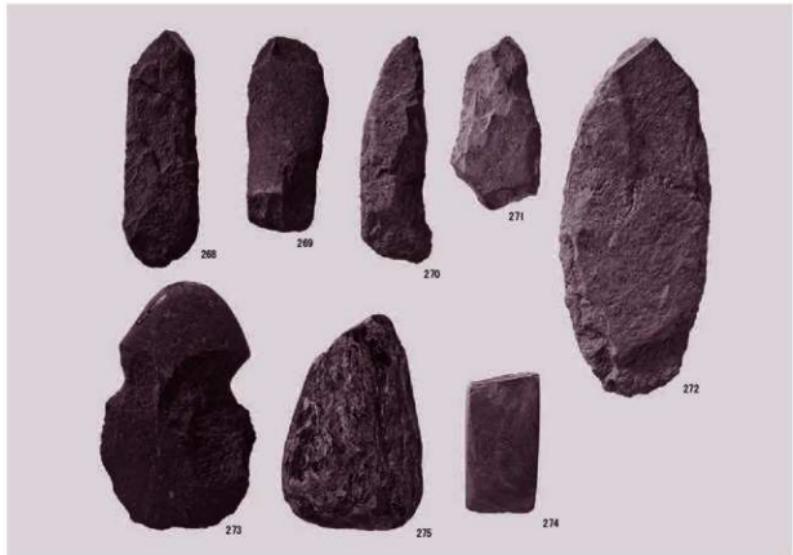
ドリル・サイド・スクレイバー



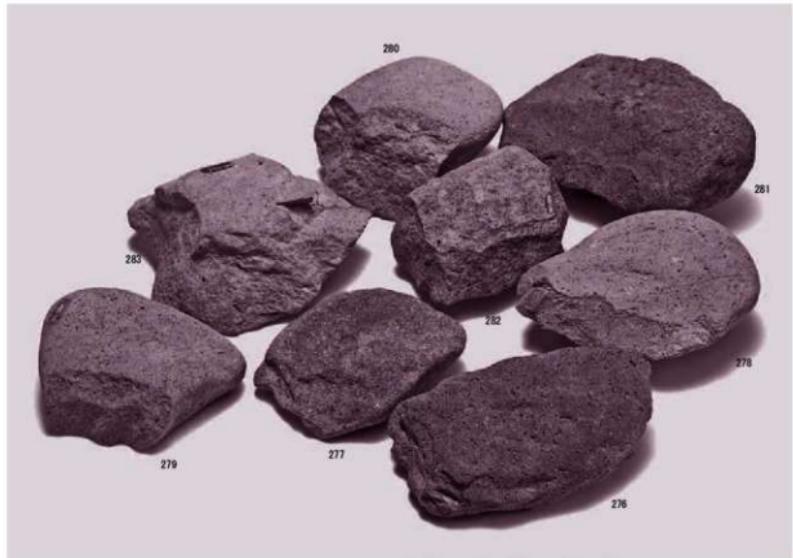
楔形石器



石匙・石核



打製石斧・磨製石斧



砾器

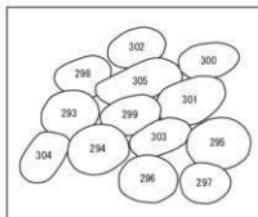
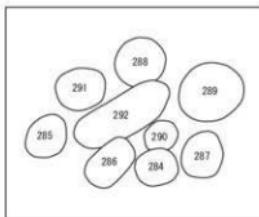
図版26



磨石・敲石



磨敲石



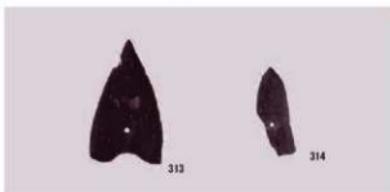
凹石



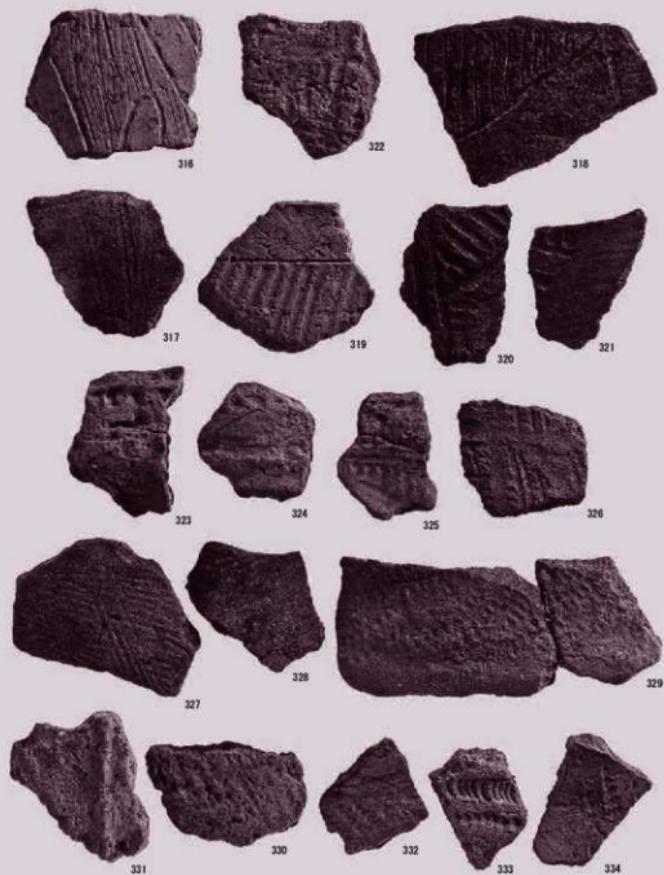
石皿



弥生土器

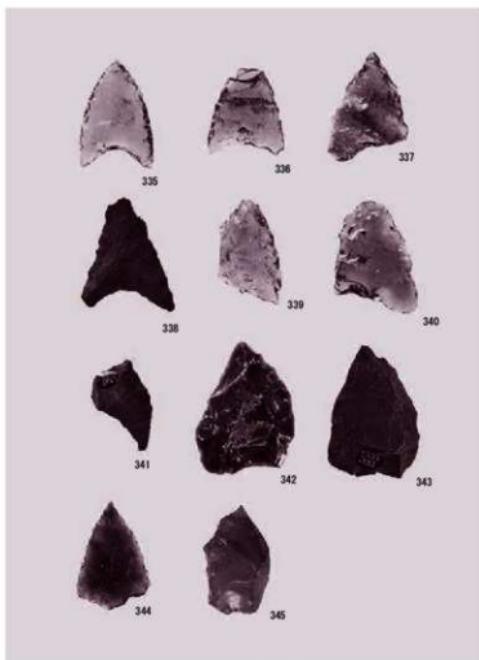


弥生時代有孔磨製石器



CR35地点出土土器

図版28



CR35地点出土石器



CR35地点出土磨敲石

報告書抄録

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第32集

東野遺跡 I

第二東名No143地点・CR35地点

縄文時代以降編・CR35地点編

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長泉町-12

平成25年3月25日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261㈹

FAX 054-262-4266

印 刷 所 文光堂印刷株式会社

〒410-0871 静岡県沼津市西間門68-1

TEL 055-926-2800